

薩摩加世田 奥山古墳の研究

2009

鹿児島大学総合研究博物館



薩摩加世田 奥山古墳の研究

橋本達也
藤井大祐
甲斐康大

竹中正巳
下野真理子
志賀智史

2009

鹿児島大学総合研究博物館



1 奥山古墳から見た加世田平野と金峰山



2 奥山古墳石棺 南西より



3 奥山古墳墳丘区画溝 東より



4 奥山古墳出土土器

序 言

2004年春に大隅地域において岡崎古墳群の調査を終えた後、私は次に薩摩地域での古墳時代墓制に関する研究を企てた。しかしながら、同時に岡崎古墳群の整理作業を進めなければならないことから、大掛かりではない調査を企図した。

当時、六堂会古墳と呼ばれていた本書で報告する奥山古墳は、昭和6年に石棺が発見され、昭和17年に報告がなされており石棺石材が一度地権者宅へ運ばれたといわれていた。そのような石棺であっても、南薩地域唯一の石棺であり、明らかな古墳時代墓制にかかわる遺構である。調査が古く実体が明確ではないことから、どういう石棺なのか再確認だけしておこうと調査に着手した。当初、石棺の調査に通常の埋葬施設としての労力は掛からないであろうことや、遺物は出土しないであろうことを見込んでいた。

しかし、昭和6年の発見者のご子息である現地権者、安藤眞幸さん、近隣集落の方々、私を含め六堂会古墳を知っていた大方の予想を裏切って、石棺は動いていなかった。また、現地地形から石棺が所在する台地先端部は完全に削平されているとみられたが、周溝底部付近は残っており、そこから土器群が出土するという予想外の展開をみた。

薩摩半島側の古墳時代墓制についてはいまだ不明な点が多い。この地域では古墳はごくわずかしか確認されていない。ここで具体的な古墳の実態を明らかにした点で古墳時代社会の境界領域はいかなるものであったかを考察する上できわめて重要な資料を提供できたと思う。それは、とりもなおさず日本列島における社会的な一体性が生み出される過程、古代の国家形成過程に関わる問題の一端に迫るものである。

この調査では、安藤眞幸さんをはじめ、山崎滋美 公民館長を代表とする地元の小松原集落の方々、加世田市教育委員会から多くの暖かいご支援があった。また、調査には鹿児島大学生のほか、さまざまな大学の考古学研究室からのご支援をいただき、多くの大学生の参加があった。ここに成果を著せるのも、所属はさまざまな考古学専攻の学生諸君とそれを支援していただいた方々の力があってこそその賜であることを明記し、謝意を表したい。

2009年3月

鹿児島大学総合研究博物館
橋本達也

例 言

1 本書は南さつま市加世田小湊に所在する奥山古墳において実施した学術発掘調査の報告書である。なお本古墳は調査時には、六堂会古墳と呼称されていた。よってこれまで六堂会古墳と報告したものがあるが、調査終了後 2005 年に加世田市（現・南さつま市）が呼称を変更している。

2 発掘調査は 2004～2005 年度、鹿児島大学総合研究博物館 助教授（現・准教授）橋本達也を研究代表者とする科学研究費補助金 萌芽研究『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の多角的研究』によって学術調査として実施した。

整理作業は同研究および 2006～2008 年度の科学研究費補助金 若手研究 A『前方後円墳築造周縁域における境界領域の構造に関する研究』、鹿児島大学総合研究博物館公費を利用して実施している。

3 発掘調査は橋本を調査主体者とし、加世田市教育委員会（現・南さつま市、2005 年 11 月合併）の協力を得て実施した。調査期間・参加者および協力者は本文第 1 部に述べる。

4 本書は藤井大祐（鹿児島大学総合研究博物館）・甲斐康大（大野城市教育委員会）とともに主として橋本が編集した。

人骨の分析は竹中正巳氏・下野真理子氏（鹿児島女子短期大学）、赤色顔料の分析は志賀智史氏（九州国立博物館）に協力いただき実施した。本書の執筆はこの 6 名で行った。

5 整理作業参加者は本文第 1 部に記すが、作業は橋本達也のほか、藤井大祐・甲斐康大が中心に行った。

6 本書をもって正式報告書とする。これまでに発表していた内容と齟齬がある場合は本書の記述をもって正式なものとする。

7 調査に関する図面・写真等の記録、出土遺物は鹿児島大学総合研究博物館で収蔵・保管し、随時公開活用を行っている。

目次

巻頭図版

序言

例言

第1部 奥山古墳の調査経緯と周辺環境	1
第1章 調査経緯	
1. 調査に至るまで	3
2. 調査の経過	4
(1) 調査の進行	4
(2) 第1次調査	4
(3) 第2次調査	4
3. 調査体制	4
(1) 第1次調査参加者	4
(2) 第2次調査参加者	4
(3) 整理作業	5
4. 調査の公開と成果報告	5
(1) 現地の公開	5
(2) 成果発表	5
5. 謝辞	6
第2章 奥山古墳の研究史と地理的環境	
1. 奥山古墳における既往の調査	7
2. 昭和17年報告再録	8
3. 地理的環境	10
第3章 加世田平野周辺の遺跡	
1. 考古学的環境	13
(1) 概要	13
(2) 旧石器時代	13
(3) 縄文時代	13
(4) 弥生時代	15
(5) 古代・中世	16
(6) 近世・近代	18
2. 薩摩半島の古墳時代	18
(1) 概要	18
(2) 上水流遺跡	18
(3) 白糸原遺跡	20
(4) 吹上地域の古墳時代集落	20
(5) 指宿・枕崎地域の古墳時代遺跡	21
(6) 鹿児島平野の古墳時代遺跡	22
(7) 川内平野の古墳時代墓制	22
(8) 薩摩地方北部の古墳時代墓制	23
第2部 奥山古墳の調査	25
第1章 調査前の状況と測量調査	
1. 調査前の管理状況	27

2. 測量調査	27
第2章 主体部－石棺－	
1. 主体部調査区の設定	29
2. 石棺	29
(1) 残存状態	29
(2) 形態・規模	33
(3) 構築方法・加工痕	34
(4) 石棺石材	35
(5) 石棺のまとめ	35
3. 出土遺物	36
(1) 概要および出土状況	36
(2) 鉄剣	36
(3) 刀子	38
(4) 玉	38
(5) 人骨	38
(6) 赤色顔料	38
第3章 墳丘構造	
1. トレンチの設定	39
(1) 第1次調査	39
(2) 第2次調査	39
2. トレンチ各説	39
(1) 墳丘北側	39
(4) 墳丘南側	39
(5) 南トレンチ	42
(3) 墳丘西側	42
(2) 墳丘東側	42
3. 墳丘のまとめ－埋葬施設と墳丘構造の復元－	46
(1) 墳丘形態と規模	46
(2) 墳丘区画溝と渡り土手	46
第4章 南トレンチ土器群	甲斐康大 47
1. 遺物出土状況と組成	47
2. 遺物各説	47
3. 小結－墳丘南側祭祀空間－	52
第5章 古墳時代以外の出土遺物	
1. 古墳以前の遺物	53
2. 古墳以後の遺物	53
3. 小結－古墳の前後－	53
第6章 鹿児島県南さつま市奥山古墳出土の人骨	竹中正巳・下野真理子 55
(1) はじめに	55
(2) 人骨の所見	55
第7章 奥山古墳の赤色顔料について	志賀智史 56
(1) はじめに	56
(2) 調査方法と調査結果	56
(3) まとめと考察	57
第3部 考察	61
第1章 古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質	
－板石積石棺墓を中心に－	藤井大祐 63

1. はじめに	63
2. 「地下式板石積石室墓」の名称と定義	63
(1) 「石室」と「石棺」	64
(2) 「地下式」という用語	66
3. 板石積石棺墓の特質	67
(1) 平面形態にみられる多様性	67
(2) 平面方形の板石積石棺墓と箱式石棺 - 石棺規模、長軸と短軸の比率 -	68
(3) 分布地域	70
4. 板石積石棺墓の副葬品の検討 - 鉄鏃を中心に -	70
(1) 研究史と課題	70
(2) 鉄鏃	70
(3) その他の副葬品	72
(4) 段階設定	72
5. 薩摩地域における石棺墓の展開	73
6. 結語 - 薩摩地域における古墳と奥山古墳の位置づけ -	76
第2章 奥山古墳出土土器の系譜とその背景	甲斐康大 81
1. はじめに	81
2. 奥山古墳出土土器の様相とその系譜・時期	81
(1) 奥山古墳出土土器の諸特徴	81
(2) 宇土半島周辺古墳・集落出土土器	82
(3) 宇土半島基部地域以北の同時期資料との比較	86
3. 薩摩半島西・南部の古墳時代前期土器	87
(1) 古墳時代前期の在地土器	87
(2) 九州南部の外來系土器の様相	89
4. 奥山古墳出土土器の意義	90
第3章 薩摩地域の古墳時代墓制と地域間交流	橋本達也 92
1. はじめに	92
2. 薩摩の古墳時代墓制と社会	92
(1) 石棺墓としての奥山古墳の被葬者像	92
(2) 薩摩地域の古墳	92
(3) 薩摩地域の古墳時代墓制	94
(4) 古墳と首長系譜	95
3. 薩摩地域の土器をめぐって	95
(1) 穿孔土器	95
(2) 土器の搬入状況	96
4. 薩摩地域をめぐる広域交流	98
(1) 薩摩地域と南海産貝製品	98
(2) 南島交流路の変動	99
5. 結語 - 隼人論との関わりとともに -	100
第4部 奥山古墳の研究総括	104
1. 発掘調査の成果	104
(1) 埋葬施設	104
(2) 古墳の立地と墳丘形態	104
(3) 出土遺物と古墳祭祀	104
2. 南限域の古墳時代における奥山古墳の意義	104

図版
報告書抄録

[記名箇所以外はすべて橋本達也執筆]

図版目次

- 巻頭図版
- 1 奥山古墳から見た加世田平野と金峰山
 - 2 奥山古墳石棺 南西より
 - 3 奥山古墳墳丘区画溝 東より
 - 4 奥山古墳出土土器
- 図版 1 奥山古墳からみた景色
- 図版 2 奥山古墳丘陵上からの周辺景観
- 1 北方向 左下隅が古墳付近
 - 2 西方向 左下が古墳
 - 3 北方向 吹上浜砂丘と万之瀬川旧河口付近
- 図版 3 奥山古墳の景観
- 1 北より 正面中央が古墳
 - 2 北東より 正面中央が古墳
 - 3 北より 右側中央が古墳
- 図版 4 調査前
- 1 2001年9月 西より
 - 2 調査開始時清掃前 西より
 - 3 調査開始清掃時 西より
 - 4 調査開始清掃時 南より
- 図版 5 石棺検出状況 西より
- 図版 6 石棺調査
- 1 検出状況 東より
 - 2 西より
 - 3 西より(低位置)
- 図版 7 石棺調査
- 1 東より
 - 2 東より(低位置)
 - 3 南より
- 図版 8 石棺調査
- 1 南東より
 - 2 北東より
- 図版 9 石棺調査 拡大
- 1 東半部 北より
 - 2 棺内 南東より
- 図版 10 石棺調査 拡大
- 1 西小口 西より
 - 2 西小口 北側
 - 3 西小口 南側
- 図版 11 石棺調査拡大
- 1 西小口 北西より
 - 2 西小口 南東より
 - 3 棺外墓壙充填状況
- 図版 12 石棺調査
- 1 石棺蓋石および周辺散乱石材
 - 2 北西側石細部
 - 3 南西側石細部
- 4 南東側石細部
 - 5 北東側石細部
- 図版 13 北トレンチ
- 1 北西より
 - 2 南西より
 - 3 東壁土層断面
- 図版 14 墳丘トレンチ
- 1 4 tr 北東より
 - 2 7 tr 南より
 - 3 7 tr 北壁 南より
- 図版 15 墳丘トレンチ
- 1 2 tr 北東より
 - 2 石棺調査区から2 tr 間 北西より
 - 3 6 tr 北西より
- 図版 16 南トレンチ 墳丘区画溝
- 1 検出状況 西より
 - 2 遺物出土状況 西より
 - 3 遺物出土状況 東より
- 図版 17 南トレンチ 墳丘区画溝
- 1 中央部遺物出土状況細部 北東より
 - 2 中央部遺物出土状況細部 北より
 - 3 中央部遺物出土状況細部 北より
- 図版 18 南トレンチ 墳丘区画溝
- 1 全景 北西より
 - 2 全景 北東より
- 図版 19 南トレンチ 墳丘区画溝
- 1 全景 西より(低位置)
 - 2 壺出土状況 北より
- 図版 20 墳丘南側
- 1 南 tr および石棺調査区 南西より
 - 2 墳丘南側 南西より
 - 3 南 tr 東部および6 tr 西より
- 図版 21 南トレンチ各部
- 1 渡り土手 北より
 - 2 南 tr 南北ベルト東面 東より
 - 3 南 tr 東壁 西より
- 図版 22 墳丘北側
- 1 8 tr 北より
 - 2 8 tr 北西より
 - 3 8 tr 西側段壁面 北東より
- 図版 23 調査区全景
- 1 調査区北端より 北より
 - 2 石棺調査区以南 北より
 - 3 石棺以南南西部 北東より
 - 4 石棺以南南東部 北西より
- 図版 24 出土土器
- 1 小型丸底壺 (3)

- 2 小型丸底壺 (2)
 - 3 小型丸底壺 (1)
 - 4 小型丸底壺 左 (4)・右 (5)
 - 5 脚付短頸壺 (6)
 - 6 鉢 (11)
- 図版 25 出土土器
- 1 高杯 (7～10)
 - 2 高杯・器台または脚付壺 (左列前より 18・13・14・16:右列前より 12・17・15・19)
 - 3 高杯 (16)
 - 4 器台または脚付壺 (19)
- 図版 26 出土土器
- 1 壺 (20)
 - 2 壺 (21)
- 図版 27 加世田郷土資料館所蔵遺物

- ・古墳以前の遺物
 - 1 鉄剣
 - 2 鉄剣 (同裏面)
 - 3 鉄剣細部
 - 4 鉄剣細部
 - 5 刀子
 - 6 刀子 (同裏面)
 - 7 加世田郷土資料館所蔵資料一括
 - 8 鉄剣 X 線
 - 9 刀子 (左)・鉄滓 X 線
 - 10 ガラス玉
 - 11 古墳以前の遺物・黒曜石
- 図版 28 古墳以後の遺物
- 1 陶磁器
 - 2 鉄製品・鉄滓

挿図目次

図 1 奥山古墳の位置	1	図 30 端陵	23
図 2 第 1 次調査現地説明会・作業風景	2	図 31 鳥越古墳	23
図 3 南薩万世町六堂会古墳実測図	9	図 32 脇田古墳群	23
図 4 南薩万世町六堂会古墳出土の剣および刀子	10	図 33 横岡板石積石棺墓群	24
図 5 加世田平野周辺域の旧地形と弥生・古墳時代主要遺跡	11	図 34 長島の古墳	24
図 6 加世田平野周辺の地質	12	図 35 奥山古墳 発掘調査区配置図	25
図 7 宗円堀遺跡の石器	13	図 36 第 2 次調査現地説明会・作業風景	26
図 8 志風頭遺跡の出土土器	13	図 37 奥山古墳 墳丘測量図	28
図 9 加世田平野周辺域の主要遺跡	14	図 38 奥山古墳 遺構概要図	29
図 10 上加世田遺跡の出土遺物	15	図 39 石棺調査区 平面図	30
図 11 黒川洞穴遺跡の出土遺物	15	図 40 石棺平面・断面図	31
図 12 高橋貝塚の出土遺物	15	図 41 石棺側面および断面図	32
図 13 下小路遺跡の甕棺	16	図 42 蓋石 平面・断面図	33
図 14 松木藪遺跡の V 字溝と土器	16	図 43 石棺西北長側石加工痕	34
図 15 白檜野遺跡の遺構	16	図 44 石棺復元 平面・断面図 (1)	36
図 16 小中原遺跡の土器	16	図 45 石棺復元 平面・断面図 (2)	37
図 17 伊作城	17	図 46 石棺出土遺物 (加世田郷土資料館蔵)	38
図 18 常潤院 島津忠良墓	17	図 47 5 トレンチ・北 トレンチ 平面・断面図	40
図 19 加世田麓 武家屋敷地区	18	図 48 8 トレンチ 平面・断面図	41
図 20 笠狭宮址	18	図 49 南 トレンチ・1 トレンチ・3 トレンチ 平面・断面図	43
図 21 九州南部の古墳時代墓制	19	図 50 4・7 トレンチ 平面・断面図	44
図 22 上水流遺跡の遺構と遺物	20	図 51 2・6 トレンチ 平面・断面図	45
図 23 加世田平野の古墳時代遺構と遺物	20	図 52 南 トレンチ 遺物出土状況	48
図 24 弥次ヶ湯古墳	21	図 53 南 トレンチ 遺物出土状況細部	49
図 25 南摺ヶ浜遺跡	21	図 54 南 トレンチ 出土遺物 (1)	51
図 26 成川遺跡	21	図 55 南 トレンチ 出土遺物 (2)	52
図 27 松之尾遺跡	22	図 56 高杯復元図	52
図 28 船間島古墳 墳丘	22	図 57 黒曜石	53
図 29 船間島古墳 主体部小口部	22		

図 58	近世・近代遺物	53	図 76	板石積石棺墓 分布図	69
図 59	鉄製品・鉄滓	54	図 77	小型圭頭鍬・小型柳葉鍬の諸例	71
図 60	奥山古墳人骨遺存部位	55	図 78	板石積石棺墓の諸段階	73
図 61	奥山古墳出土人骨写真	55	図 79	湯田原板石積石棺墓・北方3号墳	75
図 62	ベンガラの遺存状況 (5倍)	56	図 80	奥山古墳出土土器	82
図 63	ベンガラ小塊 (50倍)	56	図 81	潤野3号墳主体部直上出土土器	83
図 64	ベンガラ小塊 (25倍)	56	図 82	沈日遺跡16号住居出土土器	83
図 65	ベンガラ粒子 (電子顕微鏡,1万倍)	56	図 83	塚原古墳群出土土器	84
図 66	ベンガラ粒子の蛍光 X線スペクトル図 (SEM-EDS)	56	図 84	上の原遺跡37号住居出土土器	85
図 67	X線回折図	56	図 85	九州南部の古墳時代前期の在地土器	88
図 68	九州南部の墳墓出土ベンガラ	58	図 86	大園A遺跡出土土器	89
図 69	奥山古墳墳丘全体図	60	図 87	薩摩地域の墓制	94
図 70	奥山古墳出土土器の穿孔	61	図 88	穿孔土師器の諸例	96
図 71	調査参加者	62	図 89	薩摩地域の搬入土器の諸例	97
図 72	「地下式板石積石室墓」	64	図 90	九州の古墳時代交流路と貝製品	100
図 73	神ノ崎27号墓の例	65	図 91	石棺埋め戻しとその後	103
図 74	板石積石棺墓および箱式石棺の規模	68			
図 75	板石積石棺墓および箱式石棺の長幅比	68			

表目次

表 1	九州南部の墳墓出土ベンガラ一覧	57	表 2	板石積石棺墓出土遺物の段階区分	72
-----	-----------------	----	-----	-----------------	----

第1部 奥山古墳の調査経緯と周辺環境



図1 奥山古墳の位置（国土地理院 1：25,000 地形図『唐仁原・加世田』改変）

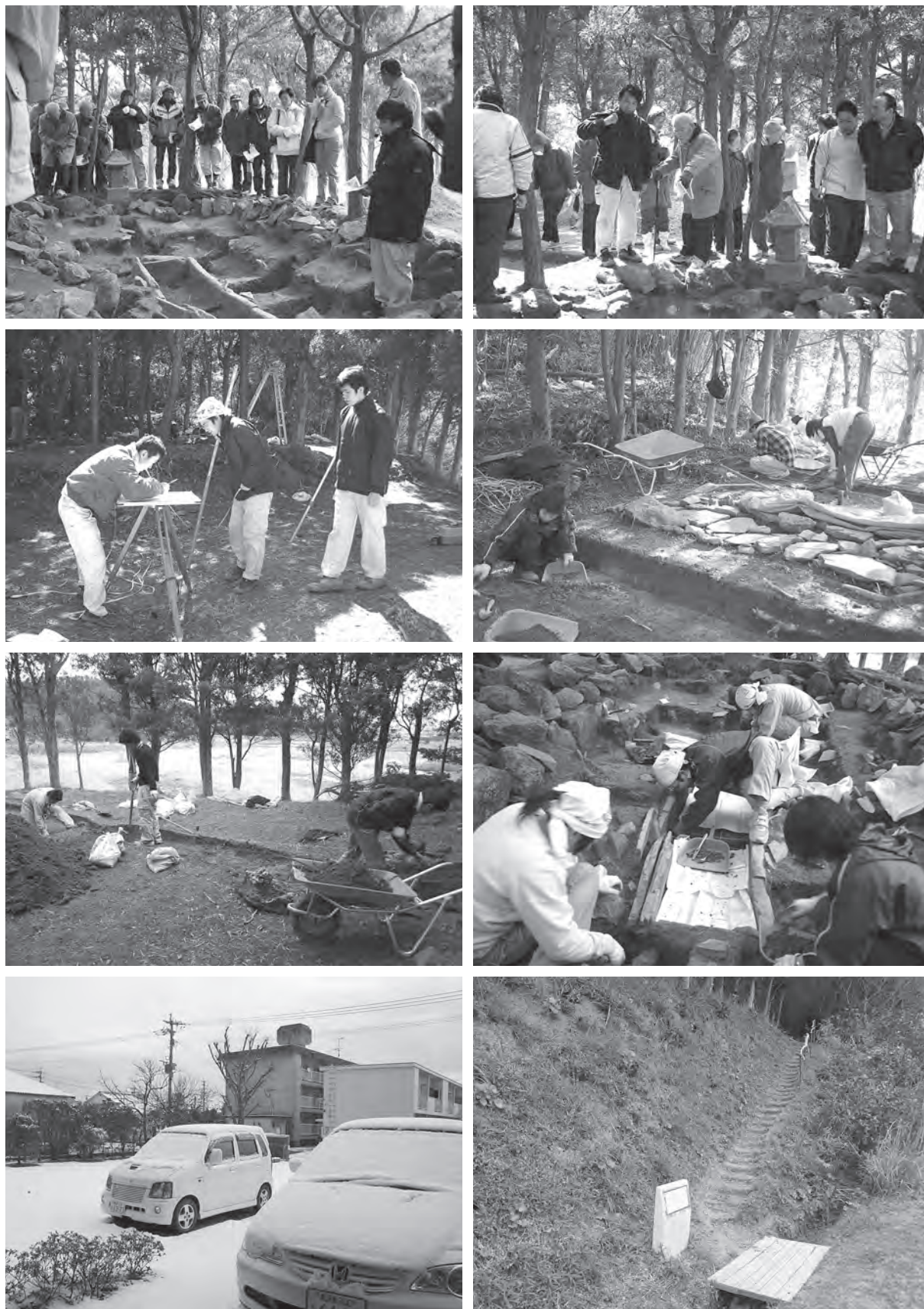


図2 第1次調査現地説明会・作業風景

第1章 調査経緯

1. 調査に至るまで

調査目的 調査主体者 橋本は古墳築造の南限域における調査を通してその実態を解明し、古墳時代社会の地域間関係、国家形成過程における領域構造について研究を進めている。これまでその主たるフィールドは大隅半島においてきたが、比較研究のためにも薩摩地域の実態を知ることがきわめて重要な意義がある。とくに、薩摩側における南限の古墳時代社会を知るためには、南薩地域の古墳時代墓制についての情報は欠かせない。そこでこの地域における古墳の解明を目的として奥山古墳の発掘調査を実施した。

加世田市小湊所在の奥山古墳の石棺は、薩摩半島南部では唯一の存在であり、また石棺墓が多くみられる北薩摩～天草諸島・宇土半島に至る東シナ海沿岸南部の古墳時代墓制との関連において重要な位置づけにあると考えられた。しかしながら、昭和16年以降、実測等の基礎的な調査は行われておらず、その歴史的な位置づけは不明確であった。

そこでその重要性に鑑みて、まずは石棺の記録作成を目的として発掘調査を実施し、さらに墳丘確認調査を実施した。その過程で墳丘区画溝や土器を用いた祭祀区域を確認したため、2次に渡って発掘調査を実施するに至った。

古墳の発見経緯 ここで報告する奥山古墳は、鹿児島県南さつま市加世田小湊5261番地に所在し、長きに渡って、六堂会古墳と呼ばれてきたものである。

この古墳は、1931(昭和6)年に地主・安藤美静氏が畑開墾中に発見した石棺墓である。そして、1941(昭和16)年には考古学研究者・藤森栄一氏の来訪時に氏の指揮によって発掘調査が行われ、その成果が、土持鋤夫・住谷正節1942「薩摩万世町六堂会古墳」『古代文化』13-3 日本古代文化学会、として報告されている。またその後、昭和48年には、加世田市の「六堂会の古墳」として市指定文化財になっている。

なお、この古墳に関しては、石棺を発見後、安藤氏が自宅に石棺を持ち帰ったが、厄があり昭和10年に細心の注意の下に現地に戻したと言われていた。それがさらに昭和16年に発掘調査され、その後長く石棺身が露出し、大きくなった木が石棺脇に生えていた時期もあり、本来の原形は損なわれている可能性が考えられていた。

古墳名称の変更 六堂会古墳の名称は土持・住谷1942から用いられる名称であるが、「六堂会」の名称に関しては問題のあることが地元では認識されていた。六堂会古墳として調査にあたった我々にも加世田市文化財審議委員を含む多数の方から調査中に意見が寄せられた。問題は以下の2点である。

1)「六堂会」と表記する地名は存在しない。

2)「六道江」の地名は存在するが、現在の古墳の場所ではなく、古墳より北西に数百mのところである。

すなわち、地名に基づく古墳名として、「六堂会」は当を得ていない。古墳現地の小字名は「奥山」、また俗にはスッテンドン(水取殿)と呼ぶという。

このことから、われわれの発掘調査を契機として、古墳の名称に関して再検討が必要であるとの見解が加世田市文化財審議委員会で議論され、再確認および名称変更に向けた検討を経て、加世田市は六堂会古墳から当該地小字名の「奥山」を採用して奥山古墳と改める名称変更を行った。

2. 調査の経過

(1) 調査の進行

奥山古墳では2次に渡って発掘調査を実施している。期間は以下の通りである。

第1次調査：2005年3月1日～3月17日

第2次調査：2005年8月16日～9月9日

(2) 第1次調査

周辺測量から開始し、全体の現況図を作成した上で石棺の内外の掘削、墳丘部にトレンチの設定を行い掘削を開始した。

調査は石棺部の調査を重点的に実施している。調査以前、この石棺は本来の原形を保っていないと考えられていた。しかし調査の進展に伴って石棺の原形は損なわれていないことが判明した。墳丘は当初、ほとんど流失しているかに見えたが、石棺の後背部尾根側トレンチから高杯等土器が出土した。さらに周囲を掘げたところ周溝の存在が確認され、また土器がいくらか出土しはじめた。

調査前の段階では、周溝の存在やその内部での土器の出土までは想定していなかったため、調査は石棺の構造確認を中心に行い、周溝部の調査は第2次調査を期すこととなった。

調査は3月に実施したにも関わらず、2度も積雪に見舞われるなど、調査期間中を通して厳寒であった。

(3) 第2次調査

墳丘構造の解明を目的として第1次調査よりも広く調査することを目的とした。石棺後背部の尾根に直交するように周溝を確認し、内部から祭祀用とみられる土器が出土した。埋土が礫混じりで掘りにくく、かつ土器が風化によって軟質に脆弱化しており、その掘削は難航した。また、墳丘斜面やテラスなどを確認した。

調査終了間際にはきわめて大型で勢力の強い台風14号が薩摩半島南西部を直撃するという事態に見舞われた。そのため遠方の学生は早めに引き上げてしまい台風後の作業、なかでも埋め戻しが困難を極めた。

3. 調査体制

(1) 第1次調査参加者

藤井大祐（鹿児島大学大学院生）、寺崎圭子・藤川真樹・三好栄太郎・高須俊宏・滝川哲哉（鹿児島大学学生）、阿部恵・青木弘（早稲田大学学生）、牧野幸子・島津屋寛（熊本大学学生）、甲斐康大（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

(2) 第2次調査参加者

甲斐康大（鹿児島大学大学院生）、高須俊宏（鹿児島大学学生）、新海達也・長崎永利子・小西有紀・千田麗紗子・長谷川陽・山本薫（早稲田大学学生）、島津屋寛・牧野幸子（熊本大学学生）、三好栄太郎（熊本大学研究生）、矢部俊一・岡本治代（高知大学学生）、長友信・川嶋新平（青山学院大学学生）、井上美輪（京都大学聴講生）・藤井大祐（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

(3) 整理作業

整理作業は鹿児島大学総合研究博物館において、鹿児島大学大学院生・学部生を中心に総合研究博物館ボランティアの参加があった。整理作業の参加者は以下の通りである。

藤井大祐（鹿児島県立埋蔵文化財センター／鹿児島大学総合研究博物館）、甲斐康大（鹿児島大学大学院／大野城市教育委員会）、高須俊宏（鹿児島大学学生）・宇野麻衣子・坂口直子・高橋匡子・林茂昭・宮里諭子・三宅環・村上慧次郎（鹿児島大学総合研究博物館ボランティア）

また、遺物写真撮影は吉岡康弘（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、近世・近代陶磁器の所見は渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）両氏の協力を得た。

4. 調査の公開と成果報告

(1) 現地の公開

調査にあたっては、成果の公開と透明性を高めることを常に意識した。各次とも、全国の大学考古学研究室、考古学研究機関、県内外の文化財担当部署へ発掘調査の案内を送付し、研究者等の調査の見学および指導依頼を呼びかけた。

また、一般にも調査成果の公開を常に前提として取り組み、一定の成果がまとまった段階で現地説明会を2次ともに開催した。

第1次調査では新聞社にいつでも取材可能であることを予めFAX送信したが、かえってまったく反応がなく報道は1社のみにとどまった。第2次調査ではその反省から記者発表を行い広報を行った。現地説明会は下記の通り実施している。

第1次調査 2005年3月12日

第2次調査 2005年8月28日

また、調査中における現地での主な助言者は下記の通りである。

第1次調査 上村俊雄・大西智和（鹿児島国際大学）、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）、中村直子・新里貴之（鹿児島大学）、永山修一（ラ・サール高校）、堂込秀人（鹿児島県教育委員会）、池畑耕一・上床真・黒川忠広・新東晃一・永濱功治・東和幸・前迫亮一・彌栄久志（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、河北篤史（阿久根市教育委員会）、柳沢一男（宮崎大学）、和田理啓（宮崎県教育委員会）、有馬義人（新富町教育委員会）、笹瀬明宏（西都市教育委員会）、杉井健（熊本大学）、吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所）

第2次調査 上村俊雄（鹿児島国際大学）、本田道輝・渡辺芳郎・中村直子・新里貴之（鹿児島大学）、永山修一（ラ・サール高校）、長野真一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、河北篤史（阿久根市教育委員会）、西嶋剛広（植木町教育委員会）、澤田秀美（くらしき作陽大学）、北山峰生（奈良県立橿原考古学研究所）

(2) 成果発表

研究発表

2005.7.17「加世田市「六堂会」古墳の調査」『鹿児島県考古学会研究発表－平成17年度総会－』（黎明館・鹿児島）

2006.5.28「列島西南端の古墳と地域間交流－南さつま市加世田・奥山（六堂会）古墳発掘調査－」『日本考古学協会第72回総会』（東京学芸大学・小金井）

2006.7.16「列島西南端の古墳時代墓制－奥山（六堂会）古墳調査成果から－」『鹿児島県考古学会研究発表－平成18年度総会－』（黎明館・鹿児島）

出版物

2006.03 「鹿児島フィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』No.13 鹿児島大学総合研究博物館 pp.1～6

一般講座

2006.07.15 「鹿児島の古墳時代－隼人前史－」始良町歴史民俗資料館ふるさと歴史講座
(始良町中央公民館大会議室・始良郡始良町)

2007.03.04 「奥山古墳発掘調査からみた古代史のなかの南薩」加世田郷土資料館歴史講演会
(ふれあいかせだ研修室・南さつま市)

ホームページ

<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/hashimoto.html>

展示出品

2006.07.19～08.22 「歴史交流館金峰 第1回企画展」南さつま市歴史交流館金峰

2007.10.17～11.17 「鹿児島大学総合研究博物館第6回特別展 発掘！鹿児島の古墳時代」
鹿児島大学総合研究博物館

5. 謝辞

2次に渡る発掘調査を無事終了し、一定の調査成果を得ることができたのもひとえに多くの方々のご支援、ご協力があったからこそである。

しかしすべての方を遺漏なく書き記すことは困難なので、以下ではとくにお世話になった方々に謝意を表したい。

調査にあたっては、地権者である安藤眞幸さんにご理解とご協力を賜り、発掘調査に対してご快諾いただけたことが何よりも今回の調査を円滑に実施できた最大の要因であった。また、安藤さんからは物心さまざまなお支援をいただいた。ご自身が船に乗り沖で釣った魚、山で撃ち捕った宍肉、自ら育てたラッキョウなど、海の幸・山の幸の差し入れはとても思い出深いものとなった。

調査実施に際しては加世田市教育委員会（現・南さつま市）に物心さまざまな方面からご支援をいただいた。事務上の手続きを含め、調査参加者の慰労をしていただいたことも忘れがたい。とくに文化財担当の上東克彦・福永裕暁両氏には多くのことでお世話になった。

また、小松原集落の方々のご支援はこの調査を進める上では特筆しなければならない。山崎滋美 公民館長をはじめ集落の皆様のご理解、ご協力によって、きわめて快適な公民館を宿舎として提供いただいたことは調査を継続実施する上で大いに助かった。これほど快適な調査宿舎を私は経験したことがないし、今後とも望めないほどのものであった。また、集落の皆さまからも物心ともにさまざまな支援をいただいた。

前節に掲げた現地にお越しいただいたの方々、資料を分析いただいた方々はもとよりその他、多数の方々の直接的なご支援を得ている。間接的には一層多くの方々のご支援とご協力を得ている。そして、何より調査に参加し苦楽をともにした学生諸君の働きがあってこそすべての成果が生み出されたものと考えている。すべての方々に感謝の念を表したい。

第2章 奥山古墳の研究史と地理的環境

1. 奥山古墳における既往の調査

発掘調査経緯 奥山古墳の調査については、土持鋤夫・住谷正節両氏が、昭和16年（1941）年の調査に至るまでの経過とその調査成果を昭和17年（1942）年に報告している。あらためてその経緯を確認しておく。

奥山古墳は、昭和6（1931）年に地主・安藤美静氏が畑開墾中に発見した石棺墓である。安藤氏は、出土遺物を持ち帰り宅地内に奉祀したが厄があって、昭和10（1935）年に元の通り原位置に収め、現状を復元して埋没したとのことである。

そして、昭和16（1941）年には考古学研究者・藤森栄一氏が鹿児島に来訪した機にあわせて氏の指揮によって土持・住谷氏らが中心となって発掘調査が行われた。

この時点の調査によって、蓋石上を角礫が覆っていたこと、石棺内が赤色に塗られていること、床面には底石はなく、粘土の上に赤い土が敷かれていること、鉄剣・刀子・ガラス玉などが出土したことなどが昭和17年に報告された。

発見に関する伝聞 安藤美静氏の長男で現地権者の安藤眞幸氏のお話を加えておく。ただし、美静氏は戦争により早世しており、眞幸氏の話は母（美静氏の妻）や近隣の方々から聞いた話を中心であるという。

開墾で石棺が出土した当時、地域では大変な噂になり、多くの人々がやってきたという。そして、安藤氏が離れていた間に石棺は大きく開けられ、内部の副葬品も持ち去られた可能性があるとの話がある。残っていたのが現存の鉄器と頭蓋骨だという。

また、昭和6年の段階で石棺も持ち帰り、昭和10年に復したという話も伝わっていた。よって、石棺石材は一度すべてが動かされたと考えられてきた。ところが、第1次調査の際に、現地説明会に来られた安藤美静氏の姉の話では、自分も母（美静氏の母）と一緒に手押し車で蓋石と思われる大きな石1枚を運んだとのこと。それ以外の石材を運んでいないと思うとのことであった。何か不思議と重さを感じないと二人で話をしながら運んだという。

石塔 現石棺の西横には石棺発見時に作られた下記のように記した石塔が設置されている。この文でも石棺を移したようにも読める部分があるが、昭和6年製であることからすれば、これはもとは地権者宅に石棺材や副葬品を移した際につくられたもので、昭和10年の再埋納の際に古墳に移されたものであろう。

石塔文中には刀(51.5cm)と小刀(18.2cm)が出土したことを記している。これに関しては、鉄剣と刀子が南さつま市立加世田郷土資料館に現存する。第2部で報告する。

昭和六年三月三十日 奥山五二六一地畑 耕作中長七尺五寸 高二尺位ノ石棺ヲ
 発掘セシ中ニハ刀ノ 長一尺七寸小刀六寸 位ノ物ニ振ト頭骨 アリシガ之ニ朱ヲ以テ
 充墳セラレタリ依テ 之レヲ此地ニ移シ奉祀ス 昭和六年四月十四日建之 安藤美静
 南無阿弥陀仏

藤森栄一と土持鋤夫・住谷正節 昭和16年1月、藤森栄一が加世田にやってきたのは、鹿児島県が計画した紀元二千六百年事業の神皇三代聖蹟調査としてであった。加世田周辺ではニニギノミコトの「笠沙宮」をはじめ、「笠沙之碕」、「竹島」、「長屋」、「竹屋」、「大山祇神遺址」な

どが神代聖蹟に県指定されており、紀元二千六百年事業として地元では聖蹟顕彰会設立・顕彰施設造営などが行われている。

藤森には地元の郷土史家・土持鋤夫から熊本の東京考古学会会員・小林久雄経由で依頼がおよび、土持・枕崎在住の東京考古学会会員である住谷と合流し、三者で聖蹟調査の一環として奥山古墳を発掘調査することになったのである。ここでは本題ではないので詳しくは触れないが、この間のことに関する藤森の心情についてはいくつかの逸話が残されている（藤森 1946b・1967）。藤森には当初、鹿児島県から調査費が出る予定であったものが霧消してしまい、無給での調査になったとのことである。この背景には昭和 16 年 12 月には勅命によって肇国聖蹟調査委員会が内閣に設置されており、国家事業として帝国大学などの歴史学者を並べた権威学者からなる官制委員会の設置が決まったために、県としては地元が招請した民間人に調査依頼する必要性がなくなったためであろうと推察される。

- 池畑耕一 2002「鹿児島県考古学界の先人たち(4)」『鹿児島考古』36 鹿児島県考古学会 pp.101-111
土持鋤夫・住谷正節 1942「薩摩万世町六堂会古墳」『古代文化』13-3 日本古代文化学会 pp.31-34
藤森栄一 1942「加世田を中心とする南薩の考古学的考察」『肇国聖蹟研究叢書』第1号 pp.4-8
1946a「南薩の神々」『かもしかみち』葦牙書房（藤森 1942 をもとに加筆・削除修正稿）
1946b「病牀読校」『かもしかみち』葦牙書房
1967「のちの九州廻記」『かもしかみち以後』学生社
前迫亮一 1996「藤森栄一の歩いた鹿児島」『南九州縄文通信』No.10 南九州縄文研究会 pp.66-69

2. 昭和 17 年報告再録

昭和 16 年の発掘調査の報告は学術雑誌になされたものであるが、研究者以外に広く入手できるものではなく、またその内容についても本文中で触れることがあるためここに再録しておく。なお、再録にあたっては横書きにあらため、旧字体はすべて現在の字体にあらためている。また、本文自体はそのままであるが、漢字表現の一部は、平仮名に換えている。また、明らかな脱字は補っている。

古代文化 第13巻第3号 日本古代文化学会 1942

薩摩万世町六堂会古墳

土持鋤夫・住谷正節

1 本古墳は薩摩川辺郡万世町小湊字相星小字奥山五二六一番地に在り、昭和六年三月三十日、地主安藤美静氏が耕作中偶然発見したものである。これについて、安藤氏は地下一尺にして長さ七尺五寸、高さ二尺、幅三尺位の粘板岩製組合せ石棺を掘りあたりて、これを発掘、上方を覆ふた暈一丈大の蓋石を除いたところ、内側は朱を以て塗りつぶされ、中に一尺七寸の直刀と六寸位の小刀各一振づつが後頭骨と共に発見されたと語っている。ところが氏は一旦その遺物を持ち帰って宅地内に奉祀したが、奇異の事頻発するに及び、昭和十年十一月十八日再び原位置に収め全く原状を復元して埋没してしまった。この事を後に聞きつたえた吾々は、かつてその存在例に接さず、あるいは皆無かと疑っていた薩摩の古墳の唯一例ゆえ、大いにその精査を望んで残念がったものであった。

昭和十六年一月、藤森栄一氏の訪薩を期に、氏の指揮により、薩摩における古墳の最初の確証を握り、この多年の宿望を果たすことが出来たのはよろこばしい。以下はその調査の概要を記載報告したものである。

2 薩摩半島の西岸は今長い砂浜が続いている。これが吹上の浜である。少なくとも石器時代においてはこの砂浜の堆成もいまだ少く、砂浜に続く現在の沖積地が汀線となって、遺跡はこの沖積地に接した台地端に点在したものと思はれる。吹上の浜の南端は南シナ海に突出した笠砂岬に終わっている。六堂会の古墳は、その砂丘端に臨んだ伊作町より笠砂岬に至る街道の、

砂浜地帯より岬の基部の断崖にかかる部分で、ささやかな墳土上にある。由来南薩地方は中世噴代の頁岩及び砂岩層の発達した上に新しい噴出岩の堆丘が群れている地方で六堂会の墳土もその頁岩層の一露頭である。後述する古墳石棺も、この岩石を使用しているのは理である。

3 安藤氏は発掘後の奇異な出来事に恐れをなし、細心の注意の下に復元したものと見え、再発掘の結果、恐らく現状に近いものと思われる程石棺外の石積は整っていた。まず堅い礫まじりの赤土を掘って行くうちに地表下一尺、数個の安山岩集塊岩の不規則な石塊が置かれ、これらは次第に平坦な磐状の石塊に移行し、やがて二尺にして頁岩質の巨大な磐石に当たった。磐石は不整な長方形で、丈五尺幅三尺六寸、一個は三尺四寸×三尺二寸、この二個の天井石は図示する様に並べられ、その間隙には、さらに二個の磐石が覆われていた。吾々は次いでこれ等の天井石を除き内部を検した。石槨は美しい暗緑色の頁岩で築いた箱式棺で、棺内の遺物は一度安藤氏が取り出したものではあるが、氏のいう復元を信ずれば、西方に枕して頭骨があり、その左側に破損した鉄製の剣身が一振分と小刀子が一本横たえられていた。図示したものがそれである。又吾々の調査以後万世町当局の朱泥精査に当って、紺青色の玻璃小玉一個及び、鉄鏃片と思考される小鉄片が検出された。しかしながらこれらを総合するも、本古墳が極めて副葬品の乏しい墳墓であることは決定的である。

各々の岩石はいづれも厚さ均等な石材を揃へ、周辺は打ち調べてはいないが、相当豊富な頁岩の露頭から採り出されたものと思われる。大きさは内側で長七尺二寸、幅二尺、深さは側壁の部分で石材は二尺あり、約三寸を粘土で堅め、底石はなく、その上に約七寸の朱泥が詰っていた。石材組合せの構造は実測図に見る通り巧みに土圧に耐え、両側の壁外には天井石上部と同様に多数の礫塊で築いていた。方向は長軸が正しく東西を針している。

4 鉄剣は全長約 尺前後(原文ママ)と推定され、中央に微かながら鏃をつけ両刃で、鏃のた

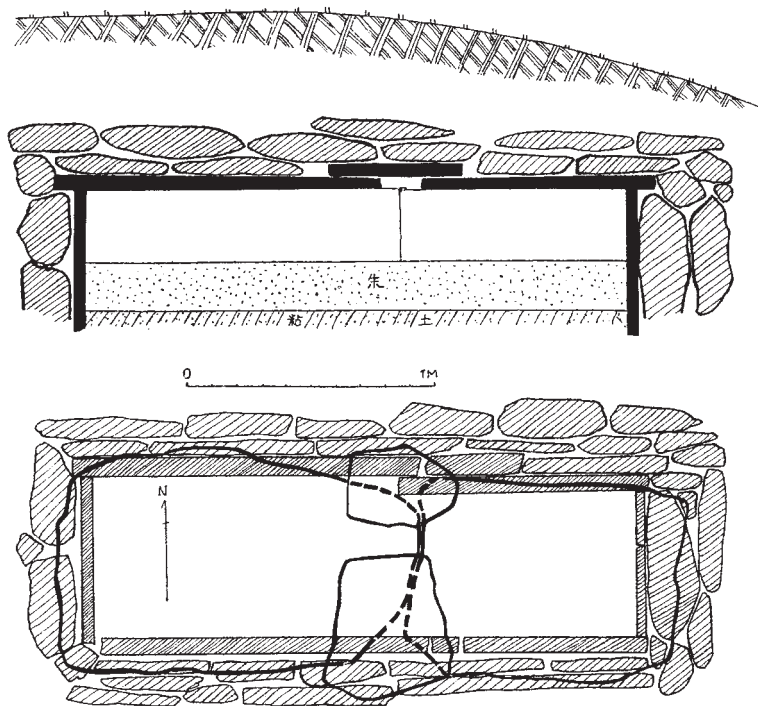


図3 南薩万世町六堂会古墳実測図

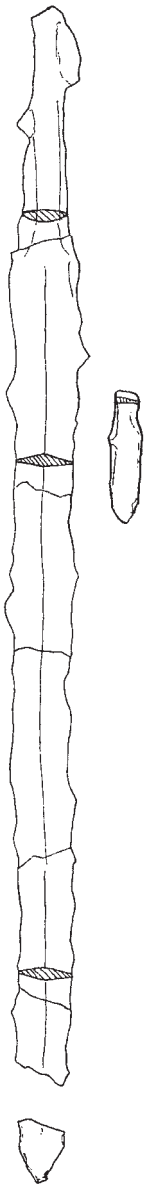


図4 南薩万世町六堂会古墳出土の剣および刀子

め詳らかではないが目釘孔のない込みをもっている。外装の全く残されていない今日、これのみによってその時期を想定することは至難であるが、少なくとも古墳時代中期以前に溯り得る理由はないと思はれる。鉄製小刀子も小型の上に破損が甚だしく時代想定の手がかりには無理である。

以上それ等の玻璃小玉及び鉄鏃片を加えて考えるに、いずれも古墳時代中期以前に想定されるべきものではない。

5 南薩は由来、全く古墳の類例を欠いた地方である。本例がその最初の発見である点、乏しい資料ながら有意義である。これが薩摩半島に対する大隅半島においては太平洋岸に面した肝属郡の東串良町唐仁原・塚崎等の大古墳群を中心に極めて濃密な分布をもっている。

大隅の古墳は古墳群における若干の前方後円墳を中心に小円墳及び地下式古墳があたかもこれに附随するが如く散在している。前方後円墳には竪穴式石槨にもられた家形石棺を収め、小円墳、特に地下式古墳には箱式石棺を収蔵する例が多く、横穴式石槨例はまことに乏しい。古墳の外形及び石槨・石棺はいずれも相当古式にこれを溯らせ得るものにも拘わらず、出土遺物は中期以降のものと考えられる。大隅の古墳文化は、以上極めて第二儀的に、日向方面より九州東海岸を伝わり来った本邦最南の中心圏で、吾が薩摩六堂会の古墳も、大隅地方の地下式箱式石棺墓と時を同じうして伝播された南九州古墳文化圏の末端における一つであろう。学界においても箱式石棺が最古式に属する古墳の一特徴であると同時にまた、末期に属するものにも盛用されていることを説く人々があるが、本例はその後者の場合の一好例であろうと思われる。

本稿を終るに当たって万世町当局の御尽力に満腔の感謝をささげたい。

3. 地理的環境 (図1・5・6、図版1～3)

立地と環境 奥山古墳は加世田平野の南端に位置し、背後の山地から東シナ海に向かって南北に延びる低い尾根の先端上に位置する。標高は約9mである。古墳の立地する尾根は頁岩の風化礫や風化土壌が複雑に堆積、隆起した構造をなしている。墳丘の構築基盤は岩盤および粘土層からなる。

古墳の周囲は現在も低湿地となり、北側には東シナ海に向かって砂丘が発達するラグーン（潟湖）の環境をよく残している。砂丘は日本3大砂丘の一つに数えられる吹上浜で、その南端部に位置する。

本地域の最大河川の万之瀬川は1802（享和2）年に洪水によって現在の河口が開かれ川筋が変わるまで、現河口の東付近から南へ大きく蛇行し、古墳近くの小松原集落付近を経て海に注いでいた。すなわち、奥山古墳は加世田平野の入り口である万之瀬川河口を北に望む入り江の丘の上というきわめて眺望に優れ、また目立つ位置にある。河口近くには船つなぎ石の伝承のある石も残り、旧河口付近の小松原・大崎集落は中近世からの港町として大商家が並び南薩経済の中心地として昭和前半まで栄えた。

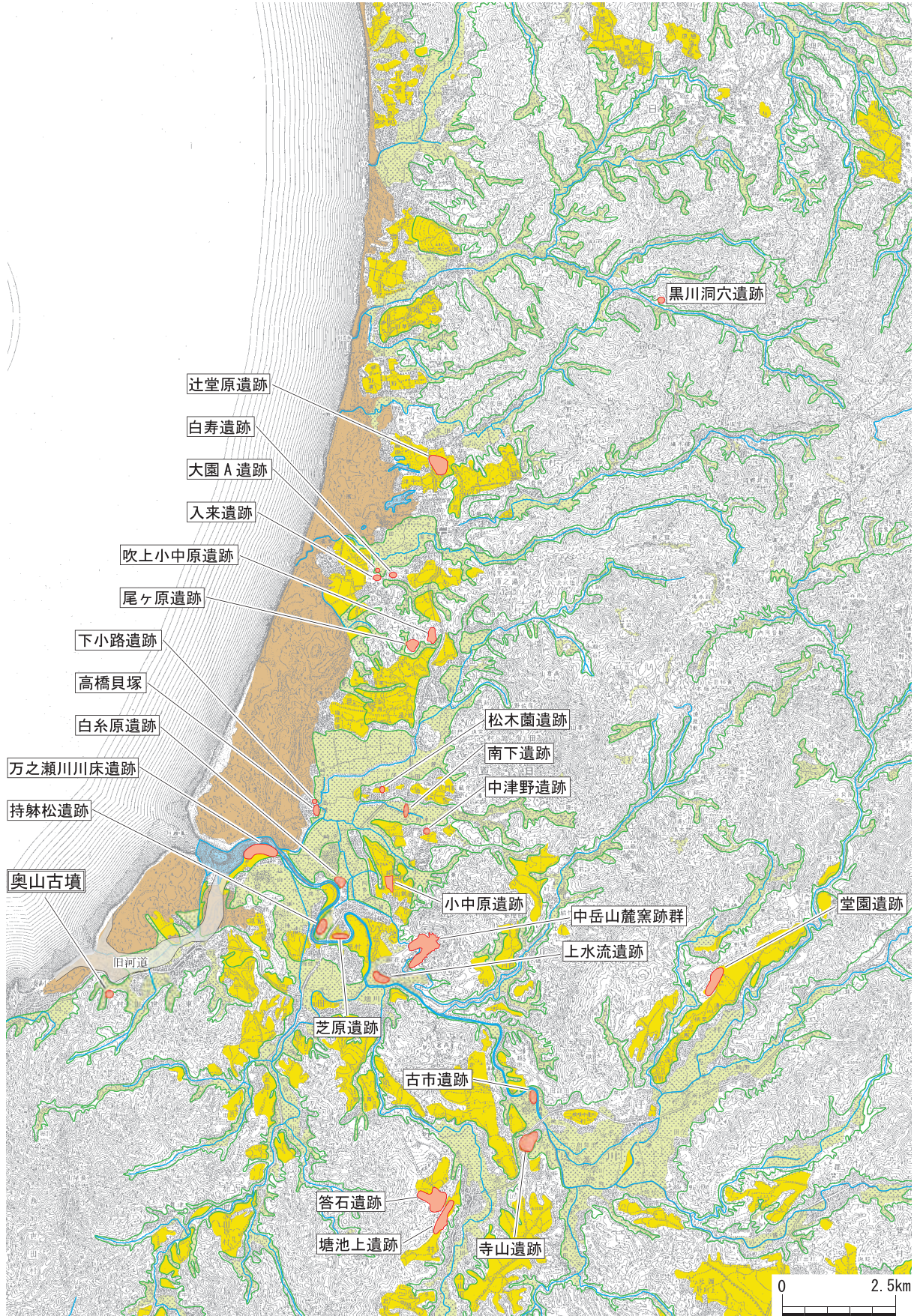


図5 加世田平野周辺域の旧地形と弥生・古墳時代主要遺跡（陸地測量部 1902 測図を改変）

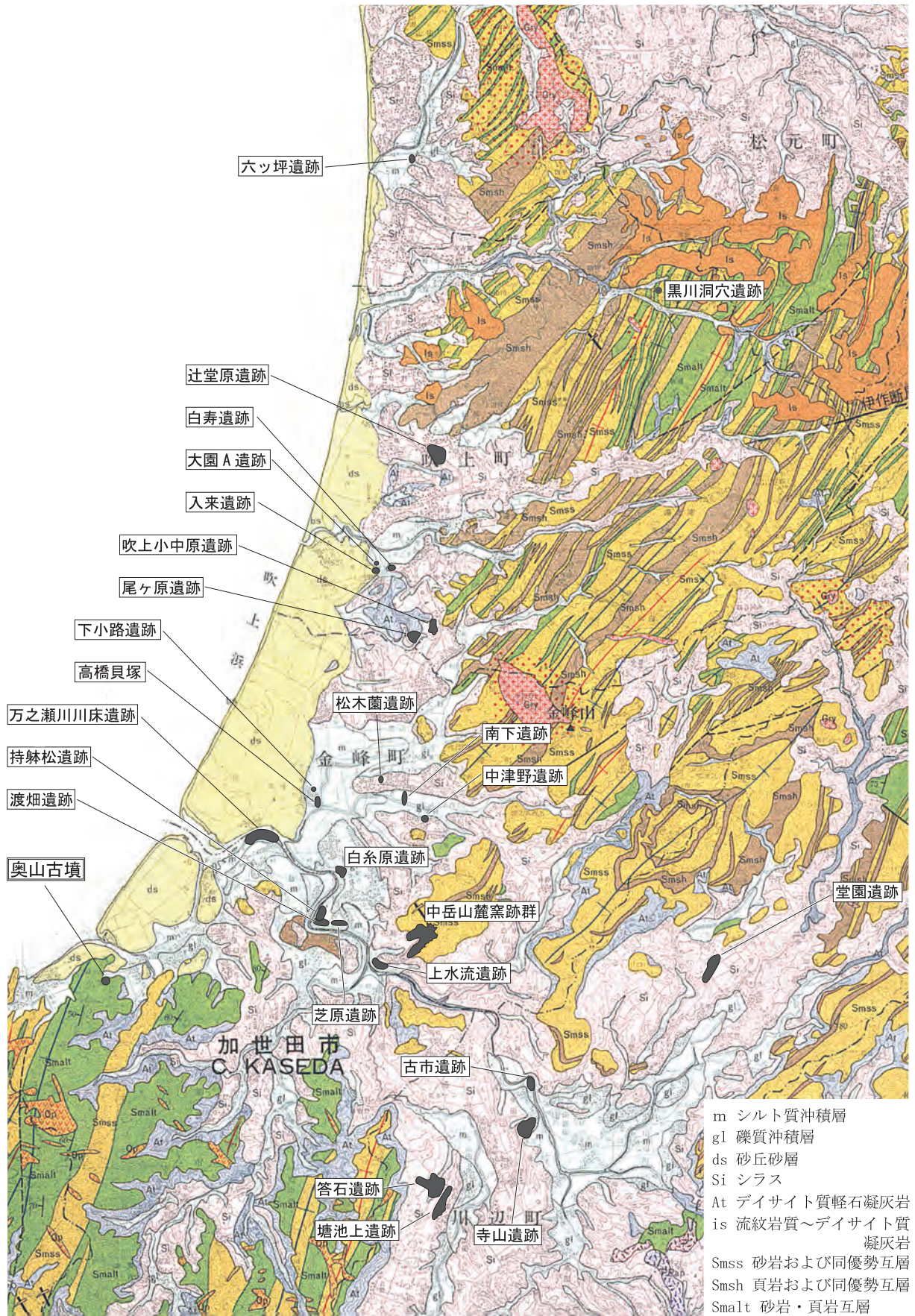


図6 加世田平野周辺の地質（鹿児島県発行『鹿児島県地形図（2）薩摩半島』改変）

第3章 加世田平野周辺の遺跡

1. 考古学的環境

(1) 概要

吹上浜に面する薩南平野周辺では旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡が比較的多く確認されている。またこの地域は縄文晩期・弥生・古墳時代集落が多く、河口貞徳を中心として考古学研究も早くから行われており、土器型式の標識遺跡が数多く所在する。

古代の遺跡は少ないが南さつま市金峰町を中心とする地域は古代に阿多とされた地域であり、「阿多隼人」の本願地であると考えられる。また、戦国期島津氏の南九州三州統一は庶流の島津忠良とその子で本宗家を継承した貴久の二代の功績に拠るところが大きい、その勢力基盤はこの地域で培われたものである。

本章は、各遺跡報告書のほか、鹿児島県教育委員会 2005『先史・古代の鹿児島』、『加世田市史』、『金峰町史』などの各市町村史を主として参照してまとめている。古墳時代に関しては節を変えて記述を進める。

(2) 旧石器時代

南さつま市加世田梶ノ原遺跡ではナイフ形石器文化期の剥片尖頭器や三稜尖頭器、細石刃文化期の細石刃・細石核などが出土している。

南さつま市吹上町塚ノ越遺跡でナイフ形石器文化期の台形石器と三稜尖頭器、集石が確認されている。同遺跡では縄文草創期の隆帯文土器や石器も出土している。

南さつま市金峰町宗円堀遺跡(図7)ではナイフ形石器文化期の石材ブロック5基、二側縁加工ナイフ形石器・スクレイパー・ハンマー・コア、細石刃文化期のブロック1基、細石刃・細石核・槍先形尖頭器などが出土している。

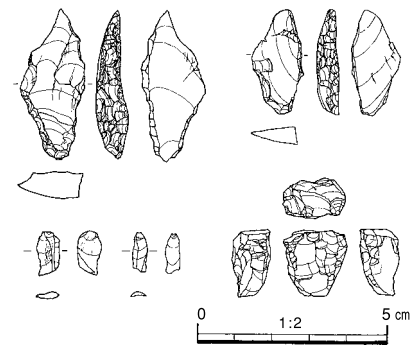


図7 宗円堀遺跡の石器

(3) 縄文時代

志風頭遺跡(図8) 南さつま市加世田にあり、薩摩火山灰下(約12,000年前)において、草創期の連穴土坑7基、集石・土坑などが検出されている。草創期土器としては研究史上はじめて完形に復元可能な隆帯文土器が出土した。ほか草創期の打製石鏃や打製石斧等も出土している。

梶ノ原遺跡 南さつま市加世田に所在し、草創期の舟形配石炉・連穴土坑8基、配石炉4基、集石遺構22基等多くの遺構を検出し、大量の隆帯文土器片、石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・石皿ほか数多くの石器が出土した。また、梶ノ原型石斧とされる丸ノミ形石斧は琉球列島・小笠原諸島などの各地で確認されており、丸木舟の加工具と理解されているものである。

中尾遺跡 南さつま市金峰町にあり、草創期の集石遺構10基、落とし穴4基、連穴土坑約13基を検出し、隆帯文土

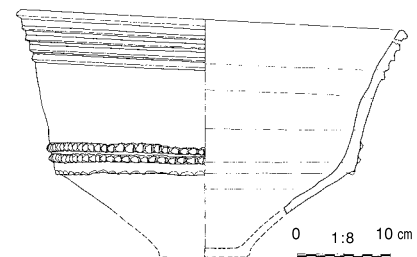


図8 志風頭遺跡の出土土器

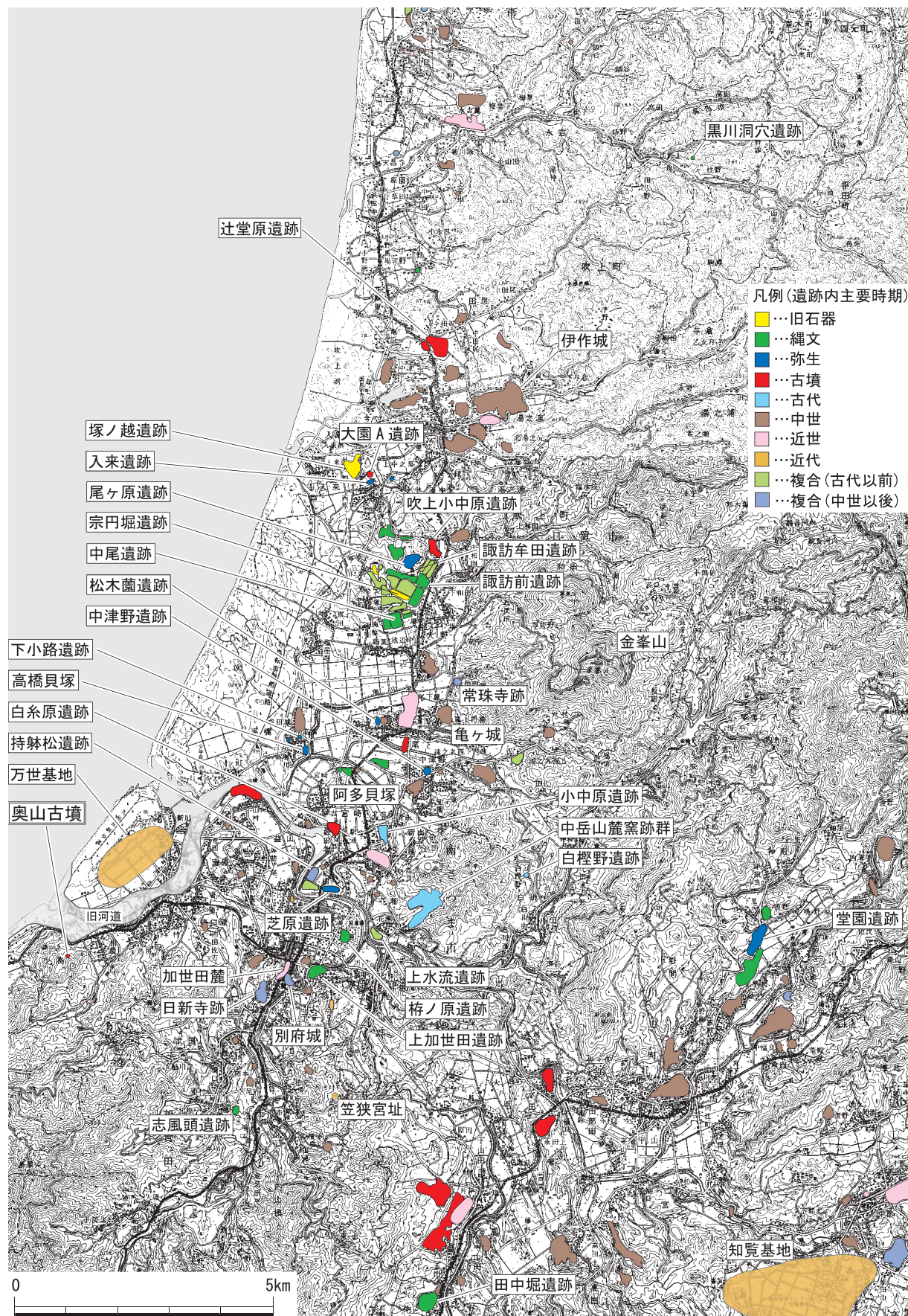


図9 加世田周辺域の主要遺跡 (国土地理院 1:50,000 地形図『伊集院・加世田』改変)

器ほか石斧・磨石・石鏃などが出土している。

諏訪牟田・諏訪前遺跡 諏訪牟田遺跡は南さつま市金峰町の台地上に位置し、草創期の隆帯文・無文土器、集石遺構などが確認されている。また早期の前平式土器が多量に出土し、加栗山式・吉田式・石坂式土器、集石遺構6基などが確認された。晩期には、竪穴住居1軒、石器製作所とみられるブロック1基、底部打ち欠きの埋設土器3基、土坑35基を検出したほか、碧玉管玉、土製垂飾品などが入佐式土器とともに出土している。隣接する諏訪前遺跡では入佐式段階に柱状遺構が多数確認され、掘立柱建物のほか勾玉・管玉・丸玉が出土している。

阿多貝塚 南さつま市金峰町の高さ9mの台地上に位置する。台地の2地点で貝層が確認され、早期から晩期までにおよぶ土器が出土している。主体は前期の轟式・曾畑式・阿多V類土器である。貝層は海水性貝類を中心として形成され、シカ・イノシシなどの獣骨が出土している。西隣の台地上は上焼田遺跡であるが、ここでも轟式段階を中心とする貝塚が確認されており関連性が強い。

上水流遺跡 南さつま市金峰町の万之瀬川河岸に位置し、縄文前期の曾畑式土器と石器、前期後葉の深浦式土器段階に集石遺構3基・焼土跡など、中期の春日式・条痕文系・船元系土器段階に集石遺構・焼土跡・黒曜石集積など、後期の指宿式土器段階では焼土跡、晩期の入佐式・黒川式土器段階では土坑・集石遺構・焼土跡などが検出されている。晩期では南島系土器壺が出土した。また、上水流遺跡の西に隣接する芝原遺跡では、中期の春日式土器を伴う竪穴住居2軒が検出されている。

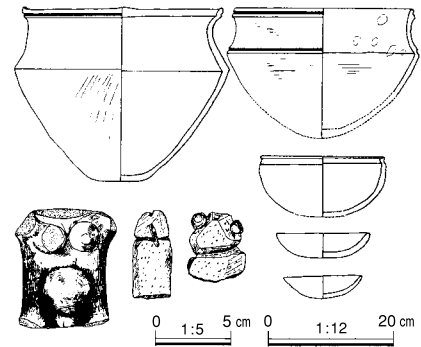


図10 上加世田遺跡の出土遺物

上加世田遺跡 (図10) 南さつま市加世田の晩期前半の上加世田式土器の標識遺跡である。大量の遺物が出土した一方で明確な遺構は少ない。遺構には埋葬遺構・貯蔵穴・焼土などがあり、遺物では大量の打製石斧、土偶・岩偶・石棒・岩版・管玉・ガラス小玉などが出土している。

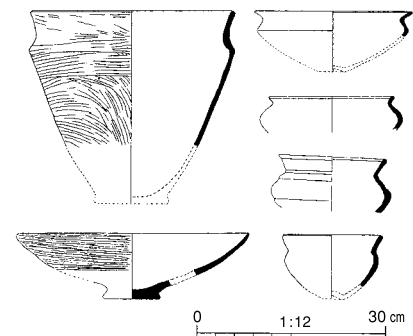


図11 黒川洞穴遺跡の出土遺物

黒川洞穴遺跡 (図11) 薩摩半島中央部の山地中にあり、東西2箇所の洞穴である。縄文草創期・早期・前期の土器が出土しているが、なかでも晩期は良好な土器群のほか埋葬遺構・炉跡・土坑があり、動物骨・貝類なども出土している。九州の縄文晩期を代表する黒川式土器の標識遺跡である。

(4) 弥生時代

高橋貝塚 (図12) 万之瀬川下流薩南平野に面する微高地上に位置し、吹上浜砂丘に接する位置にある。弥生時代前期初頭に形成された貝塚で、海産貝類が中心を占めるが、ホ乳類・鳥類・ハ虫類・魚類などの動物骨も出土している。弥生時代前期前半の土器に加えて、石庖丁・磨製石斧・柱状片刃石斧等の磨製石器のほか多様な打製石器も出土している。ゴホウラ・オオツタノハといった南島産貝類による貝輪の未製品が出土しており、北部九州と南島を結ぶ地域間交流の拠点であったと考えられる。

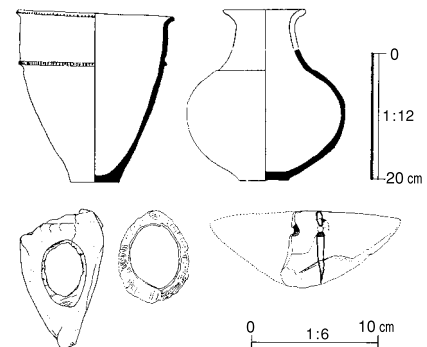


図12 高橋貝塚の出土遺物

入来遺跡 吹上砂丘の後背地を挟んだ台地上に位置する。

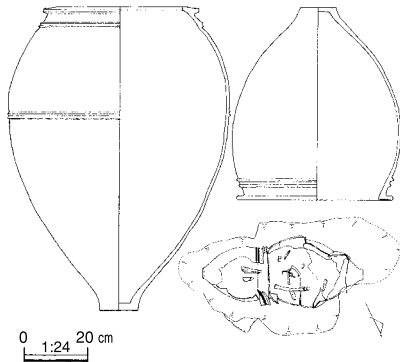


図13 下小路遺跡の甕棺

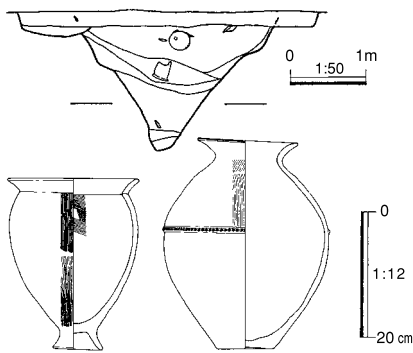


図14 松木藪遺跡のV字溝と土器

台地上に断面V字・U字の溝、貯蔵穴とされる土坑があり、弥生時代前期後半～中期中葉の土器が出土している。この時代の遺跡は少なく、中期前半の incoming I 式・中期中葉の incoming II 式土器の標識遺跡である。また、近在する白寿遺跡では弥生時代中期の壺棺・甕棺が出土する。

下小路遺跡 (図13) 高橋貝塚の北北西に近在する。弥生時代中期後半の北部九州系の合口甕棺が検出されており、内部には2個のゴホウラ製貝輪を装着した成人人骨が出土している。

尾ヶ原遺跡 土壇内に蓋を須玖式丹塗り壺、身を黒髪式壺とする合口土器棺が出土している。

松木藪遺跡 (図14) 高橋貝塚から低地を隔てた台地上に位置する。弥生時代後期後半の断面V字形の溝が確認されている。本来の上面幅は4～5mに復元される大型のものである。溝の中からは大量の土器が出土し、松木藪式土器として弥生後期後半の標識資料となっている。熊本地域や大隅との関連を示す土器のほか、九州北部系や瀬戸内系の土器などが出土しており広域交流がうかがえる。

溝は2条あり、環濠もしくは集落の区画溝とみられる。付近で堅穴住居が3軒検出されており、当該期の拠点集落である。

中津野遺跡 加世田平野の東、金峰山から派生する台地上に位置する。遺構は不明確ながら大量の土器が出土しており、中津野式として鹿児島県の弥生時代終末期を中心とする土器の標識資料に位置づけられる。

上焼田遺跡 高橋貝塚の南東、松木藪遺跡の南西台地上に位置する。中津野式土器を伴う円形周溝が2基確認されている。周溝は深さ10cm程度であり、上部の削平された周溝墓であろう。

諏訪前遺跡 南さつま市金峰町の台地上にあり、中津野式期の堅穴住居3軒が検出されている。住居内から線刻画のある壺が出土しており、いわゆる「竜」を表現しているとみられる。

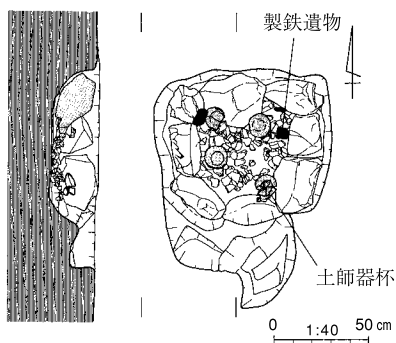


図15 白檜野遺跡の遺構

堂園A遺跡 川辺盆地の北台地上にあり土壇墓とみなされる遺構65基および壺・甕を中心とする土器が大量に出土している。完形復元できるものや遺存状態の良い土器が多く、墓に伴うものと考えられよう。弥生時代中期後半～終末期までのものを含み終末期がもっとも多い。土壇墓は長さ約1.8～2.0、幅約0.8～0.9mほどの長方形・長楕円形である。なかには赤色顔料・鉄鏝を出土したものもある。

(5) 古代・中世

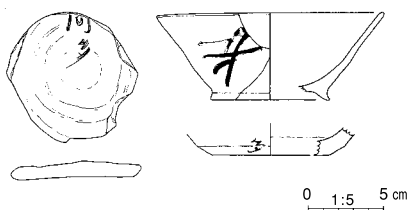


図16 小中原遺跡の土器

白檜野遺跡 (図15) 中岳東麓の谷部に面した微高地上にある。100×70cmの長方形墓壇のなかに、配石し、蔵骨器が納められていた。また蔵骨器の周囲には土師器杯4点と鉄滓・羽口片2点が納められていた。蔵骨器は土師器短頸壺と土師器蓋であり、蓋のつまみは仏塔状を呈している。8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられ、仏教の普及がうかがえる。

小中原遺跡 (図16) 掘立柱建物12棟以上、土坑、火葬土

壙・溝などがある。9世紀前後に位置づけられる「阿多」の刻書のある土師器杯が出土している。数多くの墨書土器や巡方なども出土しており、薩摩国阿多郡の郡家に関連する遺跡である可能性が考えられる。

中岳山麓窯跡群 中岳の西南山麓に位置する。5群からなり、100基を超える古代須恵器窯が存在するとみられている。9世紀～10世紀頃から生産されたとみられるが部分的な表採資料のみしか判明しておらず実態は不明瞭である。その製品が九州南部各所で確認されつつあり、この地域が主体となった交易とも関わって流通したものとみられる。

持躰松遺跡 万之瀬川下流の河岸に沿って存在する。中世前半、掘立柱建物2棟、方形竪穴建物1、炉跡のほか土坑が1000基以上検出されている。12～14世紀の輸入陶磁器、土器・陶器が多量に出土しており、港湾部の交易に関わる遺跡であろう。龍泉窯・同安窯・磁州窯系磁器、白磁、中国製陶器などの中国製陶磁器のほか、常滑・備前などの陶器、東播系須恵器・和泉型・樟葉型瓦器椀、カムイヤキなどが出土している。

芝原遺跡 万之瀬川河岸に隣接し、掘立柱建物が35棟検出されている。方形竪穴建物6軒・竈跡20基・木棺墓・土壙墓・鍛冶関連遺構などが検出され、舶載磁器のほか備前・常滑・東播系須恵器・和泉型瓦器椀といった各地の陶器・土器が出土している。

金峰山 平安後期以降、山岳信仰によって修験道の霊場となり、蔵王権現社・金蔵院観音寺が造営された。廃仏毀釈を経て、それぞれ現在は金峰神社・日枝神社となっている。その山腹・山麓には院坊や末社が造営されていた。

伊作城 (図17) 日置市吹上町に所在し伊作荘地頭島津氏の居城であった。シラス台地上に位置する山城で、本丸を亀丸城といい、6つの郭からなる。伊作家島津氏は相州家をあわせて継承した島津忠良の時期に勢力を拡大し、忠良の子・貴久が1545(天文14)年には島津宗家・薩摩国守護職を継承する。以後、戦国大名としての飛躍を遂げ南九州、三州統一の礎を築く。貴久の子、義久・義弘らもこの城で生まれたと伝える。島津忠良は子の島津貴久とともに三州統一と呼ばれる日薩隅統一の礎を築いた島津氏中興の祖である。

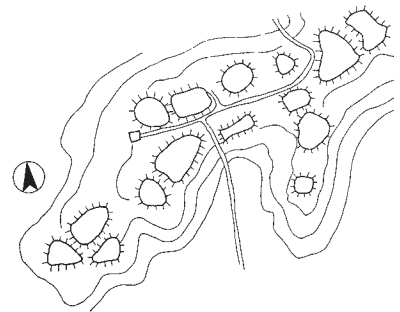


図17 伊作城

亀ヶ城 南さつま市金峰町田布施に所在する。相州家初代島津友久が、1470年代頃(文明年間初期)築城したという。友久・運久を経て、伊作家島津忠良が相州家も継承し居城とする。忠良長子の貴久はこの城で生まれたという。5つの郭からなるが、そのうち2つは土砂採取のため破壊された。

別府城 加世田のシラス台地上に位置する山城で3つの郭からなっていたといわれる。はじめ1177～1180年頃(治承年間)から1420(応永27)年までは加世田別府下司職・別府氏の居城であったと伝える。1420年、別府氏は薩州家島津氏に下り、島津国久が加世田別府を新たに領した。1474(文明6)年に守護職島津立久が死去すると、以降、島津氏一族の内乱が頻発する。その中で島津忠良は薩州家島津実久と争い、1538(天文7)年に別府城を落とした後にこの城を居城とした。現在、大手口付近のほか一部を除いて、遺構はほとんど壊されている。別府城の麓には島津忠良が加世田別府城の攻防戦没者供養のために1540(天文9)年に六地藏塔を建てたが、当初のものは洪水で流れてしまい、1597(慶長2)年に再建されたものが現存する。



図18 常潤院 島津忠良墓

常珠寺跡 南さつま市金峰町田布施に所在する相州家島津氏の菩提寺である。1411(応永18)年、島津7代元久の長男守

邦が開山。相州家島津友久・運久・忠良などのものと伝える宝篋印塔、山門にあった仁王像などが残る。

日新寺跡（図18）現在、竹田神社となっている。1485（文明17）年、保泉寺として加世田を領した薩州家島津国久が創建した。その後、争乱を経て加世田別府城に入った相州家島津忠良が1564（永禄7）年に再興し、菩提寺としてその死後に日新寺と改称し墓を造営している。1869（明治2）年に廃仏毀釈により潰滅され、その後、島津忠良を祀る竹田神社となる。仁王像が残り、日新寺塔頭の常潤院跡に寺院関係遺構、島津忠良およびその夫人墓などが現存する。寺名は日新公と称された島津忠良の号に拠る。



図19 加世田麓 武家屋敷地区



図20 笠狭宮址

東忠太の設計で工費10000円、土地買収費5000円、施設費3500円をかけている。

(6) 近世・近代

地頭仮屋・麓（図19）近世薩摩藩は領国を外城とよぶ行政施設を設置し、武士を配したが、藩直轄地には「地頭所」を設置した。その中心施設が「仮屋」である。加世田郷では1727（享保12）年までは別府城内に仮屋が置かれたが、それ以後は城下の「麓」とよばれる武家屋敷群内に置かれた。

万世基地 1944（昭和19）年8月に造営された陸軍の航空基地である。鹿児島県内では海軍航空基地が多く、知覧のみが陸軍航空基地であったが沖縄戦線の激化にともなって急造された特攻作戦の基地である。この基地からは201名が沖縄へ出撃した。営門が残る。

笠狭宮址（図20）日本書紀のニニギノミコトの吾田長屋笠狭之碕が薩摩半島南西端の地域であるとされ、肇国聖蹟としての「調査」を経て、加世田舞敷野の御座屋敷という地点が宮跡として指定され、1941（昭和16）年、皇紀2600年事業の一環として建碑・整備された。神国思想・皇国史観を実体化するための近代遺跡である。同様の聖蹟は7箇所指定があるが、その中では笠狭宮がもっとも大規模工事を行っている。顕彰碑は伊

2. 薩摩半島の古墳時代

(1) 概要（図21）

加世田平野周辺域では古墳は奥山古墳のみしか知られていない。一方で、この地域は古墳時代集落の調査が鹿児島県内のなかでも多く行われている。基本的には堅穴住居からなる集落で、居館や濠のような特殊な遺構は確認されていない。

薩摩半島において古墳は海岸に面した阿久根市・薩摩川内市・指宿市でわずかに点在することが確認されている。また、同時代の南薩地域では土壙墓・土器棺墓が調査によって明らかにされている。その中には鉄製品などの副葬品をもつものもある。それに対して北薩地域では在地墓制の板石積石棺墓群が展開し、これも副葬品は多くはないが鉄製品をもつものがある。

(2) 上水流遺跡（図22）

万之瀬川に近接した立地が特徴的で平面方形の堅穴住居が11軒検出されている。集落立地上、

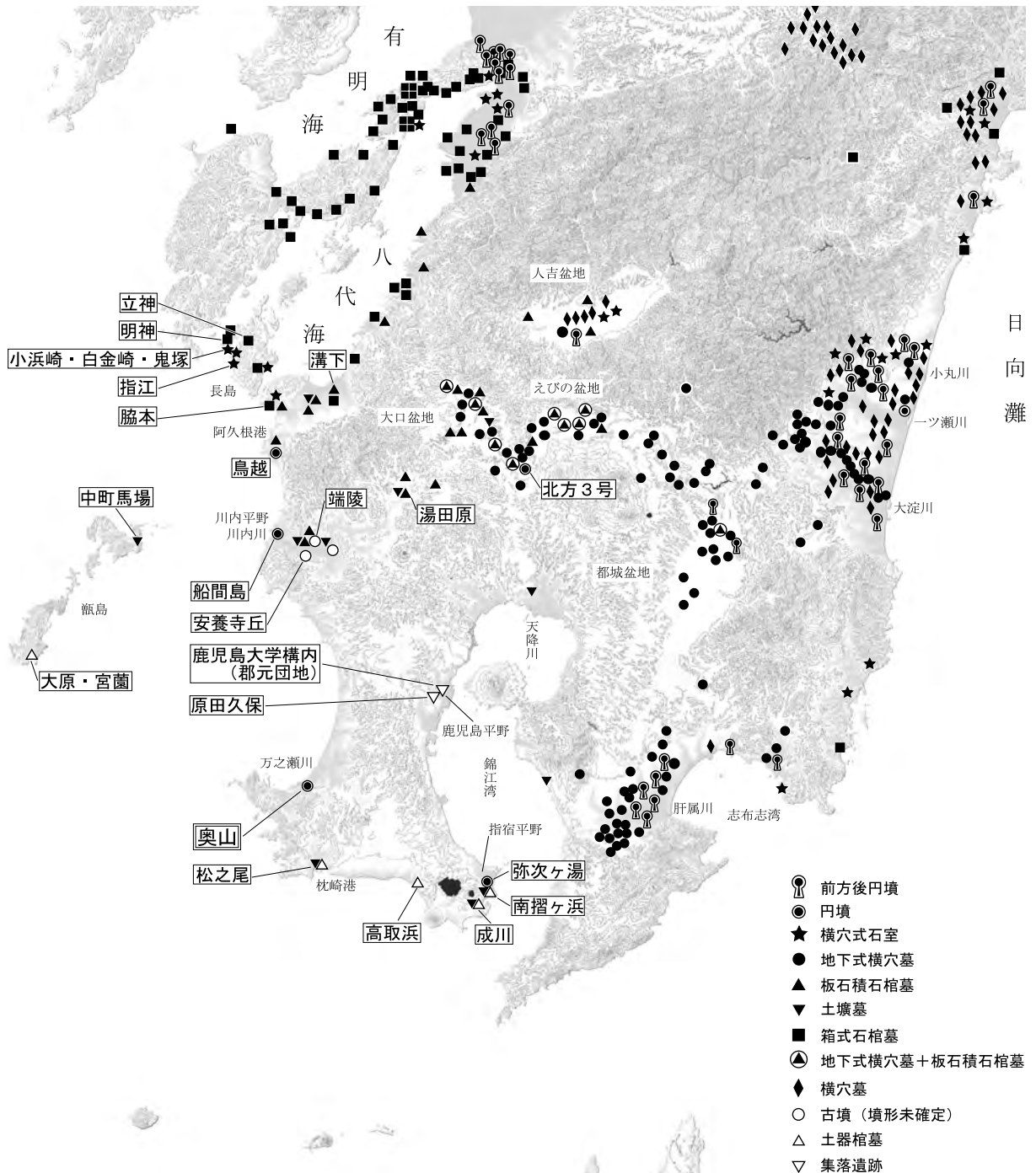


図21 九州南部の古墳時代墓制

安定的な地形には見えないが、万之瀬川が山地から加世田平野へ流れ入る起点にあり、万之瀬川と加世田川の合流点にも当たり、交通路上の要衝であるといえる。なお、現状では古墳時代住居群がきわめて川に近接した位置にあるが、明治期の地形図を見ると万之瀬川の流は現在よりも南側を流れており、また川幅も狭い。

遺物ではTK216型式の須恵器把手付椀、TK208型式の高杯形器台杯部が異なる住居から出土している。また、庄内式系の土器、一括出土の古墳時代前期後半とみられる布留式系の土器と西部四国系と推測する広口壺、瀬戸内系の細頸壺などが出土しており、須恵器以外にも搬入土器が多くみられる。なお、報告では胎土の類似性から布留系土器を在地で模倣の可能性を指摘するが、内面ヘラ削り、細かいハケ目などの技法からみて製作者の移動は考えられても、在

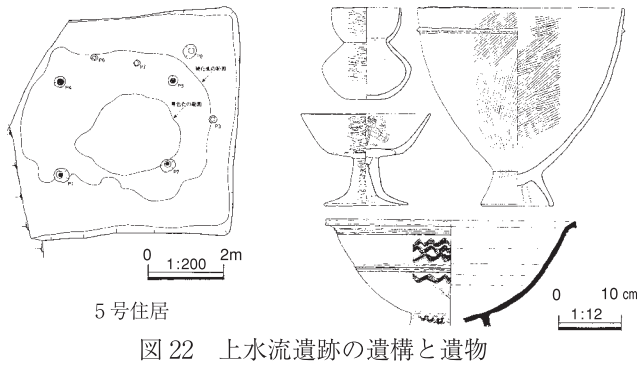


図22 上水流遺跡の遺構と遺物

地での成川式土器製作者の模倣はあり得ない。
 近在して、同じく万之瀬川に隣接する芝原遺跡では破鏡1面、小型倣製鏡3面の他、庄内系土器が出土しており、地域間交流に関わる遺物が顕著である。

(3) 白糸原遺跡 (図23-1)

万之瀬川に近接した低地に竪穴住居19軒が検出されている。成川式土器を中心とする多量の土器が出土しており、須恵器の出土量も多い。須恵器はおおむねTK208型式に位置づけられる杯身・甕・大型甕・把手付碗、甕・壺片が出土している。また、成川式土器の壺としてとらえられるものの中に土師器甕の影響を受けた丸底土器がある。

(4) 吹上地域の古墳時代集落

吹上小中原遺跡 (図23-2) 日置市吹上町、加世田平野北側の台地上に位置し、竪穴住居7軒と土器溜まりを検出している。土器溜まりは完形の中津野式甕が多数含まれる。住居の一つからは成川式土器とともに須恵器の杯蓋・大型甕・有蓋高杯が出土している。杯蓋・大型甕はTK208型式である。高杯は展示でしか実見しておらず、図では判断が難しいが、TK23型式のようである。

尾ヶ原遺跡 (図23-3) 吹上小中原遺跡に近在し、平野に面した微高地上に位置する。竪穴住居が8軒検出され、成川式土器に須恵器が伴って出土している。3号住居はTK23～TK47型式の杯身が出土し、当地では一般的でない口縁部をくの字にした丸底の甕が出土する。成川式の甕にも脚が伴わないものがあり、外的な土師器の影響によるものとみられる。4号住居はMT15～TK10型式の蓋杯が出土する。成川式の台付甕のほかくの字口縁の丸底甕が伴う。

入来遺跡 吹上砂丘後背地に面する台地上にあり、古墳時代の竪穴住居が10軒確認されている。住居跡内からは成川式土器とともに須恵器杯身・有蓋高杯の蓋・提瓶等が出土しておりTK10型式に位置づけられる。鹿見島ではわずかししか出土しない甌も出土している。

辻堂原遺跡 吹上浜砂丘背面のシラス台地上に位置し、竪穴住居104軒、土坑群、集落を区画する溝等が確認されている。遺構が数多く重複し、古墳時代前期相当の土器群、把手付碗といった初期須恵器も出土しており、長期に渡る拠点集落である。1点であるが製塩土器の脚とみられるもの出土している。

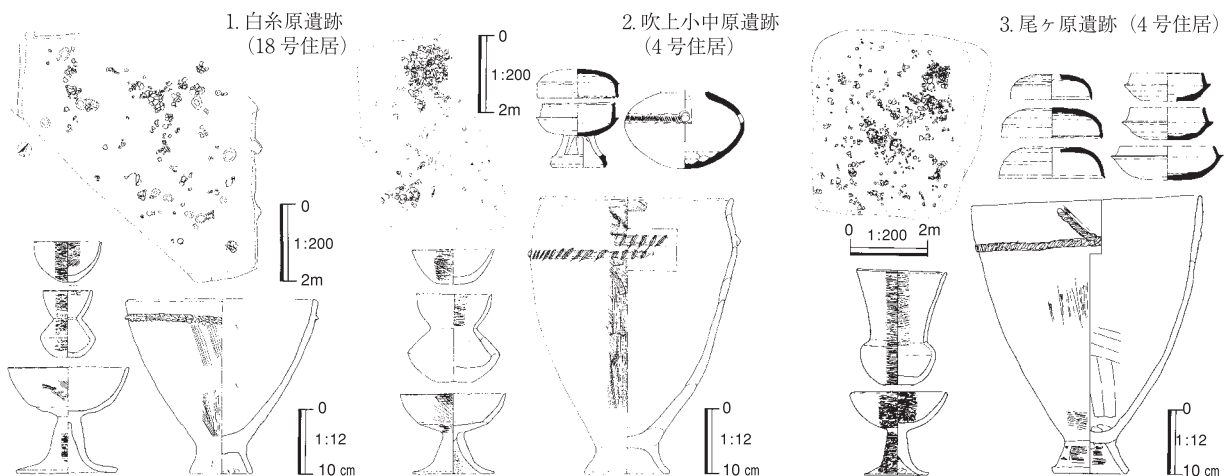


図23 加世田平野の古墳時代遺構と遺物

(5) 指宿・枕崎地域の古墳時代遺跡

弥次ヶ湯古墳(図24) 指宿市の低地、敷領遺跡中で確認された円墳である。7世紀代に降下した青ゴラ層で埋没した周溝が確認されている。

直径17.5mの円墳に復元でき、周溝幅約2mである。出土遺物は成川式土器の破片資料が主体であるため厳密な位置づけは難しいが、おおむね古墳時代中期後半段階とみてよい。

墳丘上部は削平されており、埋葬施設は確認されていない。日本列島最南端の古墳である。

弥次ヶ湯古墳の西約60mには古墳時代中期後半の溝があり、墳丘の削平された古墳の可能性が指摘され、赤塚2号墳とされている。2方向の溝が確認されたのみで復元長軸が8mにも満たないものであり、現状で古墳とするのは困難である。

南摺ヶ浜遺跡(図25) 指宿市の海岸に面する台地上に位置する。土壙墓を主体部とする円形周溝墓と土壙墓・土器棺墓を中心とする墓群である。

墓群中に立石あるいは標石が多数存在することを特徴とする。おおむね弥生時代後期～終末期を中心とする時期と古墳時代中期後葉を中心とする時期が主体となる。円形周溝墓は弥生時代終末期を中心とする時期であるが、いずれの時期ともに土器棺墓が多く、鉄器も伴う。古墳時代中期ではTK216～208型式の須恵器が出土しており、その前後の時期の鉄器も出土している。詳細は近く報告される予定である。

成川遺跡(図26) 指宿市山川町の成川盆地の緩傾斜地に立地する。土壙墓を中心とする墓域内に立石が存在し、九州南部古墳時代に独自の文化をもつ「立石土壙墓」群と評価されてきた。近年は立石は弥生時代中期後半の土器が伴う祭祀遺構とみられている。

墓域としては弥生時代終末期～古墳時代後期まで利用され、384体分の人骨が確認されている。土壙の確認されていないものもあるが、基本的には隅丸長方形の土壙墓である。伸展葬もあるが屈肢葬が多い。

鉄器を副葬するものもあり、また、墓域で多量に出土した土器の多くは土壙墓に供献されたものと考えられる。胴部に穿孔のある大型壺も多く、土器棺とみてよいであろう。九州南部古墳時代の土器型式である成川式土器の標識遺跡である。

鉄器には折り曲げ品を含む刀剣類、古墳時代中期～後期の鉄鏃のほか鉄鉾・鑄造鉄斧などがあり、なかにはこの遺跡に特徴的な異形鉄器が出土する。武器が多

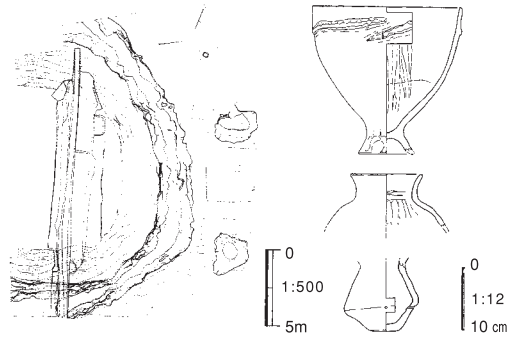


図24 弥次ヶ湯古墳



図25 南摺ヶ浜遺跡
(写真提供・鹿児島県立埋蔵文化財センター)

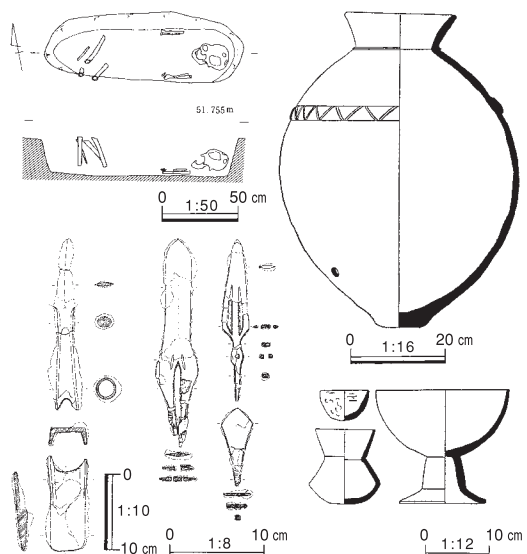


図26 成川遺跡

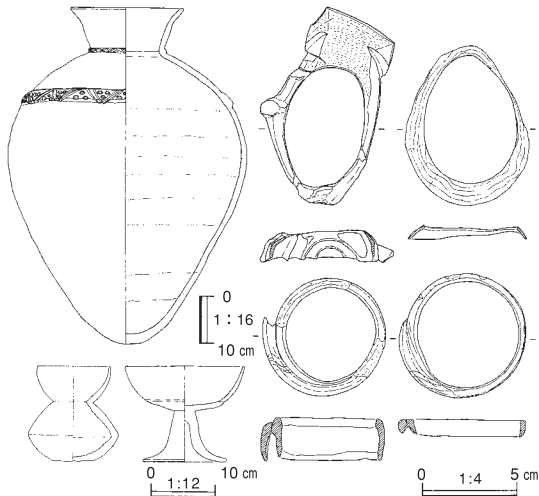


図27 松之尾遺跡

く、また男性が65%を占めることから、階層分化の未発達で勇猛な隼人の墓制というイメージ形成の元になった。

松之尾遺跡 (図27) 枕崎港に面する砂丘上に位置する。弥生時代終末期以降墓域として利用されており、土壙墓、土器棺墓とともに立石が確認されている。従来、古墳時代前期までの墓域とみられていたが、古墳時代中期や後期の副葬品とみられる鉄器が出土しており、成川遺跡同様に長期に渡る墓域と考えられる。また、ここでは時期は限定できないが立石も出土する。

供献土器や多量の土器のほか、貝輪が採集されている。ゴホウラ製貝輪2、オオツタノハ製貝輪2、イモガイ製貝輪5以上である。ゴホウラ製貝輪は鋏形石の形状に近くその祖型となるものである。

高取浜遺跡 南九州市顚娃町の海岸に面する砂丘から人骨・土器・大刀が出土している。松之尾遺跡同様に砂丘上の埋葬遺跡と考えられ、また土器は弥生時代終末期・古墳時代後期のものが出土しており、同じく長期に渡って利用された墓域と考えられる。

(6) 鹿児島平野の古墳時代遺跡

鹿児島大学構内(郡元団地)遺跡 古墳時代中期後半以降、古墳時代後期を中心とする大集落である。数100にのぼる竪穴住居が切り合いながら密集して構築されており、出土遺物も多い。鹿児島県内では須恵器の出土が最も多く、なかには陶質土器とみられるものも含んでいる。周辺で墓域は確認されていない。

原田久保遺跡 鹿児島市、シラス台地に挟まれた南の谷地形の低地部に位置する。遺構は確認されていないが遺物が多数出土しており、その中に初期須恵器を含む古墳時代土器が多く含まれている。

(7) 川内平野の古墳時代墓制

船間島古墳 (図28・29) 薩摩川内市、川内川河口に所在する島の頂部にある。直径17m、高さ2mの円墳とみられている。

墳頂部では蓋石が露出しており、板石小口積の竪穴式石槨がある。石槨内は赤色顔料が塗布されている。長側壁が倒れ込んでいるものとみられ、長大型の竪穴式石槨である可能性が高い。

安養寺丘古墳 川内川下流で川に面する入り江状の低地に突き出た丘陵頂部に築造された古

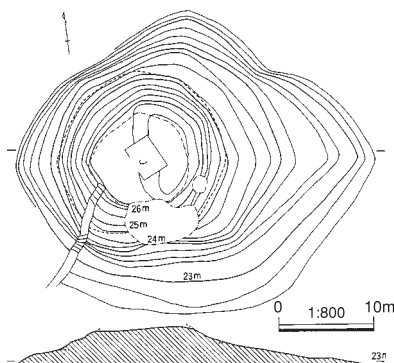


図28 船間島古墳 墳丘



図29 船間島古墳 主体部小口部

墳で、直径17mの円墳と考えられている。石棺材とみられる大型の板石が露出している。

端陵(図30) 川内平野中央部の独立丘陵頂部に所在する。測量調査が行われており、全長54mの前方後円墳であるともされているが、周囲は改変されていることや高低差も不自然で現況では確実な前方後円墳とはいえないと考える。墳頂部には板石があり、埋葬施設に関わる石材である可能性があるが、少なくとも近世には何らかの手が加えられていると考えられ、古墳時代のものとも限定できない。

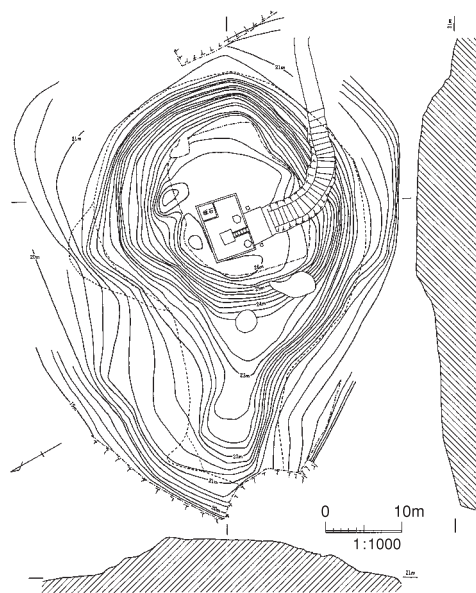


図30 端陵

(8) 薩摩地方北部の古墳時代墓制

鳥越古墳とその周辺(図31) 阿久根市の阿久根港を見下ろす台地上で長大型の竪穴式石槨が確認された。長さ4.4m、幅0.7m、高さ0.75mで、緩いU字形の粘土棺床をもち、板石小口積によって構築される。石室幅とベンガラ分布から東頭位とみられる。遺物はガラス玉が1点出土したのみである。

古墳発見時に周辺の削平が進んでおり、墳形は不明である。同じ台地上に近在して板石積石棺墓群が存在する。古墳時代中期のものと思われる。

脇本古墳群(図32) 阿久根市北部の脇本浜に近い砂丘裏側の微高地上に位置する。新田ヶ丘と糸割淵の2支群からなる古墳群である。

糸割淵1号墳・2号墳は箱式石棺で、刀剣類・鉄鏃などの鉄製品が出土している。1号墳は長頸鏃を含んでいる。

新田ヶ丘1号墳・2号墳は九州西岸最南端の後期横穴式石室である。いずれも大きく壊されており本来の形状や規模は判然としないが、いずれも残存する石材は大型で、腰石であろう。2号墳は玄室が方形で奥壁に沿って石障がある。

3号墳は板石積石棺墓、4号墳は箱式石棺で、一古墳群で多様な墓制をとることが特徴である。

板石積石棺墓と地下式横穴墓(図33) 北薩地域を代表する墓制は従来、地下式板石積石室墓と呼ばれ、ここで板石積石棺墓と呼ぶ墓制である。川内平野・出水平野・薩摩盆地・大口盆地およびその周辺域から、人吉盆地・えびの盆地などに分布する。とくに、大口・人吉・えびのなどの盆地地帯で盛んに築造されている。出土遺物からみる

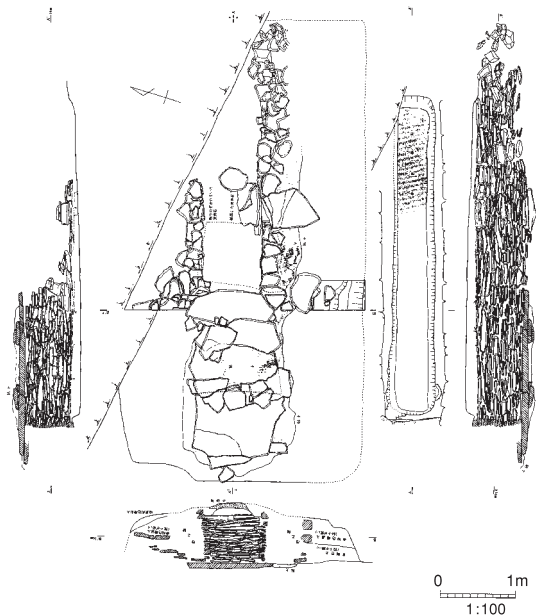


図31 鳥越古墳



図32 脇本古墳群



図33 横岡板石積石棺墓群

と、上限の位置づけは古墳時代前期後半にはさかのぼるが、それ以前は明確ではない。下限は中期中葉(TK216型式段階)以降までは確実に存在するが、それ以降は不明確である。

群をなして構築され、えびの盆地や大口盆地では地下式横穴墓と同群中に構築されているものもある。墳丘はみられず地表下に構築されるものが基本であるが、なかには墳丘や周溝をもつ例が確認されている。さつま町湯田原板石積石棺墓は長軸約5mの墳丘があり、湧水町永山10号板石積石棺墓は直径約7mの円形周溝をめぐらせる。湧水町北方3号墳は板石積石棺墓の可能性のある埋葬施設をもつ直径15～18mの円墳で、埋葬施設は不明ながら板石積石棺墓群中にあるさつま町別府原7号墳も墳丘をもつ。

長島の古墳(図34) 鹿児島北端の島、長島には多くの古墳が存在する。明神下岡遺跡・立神遺跡で石棺墓群が確認されており、板石積石棺墓の祖型に当たるもの

のとみられる。いずれも明確な出土遺物が伴わず年代は不明確であるが、断片的な資料からみると古墳時代前期を中心に考えられよう。

小浜崎1・2号墳は中期古墳である。1号墳は竪穴式石室とされるが長さ2.4mに対して幅が1.8mあり、初期横穴式石室である可能性を考慮すべきであろう。

白金崎古墳・鬼塚古墳をはじめ横穴式石室が多く確認されている。TK209型式段階で大型の腰石をもち方形に近い玄室平面形を呈し、熊本地域の古墳との関係で理解できる。

また指江古墳群・明神古墳群は、海浜部の礫層状に構築された積石塚である。幅1m以下で四壁をもつ竪穴系構造を呈しながら、羨門や腰石構造をもつ横穴系の竪穴式石室がある。明神古墳群では中期末に位置づけられる鉄鏃なども出土しているが、出土遺物の判明する埋葬施設はない。横穴系竪穴式石室をもつ古墳は石室構造とともに島嶼の積石塚という特徴も山口県ジーコンボ古墳群に共通しており、古墳時代終末期に属するものが少なからず存在する可能性は想定できる。

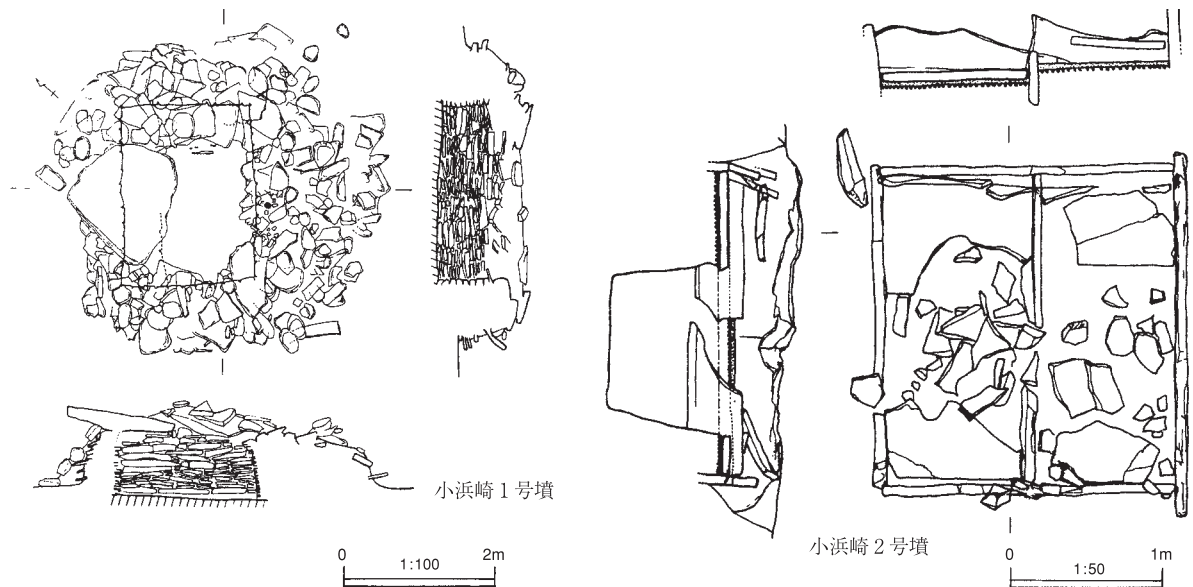


図34 長島の古墳

第2部 奥山古墳の調査

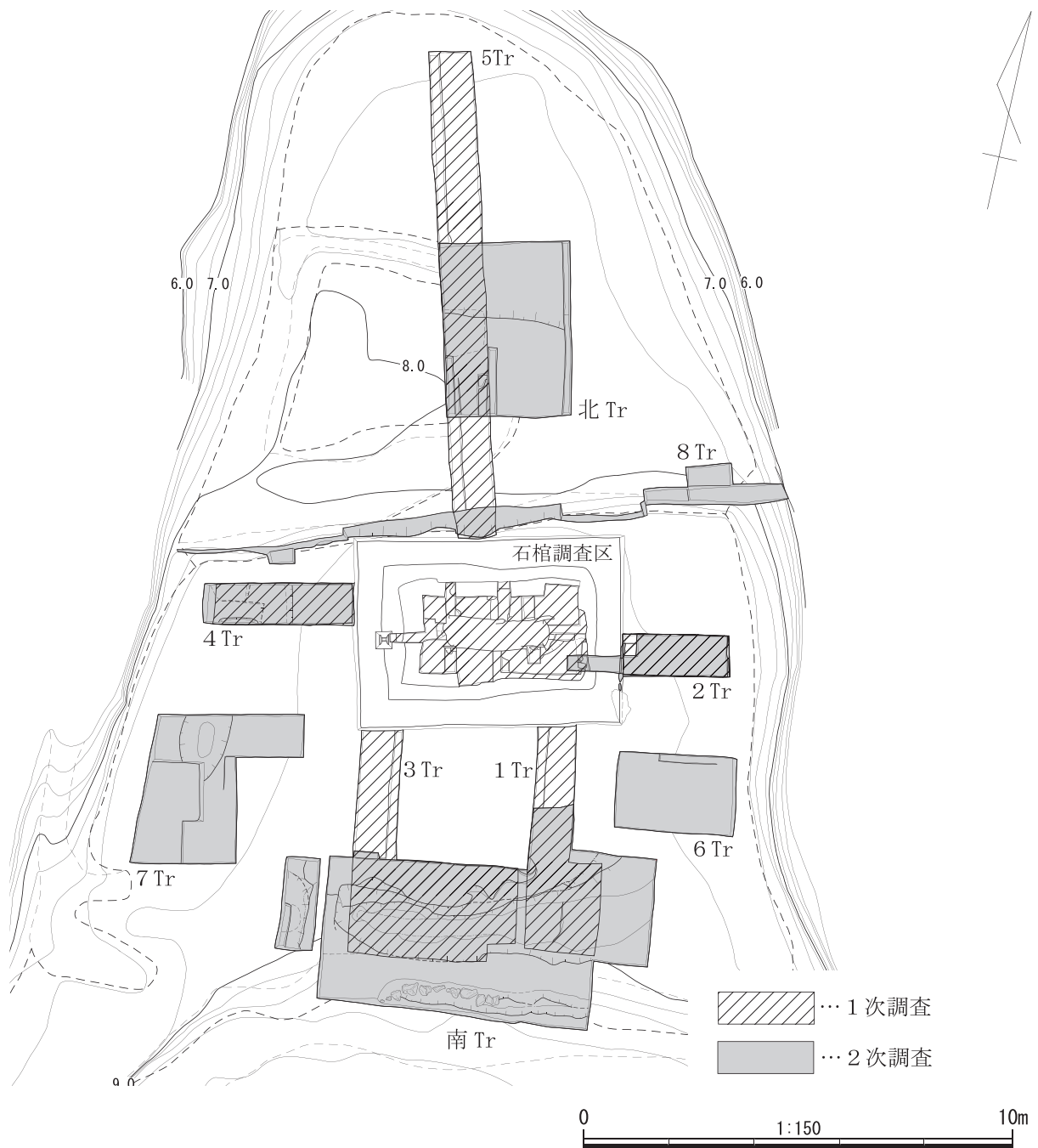


図35 奥山古墳 発掘調査区配置図



図 36 第 2 次調査現地説明会・作業風景

第1章 調査前の状況と測量調査

1. 調査前の管理状況（図版4）

本古墳は昭和48年、旧加世田市によって史跡に指定されていたため教育委員会および地権者によって管理されていた。常に古墳までの通路および石棺周辺の草刈りはなされており、現地での見学は可能であった。

石棺の周囲には安藤美静氏が造った石囲い・石塔・石灯籠があり、またスギが植林されている。石棺は内面壁体上部がわずかに観察できる状態で露出していたが、スギによって護られ直接風雨にさらされてはいなかった。また、2004年頃からイノシシが石棺周辺に出没し、石囲いなどを荒らすようになっていた。そのため加世田市教育委員会は有刺鉄線を石棺周辺に張り巡らしていた。

調査にあたっては、この有刺鉄線を取り外すことから入り、草刈りおよび清掃をまず開始した。その後、周辺地形測量を開始し、発掘調査に進んでいる。

2. 測量調査（図37）

すでに地形に関して説明したとおり、本古墳は潟湖に突き出した舌状に延びる尾根上に立地する。尾根上の石棺周囲は平坦に削平され、また南北に延びる尾根上に平坦面を造りつつ階段状に造成されていることが表面観察からもうかがえた。

測量は石棺のある平坦面を中心に南側の上段、北側の下段平坦面の範囲まで行った。東西はきわめて切り立った崖面を形成している。また石棺の北側下段が尾根の先端部になり、これより北側も急激な崖面を形成している。

昭和6年の開墾時に石棺が発見されたため、それより後、この周辺は石囲いが造られ、保護されているとみられるが、下段は近年まで畑地として利用されていた痕跡がうかがえた。上段はすでに山林化しており、長く利用されていない状況がうかがえた。

地形からは石棺以外の遺構は確認できず、墳丘が存在する可能性などは観察できなかった。また、近世・近代の遺物はわずかに散布していたが古墳に伴う遺物の表採などもまったくなかった。

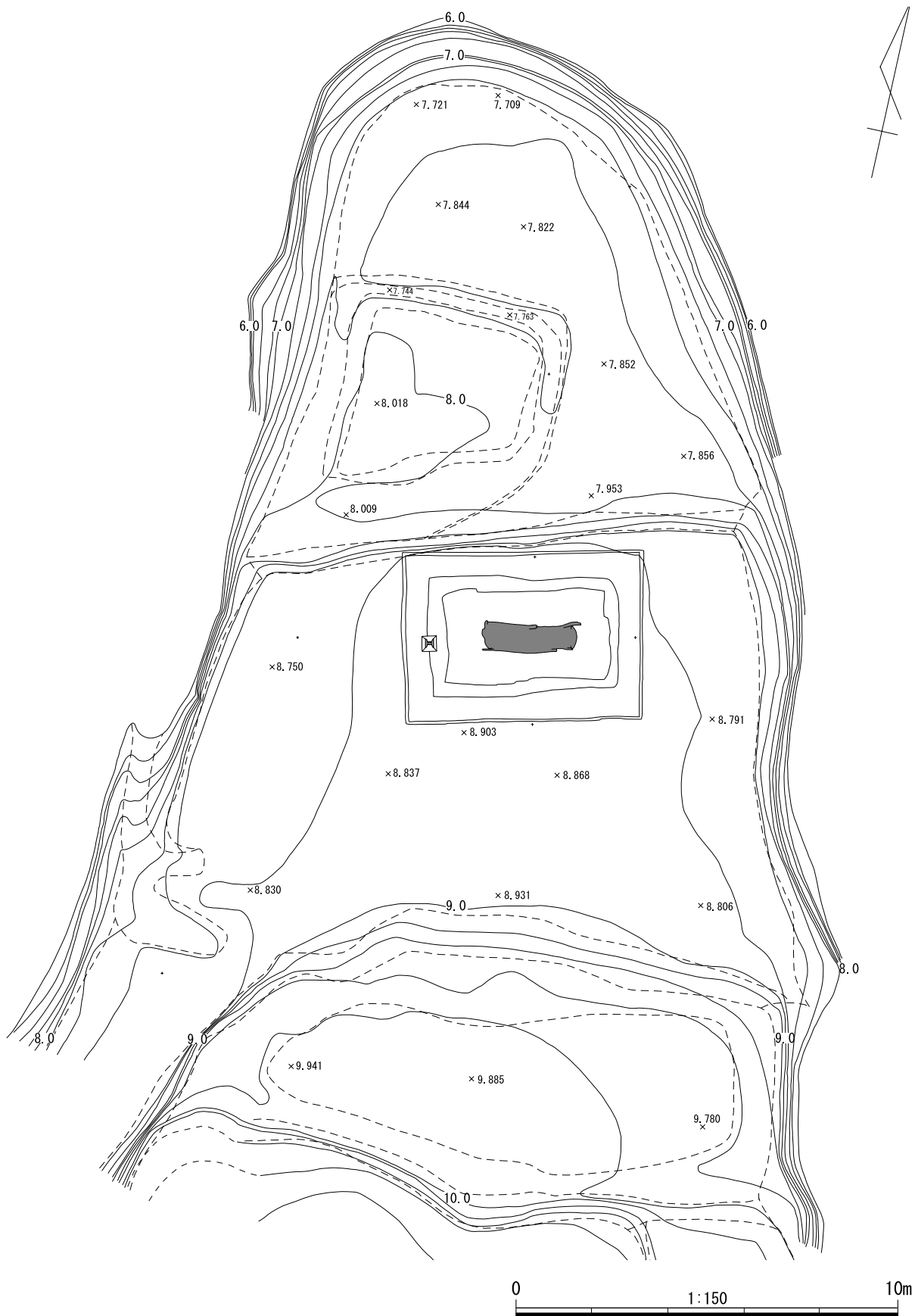


図 37 奥山古墳 墳丘測量図

第2章 主体部－石棺－

1. 主体部調査区の設定 (図35・39)

調査開始当初、すでに石棺棺身の上部は露出していた。また、周囲には以前マツが生えており、その根が大きくなって石棺を圧迫していたという話があった。北東側石が割れているのは、その根による圧迫のためだと考えられる。これらのことから、相当削平および攪乱がなされているであろうと想定していた。

調査にあたっては石棺主軸およびそれに直交して土層ベルトを設定し、地権者によって造られた石囲いの内側で石棺周囲の表土除去を行った。また、木の根によって攪乱された箇所を選び、それを利用して断ち割りのサブトレンチを設定した。

昭和17年報告では実測図に石棺の下部構造まで描写されているので、この段階でもすでに棺床部の断ち割りを行っているとみられる。また、昭和16年の調査以後に万世町当局が「朱泥精査」を行ったと昭和17年報告に記載されていることから、ある程度は棺床部が掘削されていると想定された。

調査にあたっては石棺構造の確認のため、昭和16年の既掘部を検出し、石棺内でのサブトレンチの設定を考えたが、丁寧に埋め戻したためか既掘箇所が判然としなかったため、主軸ライン上の小口付近、主軸に直交する石棺中央付近、小口石材の形状確認の各箇所に下部構造を確認するため幅10cmのサブトレンチを設定した。

2. 石棺

(図40～45、図版5～12)

(1) 残存状態

調査に入り石棺周囲の表土を除去したところ、直下で地山面が検出された。石棺周辺には根の痕跡とみられる攪乱や、一部新しく掘り返された箇所とみられる攪乱があったが、石棺は地山に墓壇を掘り、据え付けられていることが判明した。

上述したように、北東側石は外側から圧迫され、石材の中央部分および小口石との接点で石材が縦方向に割れ、内側にせり出していた。

石棺蓋石は昭和17年報告でも大型石材2枚を中心としたものであったことが記載されており、本来は大型石材であったとみられるが、いずれ

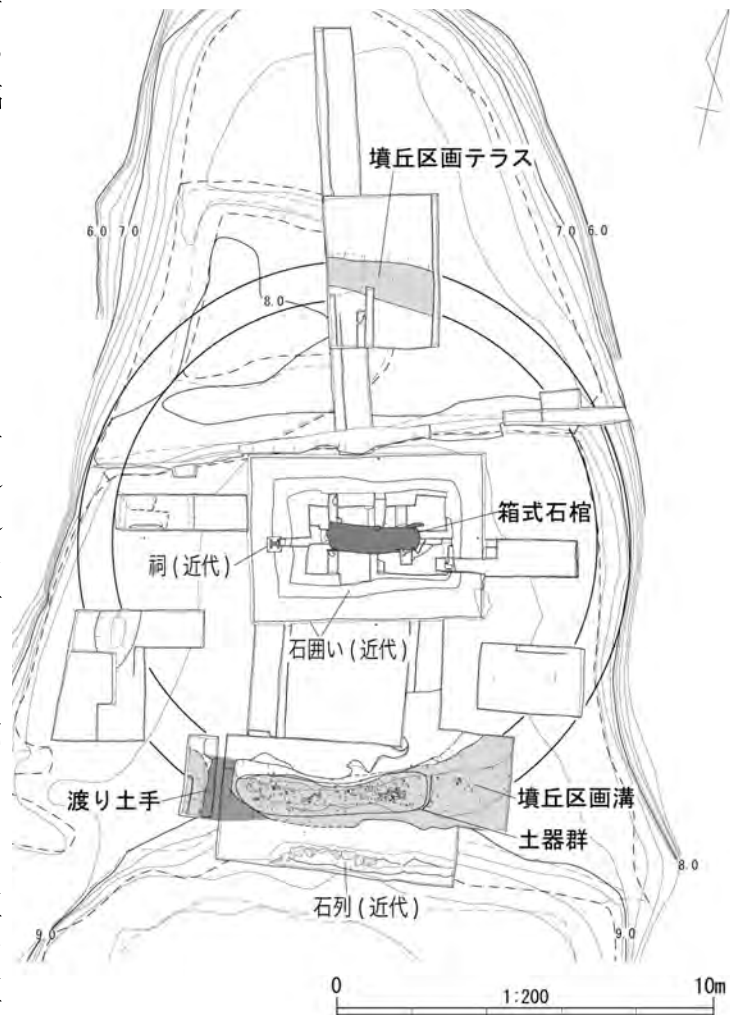


図38 奥山古墳 遺構概要図

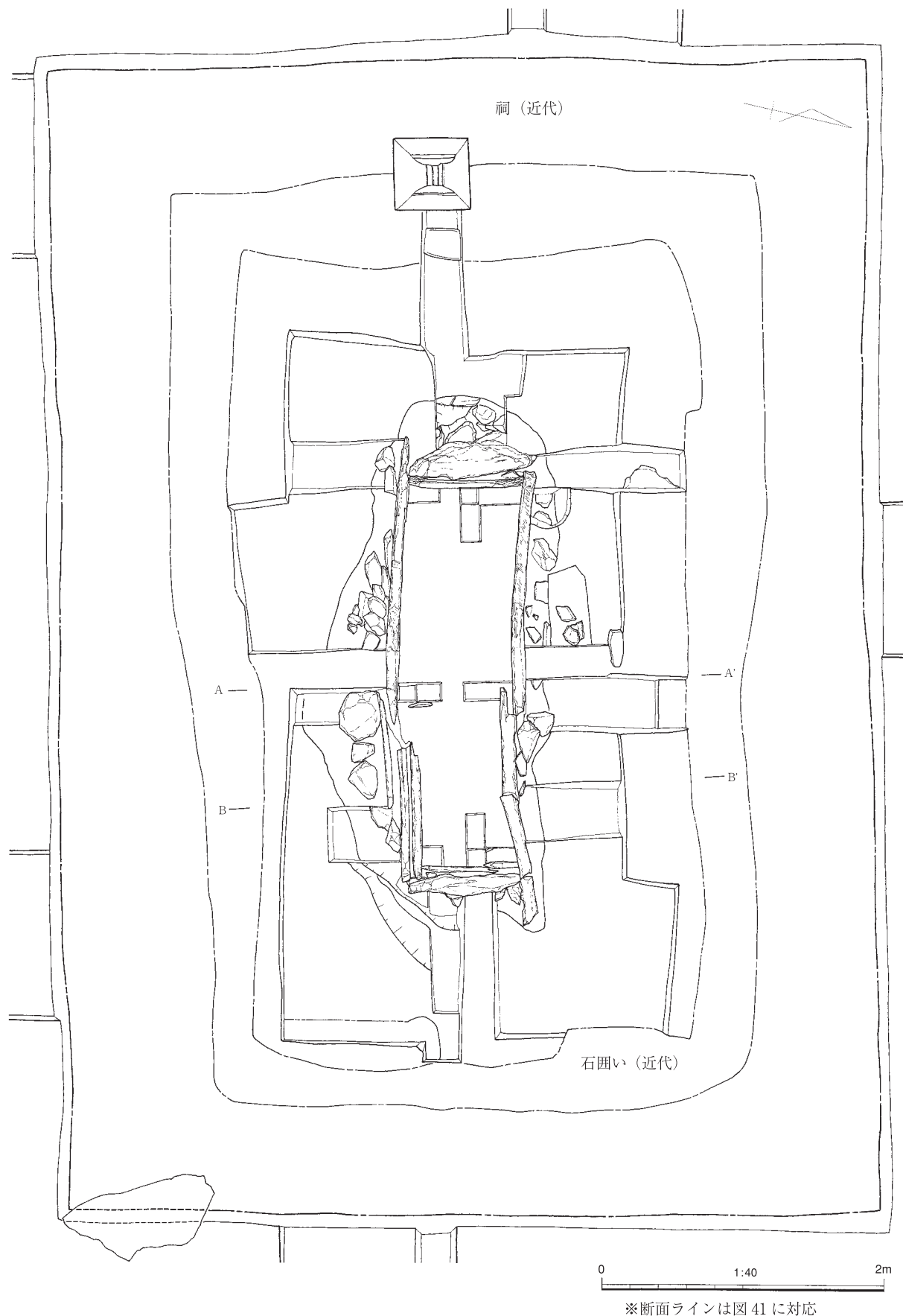


図39 石棺調査区 平面図

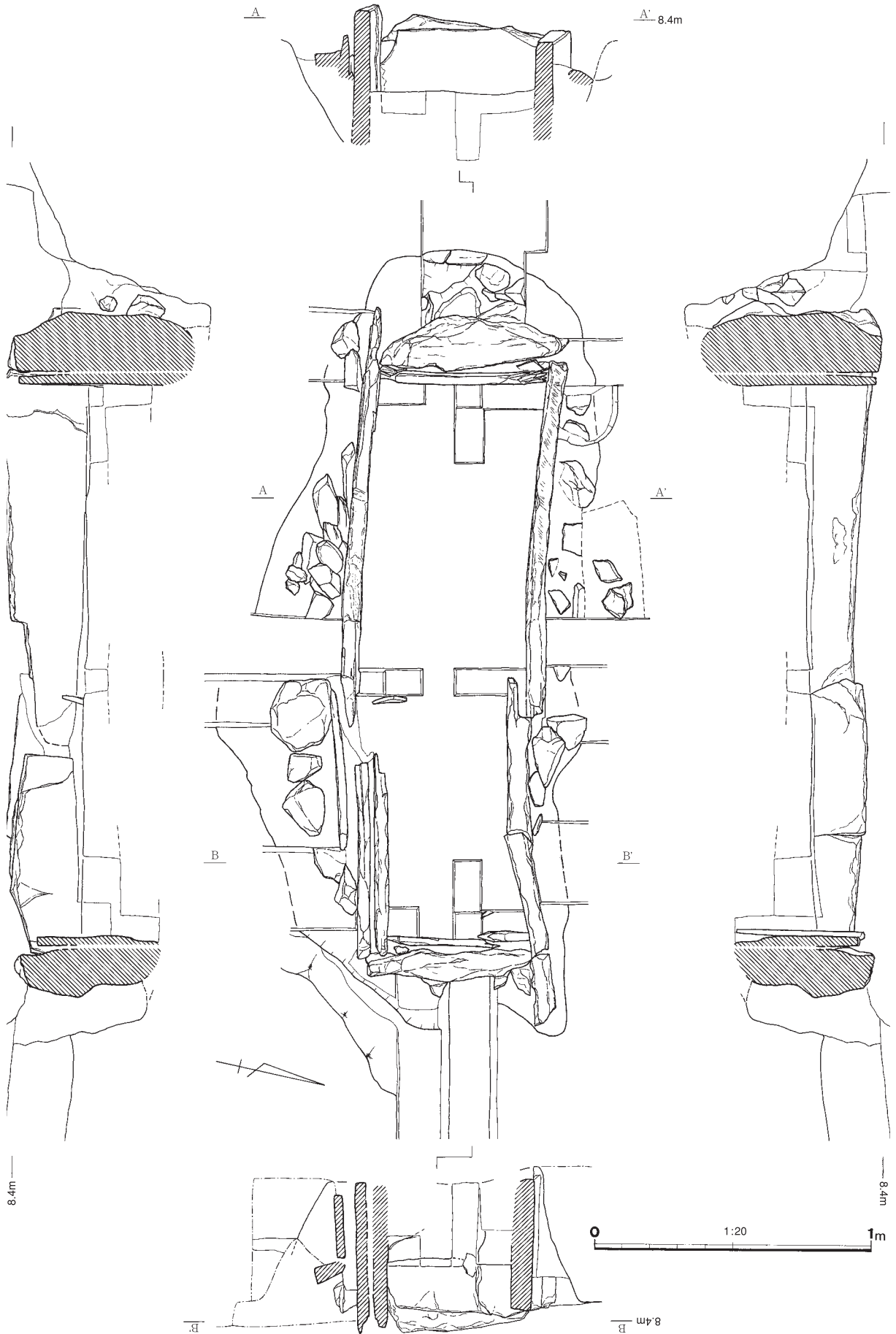


图40 石棺平面・断面图

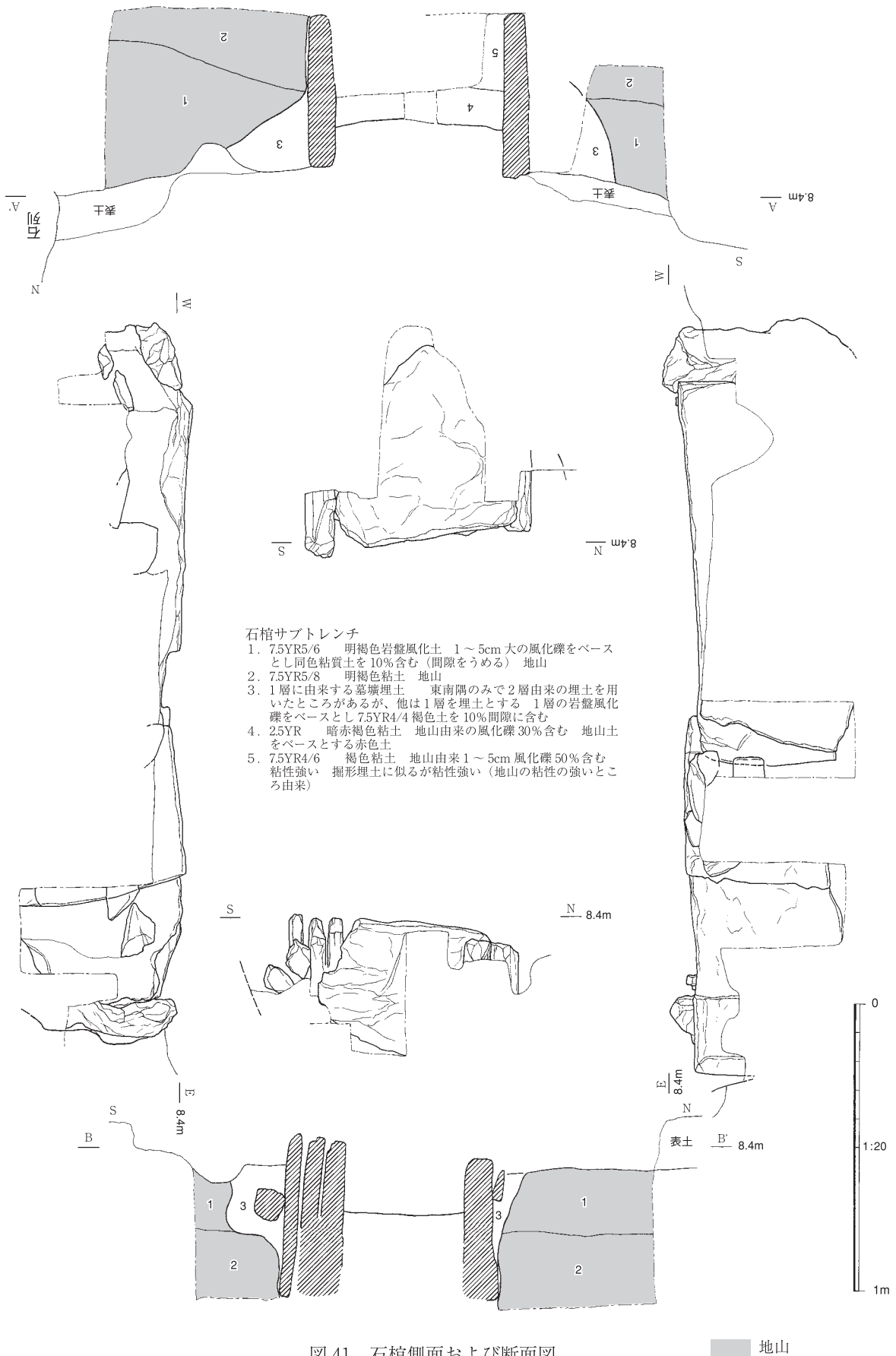


図41 石棺側面および断面図

も破損した状態で石棺棺身周辺に置かれていた。子供が乗って遊び割ったものだという話が伝わっている。

石棺棺身上半は露出しており、塗布されていたであろう赤色顔料は肉眼では見られなかったが、その他にとくに損傷は確認できなかった。残存する蓋石石材のうちで最も大きい石材の内面側は薄く赤みがかっている。

(2) 形態・規模

概要 石棺の長辺では2枚の石材を一部重ねて接ぎ合わせる。南東長側石は3枚の石材を重ねている。小口石は東西ともに2枚の石材を内外に重ねて造る。

規模 石棺の規模は全長259cm・最大幅72.5cmを測る。長辺内法200cm、西小口内法61cm、東小口内法51cmである。

石材の厚さは西北・西南長側石が6～7cm、東北長側石が8cmを測る。東南長側石の厚さは外側石3～4cm、中側石4～5cm、内側石5～6cmである。

東西ともに内側小口石は薄い板材とし、外側小口石は厚い石材で、同様の石材を組み合わせて用いている。西内側小口石は厚さ3～4cm、西外側小口石は不整形であるが最大22cmである。東内側小口石は厚さ3～4cm、東外側小口石は最大17cmである。

高さ 東西南北いずれの石材も高さは50cm以上あり、そのうち30cm程度を埋めている。すなわち石棺内の空間の高さは20cm程度である。底石はなく、棺床には赤色土が厚さ10～15cm充填されており、それより下方は石材下端まで粘土で埋めている。

頭位 昭和17年報告では昭和6年の安藤氏の開棺状況を記録し、西頭位であったとする。また、小口付近での棺幅は西側が10cmほど広いことは、この記録と符合し、まさしく西頭位であったと理解できる。

蓋石 蓋石は大型の板状石材を用いたと考えられるが、大部分は破碎されたものとみられる。現存する最大の石材の最長部で115cm、長軸に直交する最大幅98cm、厚さ9cmである(図42)。平面的には平らであり、棺身との合わせ目に段を彫り出すなどの造作はみられない。片面は赤くなっており、赤色顔料が塗布された内面とみることができる。赤色顔料には濃淡があるが、全体的に薄くなっている。

棺身上端のレベルは各石材で異なっており蓋石は水平には掛かっていなかったとみられる。上端部は西南長側石がもっとも高く、東南長側石がそれに次ぐ。さらに西・東の小口石、北東長側石、北西長側石の順になる。よって、西南部が最も高く、基本的には南から北に向かって傾斜して掛かっていたと考えられる。また、小口石と西北側長側石との高さからみると、蓋石と西北側長側石上端とは多くの部分で接しておらず、その間は3～6cm程の隙間が開いていたものと考えられる。

墓壇 墓壇は石棺石材より一回り大きく地山に掘り込まれている。調査時にはすでに棺身石材が地表より飛び出した状態であったため、本来の深さや規模は不明である。現状では東西283cm、南北122cmを測る。南側の墓壇が広く掘られている一方で、北側の墓壇は石棺と墓壇壁が近接している。北側では墓壇壁と石材が一部接するような状況である。

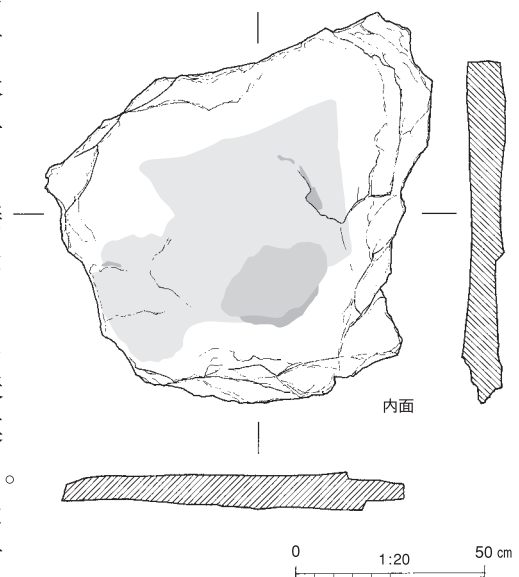


図42 蓋石平面・断面図

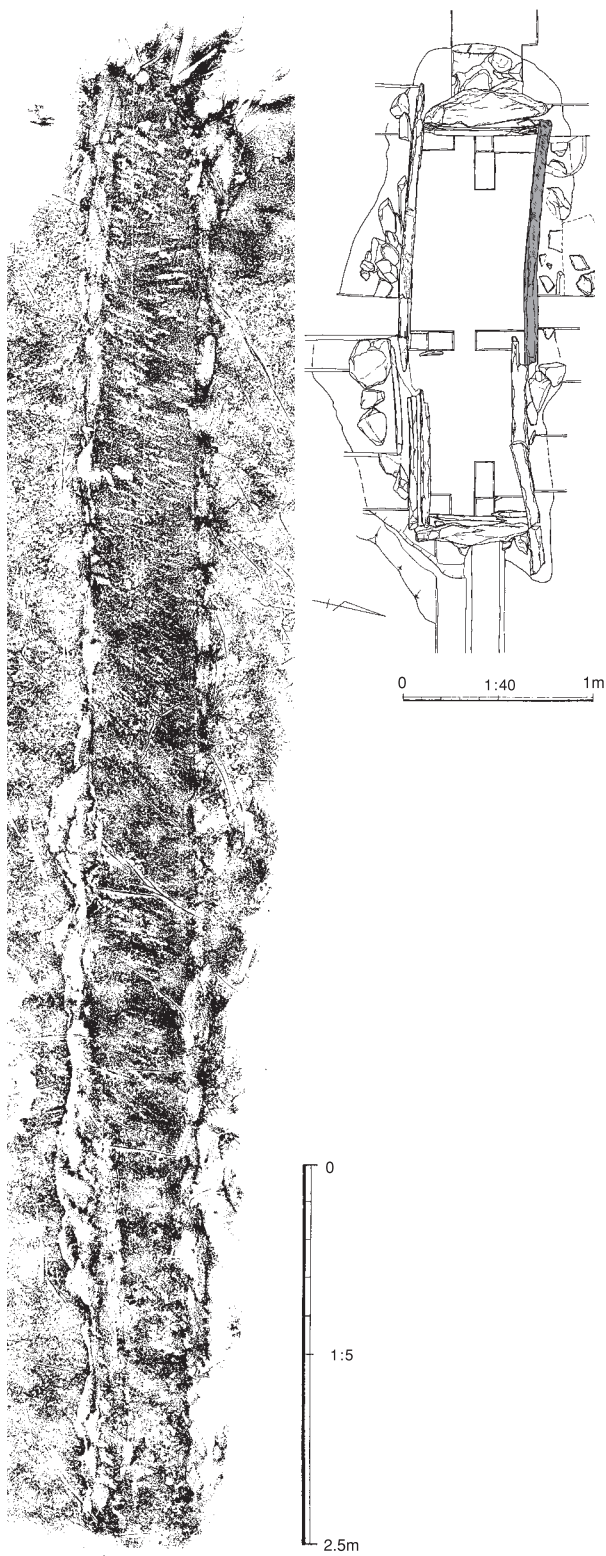


図43 石棺西北長側石加工痕

墓壙内には部分的に礫が充填されているが、墓壙の幅に合わせて石材の大きさも異なる。北東側の墓壙と石棺石材が接する箇所では当然、石材はみられず、北西側では拳大くらいの礫を中心とし、墓壙幅の広い南側では拳大から人頭大までの礫が充填されている。

(3) 構築方法・加工痕

東西とも小口石と接する石棺長側石には、小口石を嵌め込むための溝を彫り出して、そこに小口石を挟み込み組接構造とする。そのため、両者の間には隙間が存在せず、きわめて密着した状態を保っていた。北側長側石の継ぎ手には、削り込み段を両側の石につくり、嵌め込んで相欠接構造にして合わせている。

北西の長側石上端面には敲打痕とチョウナタキ技法とみられる痕跡がある（図43）。長側石および内側小口石には側縁部に沿って打割して形状を整えたとみられる剥離痕が各所にみられる。

本来は板状構造の自然石を利用しているが、要所にはきわめて精巧な加工技術が用いられている。

北東側では墓壙壁と長側石が接するような状況である一方、南側墓壙壁は石材から離れて広く掘り込まれている。石棺の構築に当たって、石材が墓壙壁と接するような遊びのない状態では後からの石材挿入は考えがたい。これは北側長側石が先に立てられ、最後に南側長側石が立てられた状況を反映していると考えられよう。

南北断面の墓壙底では北側石材下が一段下がっており、南側は平坦であることも、北側を先に立て、南側は最後に充填したことを推測させる。また南東側石材は長い石材が不足し3枚の石材で補っているが、石材の不足という事態の発生からみると、この部分が最後に設置されたものとみられる。北側長側石が加工度の高い石材を用いていることは、逆にこの部分が初期の労力を注入していたことを表しているものとみられる。墓壙に充填されている石材もこの部分が最も大きい。

(4) 石棺石材

石棺石材に関しては鹿児島大学総合研究博物館 大木公彦教授の所見による。第1次調査の際、石棺剥離破片や周囲に散乱していた石材を一部サンプルとして持ち帰り、顕微鏡による肉眼観察を依頼した。また、第2次調査の際には現地にて肉眼観察にあわせて、剥離破片の一部をサンプルとして採取し、顕微鏡下での肉眼観察を依頼した。

その結果、石棺石材には以下の三種が確認された。

- 1) 堆積岩＝砂岩：西北長側石・東北長側石・南西長側石・南東長側石（内側）
- 2) 火山岩＝安山岩：蓋石・西内側小口・東内側小口石・南東長側石（外側・中側）
- 3) 火山岩＝凝灰岩：西外側小口石・西外側小口石

長側石に使われた砂岩は石英を多量に含み、風化した花崗岩に由来する堆積岩の石英質アレナイト、蓋石は斑状安山岩、西小口石材とみられる崩落石は粗面安山岩に細分が可能で、また調査前の石棺周囲に散乱していたものには砂岩のほか玄武岩質安山岩などがあつた。

このうち、安山岩および凝灰岩は薩摩半島でも入手可能な石材であるが、石英質の砂岩は近隣には存在せず長島以北の熊本県天草地域に顕著に分布するものである。

すなわち、安山岩・凝灰岩は在地品もしくは薩摩地域内での調達が考えられるが、砂岩は長距離の搬入品である。これらの3種の石材を持ち寄って石棺を構築している。また、なかでも割り込みや相欠接などの技法が用いられるのは砂岩のみである。

(5) 石棺のまとめ

石棺移動説の否定 奥山古墳の石棺は発見後、一時地主宅に移され、その後に再び原位置に復したとの謂われがあつた。しかし、調査の結果からそのような事実はないと判断する。

すなわち、石棺掘形を再掘削した形跡がなく、石棺石材ギリギリの掘削しか行っていないこと。石棺石材がきわめて精巧に組み合わせられていること。とくに小口石と長側石との隙間ない組み合わせなどは再設置では行い得ないものである。墓壇内埋土も締まっており、再掘削された形跡はうかがえない。

昭和6年に移されたのは出土遺物と蓋石といった一部の石材であると考えられ、本石棺自体が解体された事実はない。

石棺をめぐる問題 奥山古墳周辺に箱式石棺の系譜は存在せず、他地域からの影響を受けたものであることは明らかである。ここでの石材に天草産石材が含まれることとともに、精巧な箱式石棺構築技術は熊本県上天草市千崎古墳群を代表とする天草地域で分布が知られる。天草～宇土半島地域は石棺が数多く構築された地域であり、他地域の箱式石棺ではみられない在地石材の利用による優れた石棺製作技術が顕著にみられる地域である。したがって、奥山古墳の石棺は天草～宇土半島地域の石棺製作技術に密接な関連をもつものと推定する。

すなわち、小口石は2石を内外に重ねて立てており、上天草市千崎22号墳にも小口石材を2枚とする例があり関連がうかがえる。

また、長側石には砂岩と安山岩が用いられ、小口外側の石は凝灰岩、内側は安山岩からなる特徴的な構造をもっている。砂岩は天草地域での産出・石材の搬入が考えられ、製作技術とあわせて本石棺の構築には天草～宇土半島地域の集団が関与しているとみてよいであろう。

調査後の措置 石棺は風雨にさらされると風化するため保存のためには埋め戻さなければならない。調査後は石棺の上部は観察できるようにしつつ石棺本体は埋め戻した。また、周囲に散乱していた石材は集めて石棺内に収めて埋めている。地山面・石棺内面は農業用ビニールシート、土嚢袋などを用いて保護を図っている。

3. 出土遺物 (図46、図版27)

(1) 概要および出土状況

今回の調査では、主体部から遺物は出土していない。副葬品としては南さつま市立加世田郷土資料館が所蔵するものが全てである。この資料をあらためてここで報告しておく。

昭和17年報告における安藤美静氏からの聞き取りによると、頭位は西で埋葬されており、南側壁に沿って鉄剣・刀子が添えられていたとのことである。

さらに、藤森・土持・住谷氏等の調査以後、万世町当局が「朱泥精査」を行いガラス小玉1点・鉄鏃片と思われる小鉄片を検出したとする。

ここに報告された遺物は現存しているが、このうち鉄鏃片と考えられた資料は鉄滓であった。石棺内で出土したのものでもないので、おそらく今回の調査でも墳丘から出土した他の鉄滓と同様の性格のものであろう。古墳に伴うものではないと考えられる。以下、古墳出土とみられる遺物について記述を行う。

(2) 鉄剣 (図46-1、図版27-1~4)

全体に表面は錆びており、分割されているが比較的状态は安定している。鋒は欠損しており、本来の全長は確認できないが、残存長は50.3cmである。そのうち、莖部長は10.2cmである。厚さは刃部・莖部ともに4mmを測る。欠損部から程なく鋒先端は終息すると思われる。

刃部は両丸造りとし、鋒部から関部に向かって緩やかに幅を拡げている。鋒側刃部幅2.1cm、残存刃部中央付近では幅2.4cm、関部付近では2.8cmを測る。刃部の厚さは4mmである。

関は鈍角気味に落ちるが直角関の範疇で捉えられる。関の段は2.5mmと落ちはわずかである。莖は一文字尻で、関部から莖尻に向かって幅を狭める。関部での幅2.1cm、莖尻部での幅1.4cmである。莖部の中央には直径3.5mmの目釘孔が開けられている。

全体に棺床土とみられる土が付着し、赤味を帯びている。片面の刃部および莖部の表面には繊維の痕跡が付着する。その裏面では刃部の一部にのみわずかに繊維が付着する。繊維は0.7~0.8mm幅の糸を平織りしたものとみられる。

先端が欠損し、土の付着した状況ではあるが、現状での重量は252.11gである。

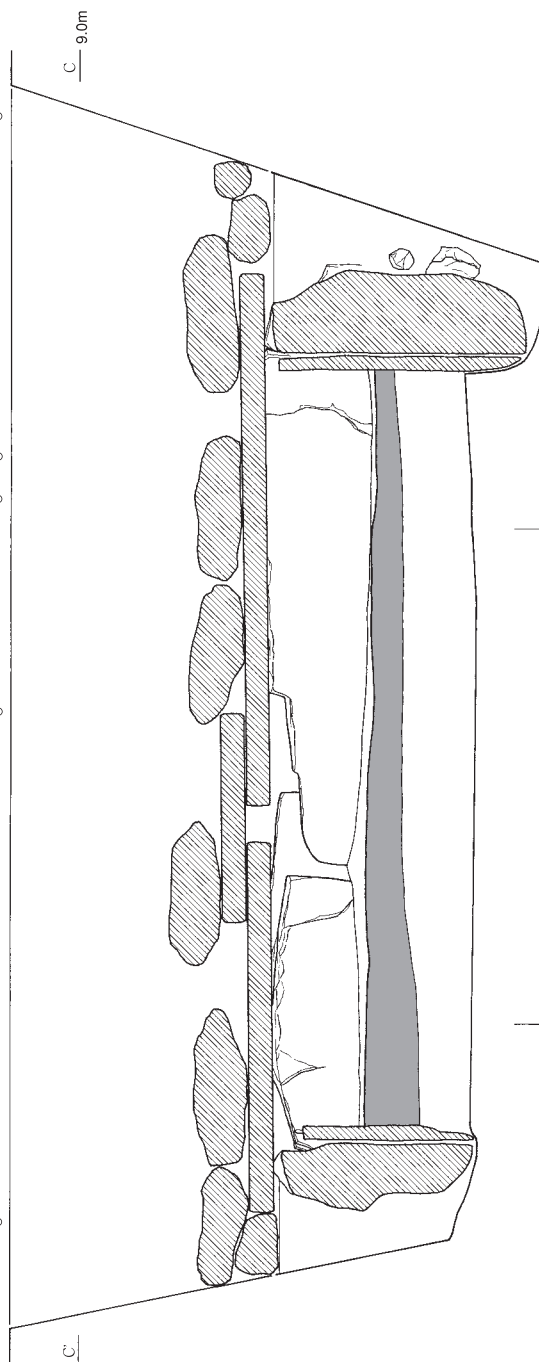


図44 石棺復元 平面・断面図 (1)

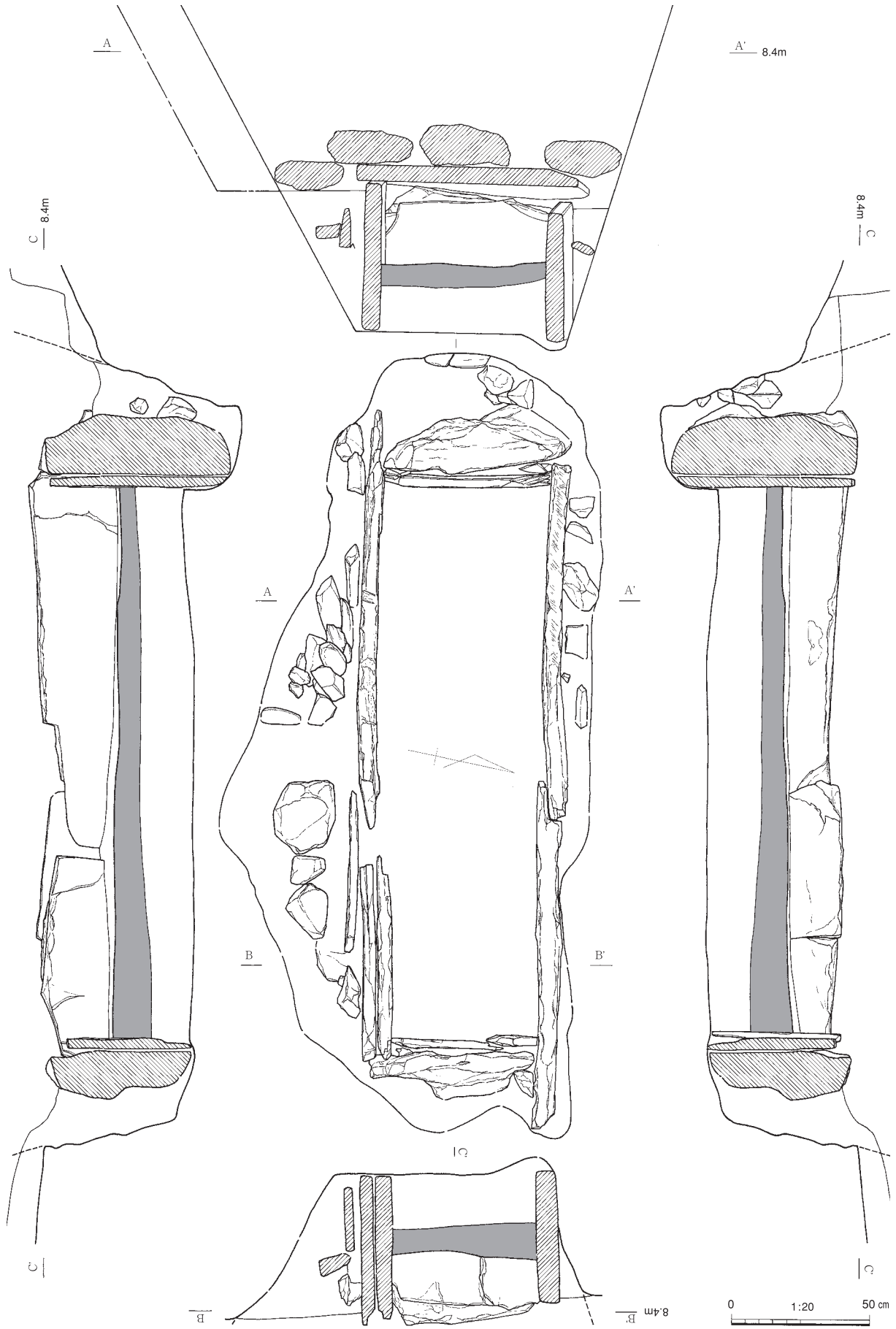
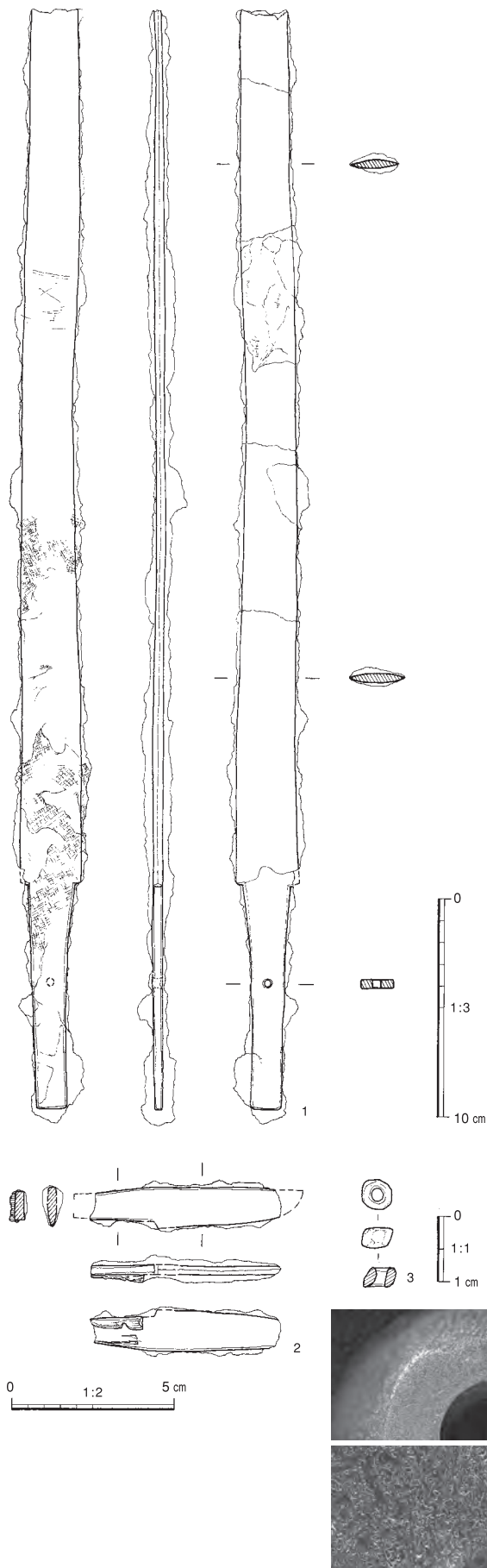


図45 石棺復元 平面・断面図 (2)



(3) 刀子 (図46-2、図版27-5・6)

全体に錆びているが、鉄剣同様に状態は安定している。鋒、茎尻ともに欠損している。残存全長は5.85cmである。錆のため明確ではないが、刃部・茎部ともに厚さは3mmとみられる。

刃部は片刃造りで、鋒部から関部に向かって幅を拡げ、0.8~1.25cmを測る。

関部は錆のため不明確ながら、鈍角ないし撫関とみられる。茎部は関部から茎尻に向かって幅を減じ、1.05~0.8cmを測る。茎部の片面には木質が付着している。目釘はない。

鉄剣同様に全体に棺床土とみられる土が付着し、赤味を帯びている。

一部欠損し、土の付着した状況ではあるが、現状での重量は7.97gである。

(4) 玉 (図46-3、図版27-10)

直径4.8mm、高さ2.9mmのガラス小玉である。色調は透明感のあるスカイブルーを呈する。

側面も含めて全体に不整形ながら面をもち、多角形状を呈している。孔径は2.9mmである。重量は0.07gである。

(5) 人骨

昭和16年調査による人骨が残存する。当時は頭蓋骨が確認できたようであるが、現状ではその一部が保存されているに過ぎない。長い期間のなかで破砕が進行したものとみられる。詳細については、竹中正巳・下野真理子氏による別稿による(第6章)。

(6) 赤色顔料

棺床土は濃厚な赤を呈し、石棺石材は昭和16年の段階では赤く塗られていたとするが、現状では蓋石に赤みを帯びた部分を確認できるにとどまる。赤色顔料の詳細については、志賀智史氏による別稿による(第7章)。

図46 石棺出土遺物 (加世田郷土資料館蔵)

第3章 墳丘構造

1. トレンチの設定 (図35)

(1) 第1次調査

第1次調査において、石棺以外の墳丘には、その構造を確認するため東西南北に1～5トレンチを設定した。トレンチの設定に当たっては方位や石棺主軸を意識しているが、大きな樹木等を避けているために任意の設定となっている。

(2) 第2次調査

第1次調査では、墳丘区画溝が調査区外にまで延びていたことや、事前に想定していた以上に深いことが判明し、その全体の調査には至らなかった。また、土器も多数埋まっていることが判明し、調査期間中にすべて掘り下げることができなかった。

さらに、東・西・北、各方向の墳丘確認も不十分で、墳丘に関しては当初の想定以上に大型であったためにいずれの方向のトレンチにおいても十分な調査を行えていなかった。

そのため、第2次調査は古墳の墳丘に関わる構造の解明と土器を伴う祭祀区域の解明を主たる目的として実施した。その結果、古墳の形状、古墳築造以後に行われた地形の改変について新たな知見を得ることができ、土器も多く出土した。

2. トレンチ各説

(1) 墳丘北側 (図47・48、図版13)

5トレンチ 第1次調査において、石棺より北側の開墾によって一段低く削平、造成された平坦面で南北に調査区を設定した。地山面の検出を行い、墳端部とみられるテラス面を検出した。現在平坦面となっている墳端テラス面より北側の尾根先端部は大量の盛土で埋めて造成されたものであることが判明した。本来の地山はテラス面より尾根先端部に向かって下降して行くことが確認できた。

北トレンチ 第1次調査の5トレンチで確認したテラス部を面的にとらえるため、第2次調査においてその東部を拡張して設定した。テラス面が東側に面的に連なって広がることを確認した。ただし、平坦面自体やその上部墳丘側にしまりの強い、盛土の可能性のある堆積土層が確認できたが、テラス面付近は地山がきわめて小さい単位で変化に富んでおり、地山か盛土か明確な区分ができない部分がほとんどであった。遺物は出土していない。

8トレンチ 墳丘北東部の畑造成時に削り落とされている段を利用して墳端部の確認を行った。また、北側の段を造成するために東西方向に削り落された壁面を清掃し、墳丘東西方向の断面を観察した。

その結果、東西端部で墳丘とみられる土層、墳端部を確認した。

(2) 墳丘南側 (図49、図版16・22)

1トレンチ 第1次調査において墳丘南東側に南北に設定した。表土直下より地山面を検出している。上面は削平されている。トレンチ南端で墳丘区画溝とみられる落ち込みを確認した。

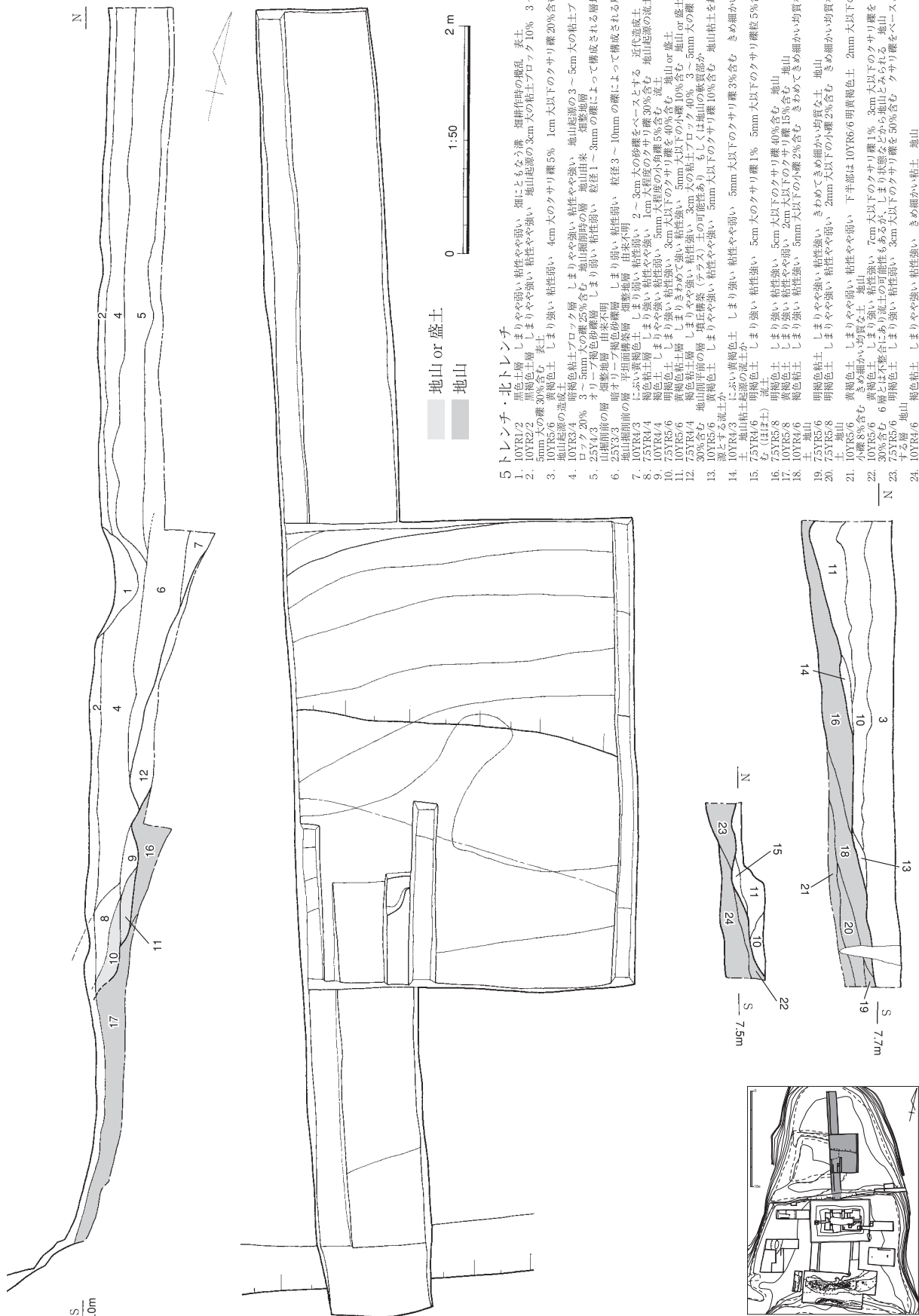
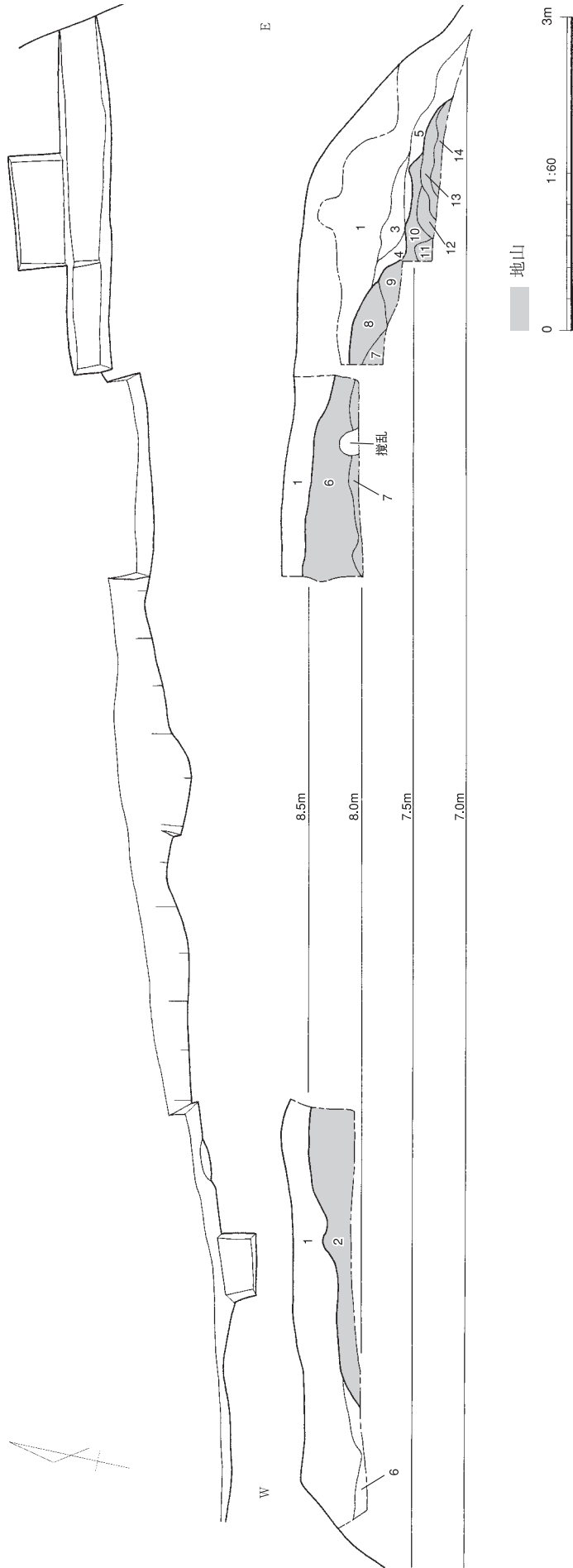


図47 5トレンチ・北トレンチ 平面・断面図



- 8トレンチ
1. 10YR4/4 褐色土 しまり強い、粘性弱い、3cm 大以下のクサリ礫 15% 含む、1cm 大以下の小礫 10% 含む、流土（造成土）
 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりやや強い、粘性弱い、5mm 大以下角礫 20% 含む
 3. 10YR3/3 暗褐色土 しまりやや弱い、粘性強い、5mm 大以下のクサリ礫 5% 含む、テラス面上に堆積する層 腐食土・堆積流土
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い、粘性強い、1cm 大以下のクサリ礫 10% 含む、流土
 5. 10YR5/4 明赤褐色土 しまり強い、粘性強い、1cm 大以下の礫を 3% 含む、流土
 6. 5YR5/8 明赤褐色土 明赤褐色土 30% 含む、クサリ礫層 地山
 7. 5YR5/8 明赤褐色土 2.5YR4/8 赤褐色土 10% 含む、クサリ礫層 地山
 8. 10YR5/6 黄褐色土 しまり強い、粘性やや強い、1cm 大以下のクサリ礫 10% 含む、地山が根の攪乱を受けたもの炭化物多くみられる
 9. 7.5YR5/8 明褐色土 しまり強い、粘性やや強い、1~3cm 大のクサリ礫を中心とする層 同色の土を 30% 含む、クサリ礫層
 10. 7.5YR5/6 明褐色土 しまり強い、粘性やや強い、3cm 大以下のクサリ礫 20% 含む、地山
 11. 7.5YR5/8 明褐色土 しまり強い、粘性強い、きめ細かい、硬い層 地山
 12. 10YR5/8 黄褐色土 しまり強い、粘性強い、1cm 大以下のクサリ礫を中心とする層 同色の土を 30% 含む、クサリ礫層 地山
 13. 10YR5/6 黄褐色土 しまり強い、粘性強い、5cm 大以下の礫を含む、軸山
 14. 10YR6/6 明黄褐色土 しまり強い、粘性弱い、5cm 大以下のクサリ礫を中心とする層 同色の土を 20% 含む、クサリ礫層

図48 8トレンチ 平面・断面図

そのためその周辺は第2次調査において南トレンチとして調査を実施した。

3 トレンチ 第1次調査において墳丘南西部に南北に設定した。全体に上部は削平されており、表土を除去したところ直下から地山面を確認した。ただし、南端部では墳丘区画溝とみられる落ち込みを検出し、遺物も確認されたことからあらためてその周辺は第2次調査において南トレンチとして調査を実施した。

(3) 南トレンチ (図49、図版16～21)

第1次調査1・3トレンチの成果を受けて、墳丘区画溝をとらえるために墳丘南側において面的に調査区を設定した。調査区は3トレンチの西側に拡張区を設定している。

最大幅180cm、深さ55cm以上残存し、東西方向に延びる墳丘区画溝を長さ5.6m以上に渡って検出した。溝は1トレンチ延長部で終息して途切れる。周溝底もこの部分が最も高く、東に向かって緩やかに傾斜して行き、1トレンチ延長部で段を形成して、さらに北東部に向かってやや幅を拡げつつ傾斜して行く。

上面は削平されているため本来の形状ではないが、周溝墳丘側輪郭は弧を描いており、6トレンチの状況と合わせて、この点からも本古墳が円墳であるとみなされる。

西側拡張部が十分な大きさでなかったため明確ではないが、1トレンチ部で終息した周溝は幅65cmにおいて掘り込みがある。すなわち、この周溝の途切れた部分は、南北にやや軟質で均質な土を盛った後に、地山岩盤に由来する礫混じり土を乗せて強く固められており、周溝を区切る幅65cmの渡り土手であると考えられる。

墳丘区画溝内部からは多数の土器が出土した。渡り土手の東側に小型土器群が集中し、1トレンチ延長部に当たる周溝底段差部の西側に壺が置かれていた。渡り土手の東からこの段差部に土器は集中しており、この場が祭祀空間として利用されたと考えられる。土器に関する詳細は第4章に述べる。

調査区南端では墳丘区画溝の南にわずかな平坦面がありその上部に石垣による段が作られているが、これは安藤美静氏によって造成された際のものであろう。本来は緩やかに下降してきた尾根をこの墳丘区画溝で遮断していたものと考えられる。

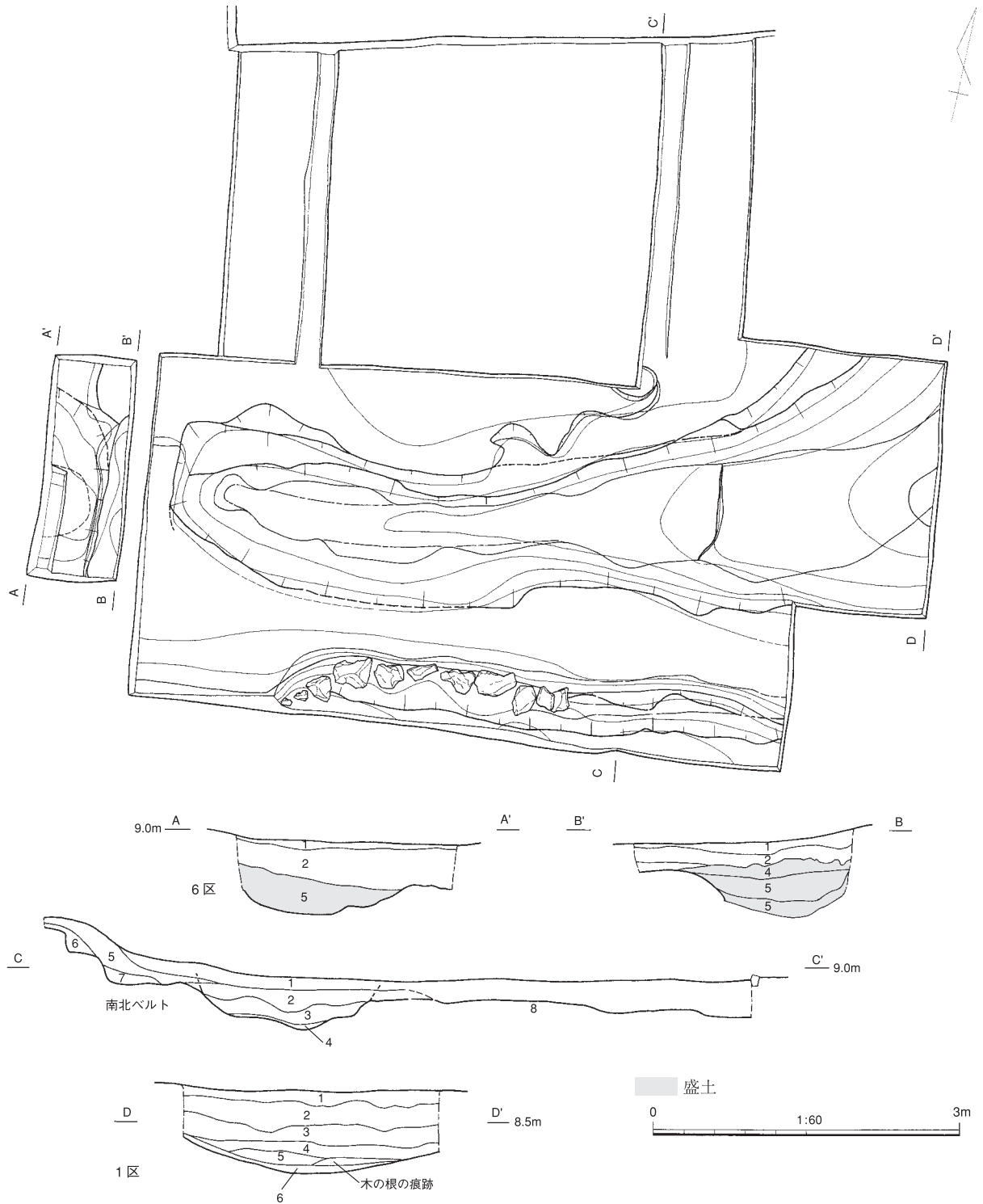
(4) 墳丘西側 (図50、図版14)

4 トレンチ 墳丘西側で東西に設定した。第1次調査では表土除去を行った後、サブトレンチの掘削を行い地山面が西へ向かって傾斜していることを確認した。第2次調査では再掘削し、第1次調査のサブトレンチで確認した地山の傾斜を調査区全体で追求した。トレンチ上部は自然堆積ではなく造成土で埋められ西へ向かって段々に下がっており、古墳築造以後に人為的な改変がなされた可能性が考えられる。

7 トレンチ 第2次調査において墳丘南西部、4トレンチの南側に設定した。古墳の形状とは考えがたい急傾斜が確認され、古墳築造以後の人為的な改変のなされた可能性がうかがえた。上部の土層は造成土で、内部から鉄器・鉄滓などが出土している。

(5) 墳丘東側 (図51、図版15)

2 トレンチ 墳丘東側において東西方向に設定した。第1次調査では表土除去後、サブトレンチを設定し、地山面が東へ向かって傾斜していることを確認した。第2次調査において再掘削し、第1次調査のサブトレンチで確認した地山の傾斜を調査区全体で追求した。地山を削りだして緩やかに東に向かって傾斜し、調査区東端から60cmのところ、やや傾斜が強くなる。東端部が墳丘端になる地山削り出しの古墳の形状を残していると考えられる。



南トレンチ6区

1. 10YR3/3 暗褐色土 しまりやや強い 粘性弱い 1cm 大以下のクサリ礫 5% 含む 2層と同質 根の多く入る腐表土
2. 10YR4/4 褐色土 しまり強い 粘性弱い 5mm 大以下のクサリ礫 5% 含む 1cm 大以下の角礫 3% 含む 流土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり強い 粘性強い 5mm 大以下のクサリ礫 10% 含む 流土
4. 10YR5/6 黄褐色土 しまり強い 粘性強い クサリ礫 50%、10YR4/6 褐色土 50% から成る層 硬くしまる 盛土 渡り土手をつくる盛土と考えられる
5. 10YR4/6 褐色土 しまりやや強い 粘性強い 1cm 大の角礫 10% 含む岩盤の上にのり、掘り下げ可能 盛土 渡り土手下部の盛土と考える

南トレンチ南北ベルト

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや強い 粘性弱い 5mm 大以下のクサリ礫層を含む 表土
2. 10YR4/4 褐色土 しまりやや強い 粘性強い 1cm 大以下のクサリ礫 10% 含む 1層よりもクサリ礫多い 流土 (2次)
3. 7.5YR5/6 明褐色 しまり強い 粘性やや強い 地山由来 5cm 大のクサリ礫 3% 1cm 大以下のクサリ礫 30% 含む 小片化した遺物多く含む 地山崩落流土
4. 7.5YR5/8 明褐色 しまりやや強い 粘性強い 1cm 大以下のクサリ礫 10% 含む 粘土質のきめ細かい土 大型のクサリ礫含まない 最下層遺物含む 初期流土
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い 5mm 大以下の小角礫 5% 含む 畑造成段削り後の流土
6. 10YR6/6 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性弱い 5mm 大以下のクサリ礫を 5% 含む 5mm 大以下の小角礫 5% 含む 畑造成後の初期流土
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い きめ細かい土 畑造成後の初期流土
8. 10YR6/8 明黄褐色粘土ブロック層 しまり強い 粘性強い 5~10cm 以上の粘土ブロック 50% 以上含む (第2・4Trの地山1と同じ) 地山

南トレンチ1区

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い 1cm 大以下の角礫 5% 含む 1cm 大以下のクサリ礫 1% 含む 2層の上面の根などの多い部分 表土
2. 10YR4/4 褐色土 しまり弱い 粘性弱い 1cm 以下の角礫 5% 含む 1cm 以下のクサリ礫 1% 含む 1層よりやや明るい 造成土
3. 10YR4/4 褐色土 しまりやや弱い 粘性強い 5cm 大以下の角礫 5% 含む 1cm 大以下のクサリ礫 5% 含む 造成土
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりやや強い 粘性強い 1cm 大以下の角礫 5% 3cm 大以下のクサリ礫 3% 含む 遺物多く含む (上層) 流土
5. 10YR5/6 黄褐色土 しまり強い 粘性強い 3cm 大以下のクサリ礫 5% 含む 流土
6. 10YR5/8 黄褐色土 しまり強い 粘性強い 3cm 大以下のクサリ礫 10% 含む 流土 (初期流土)

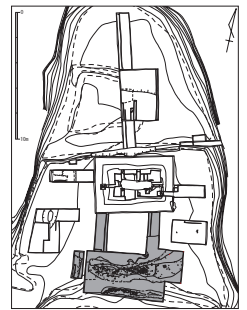


図49 南トレンチ・1トレンチ・3トレンチ 平面・断面図

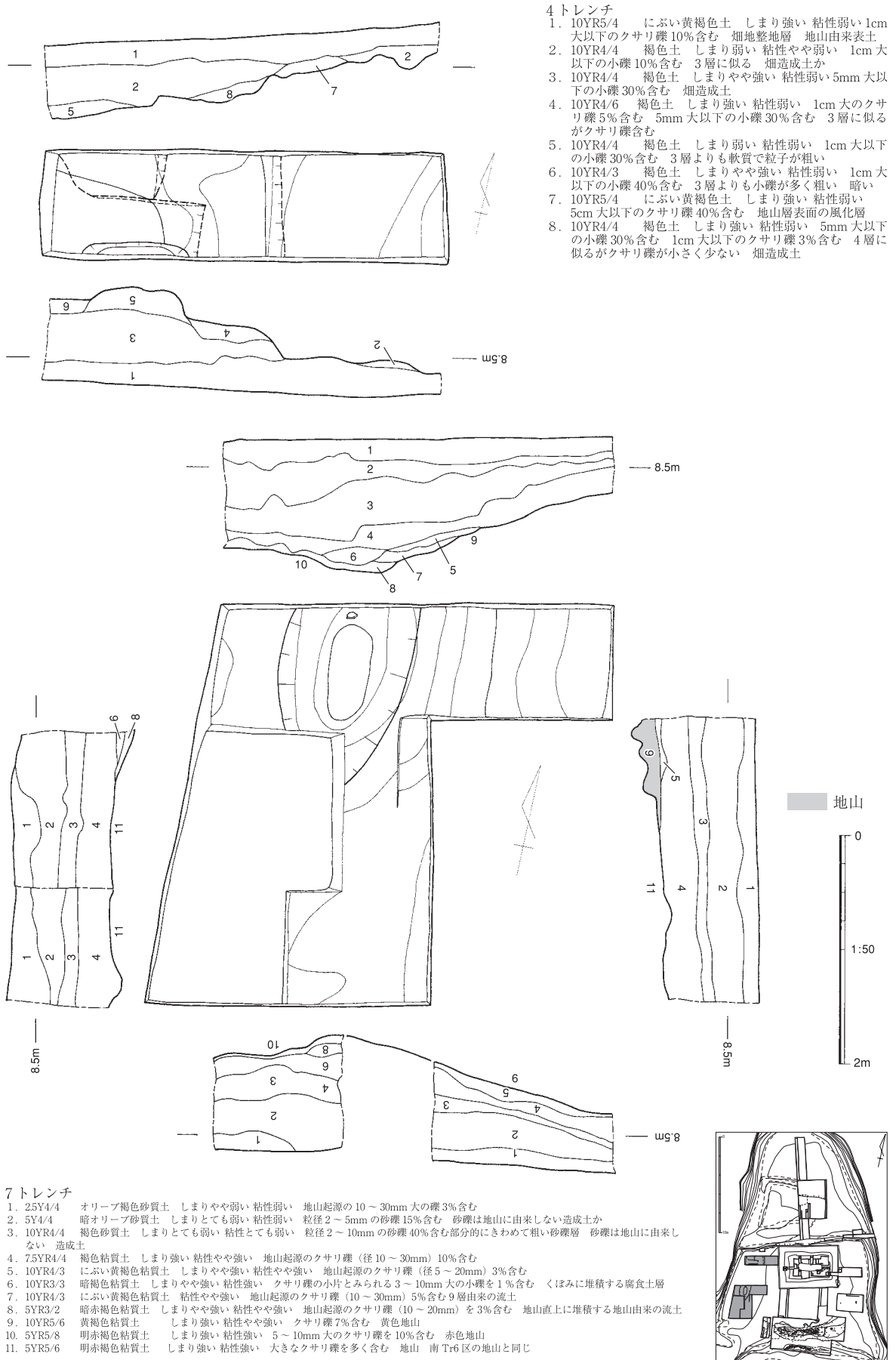


図 50 4・7 トレンチ 平面・断面図

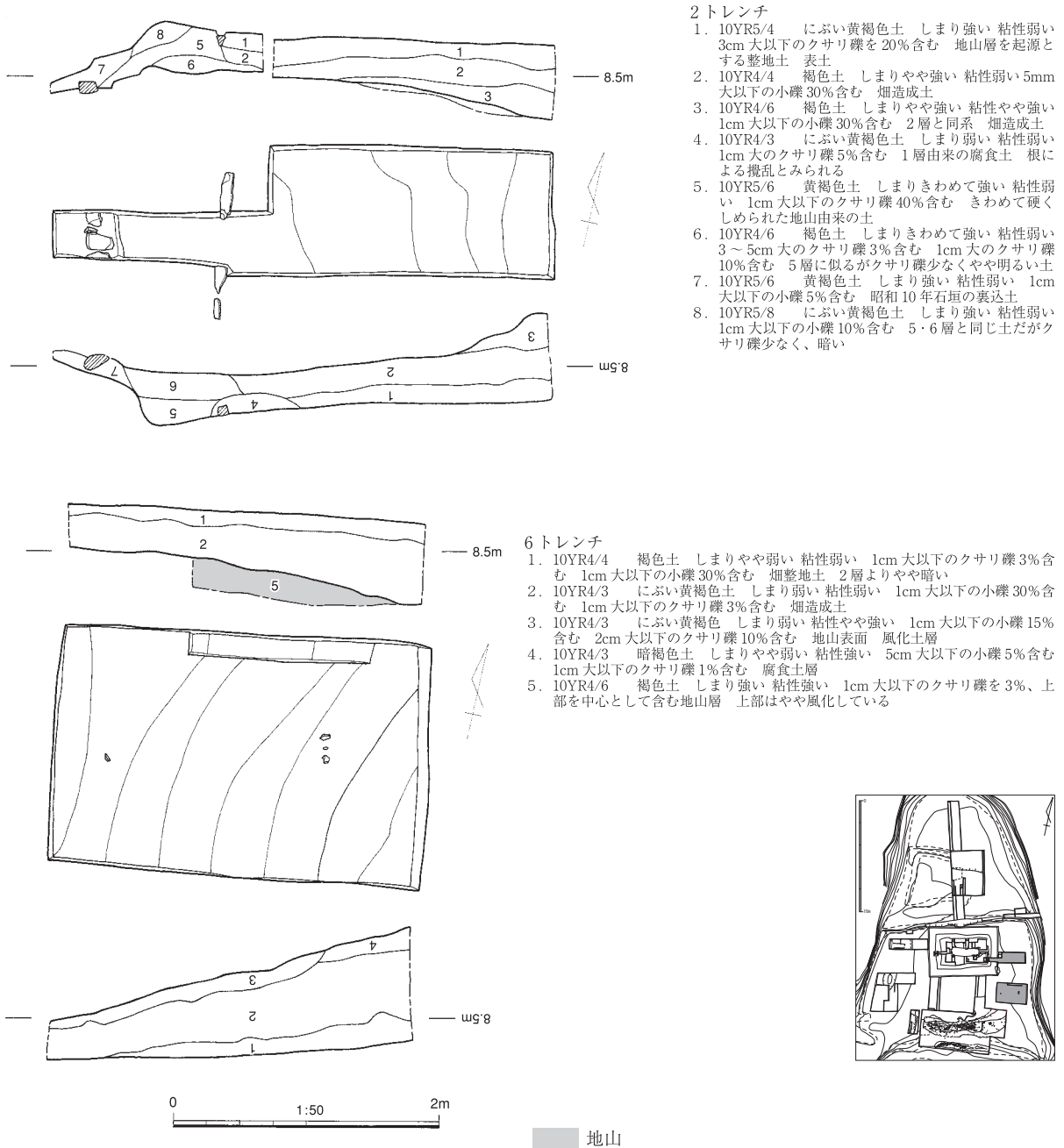


図 51 2・6トレンチ 平面・断面図

6トレンチ 第2次調査において墳丘南東部、2トレンチの南側に設定した。緩やかに南東に向かって傾斜しており、地山を削りだした古墳の形状を反映しているとみられる。2トレンチと南トレンチの間にある本トレンチは南北方向には斜位に墳丘が斜面し、弧を描くとみられる。墳丘が方墳ではないと理解する根拠となる。土器片が数点出土しているが風化した胴部の小片で復元はできない。

3. 墳丘のまとめ－埋葬施設と墳丘構造の復元－

(1) 墳丘形態と規模

石棺の南側では古墳を区画する墳丘区画溝が見つかった。溝の上部は削平されていたが、弧状に巡っている。また、石棺の北側では近代の畑の造成に伴って墳丘上面が削平されたが、墳丘北端となる部分に地山を削り出したテラス面が広がっている状況を確認できた。

これらのことから、古墳の南側には尾根から古墳を区画する溝、古墳の北・東・西には墳丘を区画するテラス面が巡っていたと考えられる。

結果、墳丘南～東側の地山の形状および弧状を呈する墳丘区画溝の形状から本古墳が円墳であること、墳丘南と北側の墳端位置から墳丘規模は直径約 13.5m に復元できる。

(2) 墳丘区画溝と渡り土手

墳丘南側では墳丘区画溝を確認した。溝の最大幅は 180cm、もっとも深く残存するところで現地表から深さ 55cm である。この溝は古墳南側中央部付近は浅く、東側に向かって徐々に深さを増して行く。また、土器集中部より東に段差を形成し、そこからさらに深さを増している。この段差より西側、渡り土手までが祭祀空間とみられる。

墳丘区画テラスと区画溝とのつながり部は発掘調査できておらず確認していないが、南東部で溝は解放され溝底がテラス面へ移行するものと考えている。

南側中央部付近で浅くなった溝は中央部やや西の位置で終息し途切れる。この溝の途切れる部分から西は周溝をまたぐ渡り土手であるとみなされる。渡り土手の上部は盛土で造られている。渡り土手より西側の状況は十分追求できていないが、古墳築造以後大きく改変され旧状が遺存していない可能性が高い。

第4章 南トレンチ土器群

1. 遺物出土状況と組成（図52・53、図版16・17・19）

古墳に伴う遺物はすべて、周溝底部付近から出土した土師器である。いずれも、周溝内埋土底面近くに埋没していた。石棺からみて尾根の後背部中央に分布し、土器の分布範囲の周溝底には段差があり、一段高くなっている。東よりに壺が出土し、それより西側には高杯・小型丸底壺といった小型器種が出土している。壺より東側は周溝底が一段深くなり、土器も散らばったような状態で出土している。

壺は土をはさまないで破片が重なるように出土しており、原位置を動いていないと考えられる。小型器種は周溝底からはやや浮いた状態であったため、若干の移動はしていると思われるが、器壁が薄く脆弱な土器が一定の範囲内から出土していることからみると大きな移動はないであろう。

器種と個体数の内訳は、壺3個体、小型丸底壺5個体、脚付短頸壺1個体、鉢1個体、高杯7個体以上、器台または脚付壺が1個体である。壺のうち2個体は図化できたが、残り1個体は小片のため図化できなかった。

2. 遺物各説（図54～56、図版24～26）

小型丸底壺 1は器高7.5cm、復元口径9.3cm、胴部最大径7.5cmを測る。内外面ともににぶい黄橙色を呈する。2は残存高7.2cm、口径8.3cm、復元胴部最大径6.9cmを測り、底部外面を欠く。3は器高7.2cm、口径8.3cm、胴部最大径7.0cmで、ほぼ完存している。内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

1～3は直線的に外傾する口縁部を有し、頸部から胴部にかけて「S」字状に鋭く屈曲する。また、1・3の底部は尖底気味の丸底で、2はやや丸みが強いものと推定される。

4は残存高3.0cm、胴部最大径7.3cmで、頸部より上位を欠損している。内外面ともににぶい黄橙色を呈する。5は口縁部を欠損しており、残存高4.0cm、胴部最大径6.7cmを測る。頸部の屈曲は他の個体に比べ緩やかで、底部も丸みが強い。内外面ともに黄橙色を呈する。

器面調整は1～3のように口縁部内外面が粗いハケメ後ナデ調整で、胴部内外面はナデや指オサエ、3～5の底部内面には回転工具痕がみられる。

1～5の底部にはいずれも焼成前穿孔が施されている。1・3・4・5の断面を見ると穿孔部内面縁の盛り上がりが高く、孔の開けやすさも考慮すれば、穿孔は外面側から内面へ向かって行われたと推定できる。ただし、外面は穿孔後に盛り上がった部分を調整している可能性が高い。4のみ穿孔位置が底部中心からややずれている。また、1・3の内面には赤色顔料の付着が認められた。

脚付短頸壺 6は復元器高10.8cm、口径7.2cm、胴部最大径8.4cm、復元底部径8.9cmを測る。直線的に短く立ち上がる口縁部、「く」の字に屈曲する頸部、球形に張る胴部、そして直線的に「ハ」の字に開く脚部をもつ。鉢部底には径5mmの穿孔が施されている。器面は全体的に摩滅が激しいが、脚部の接合部付近の外面にはヨコナデ、内面には工具痕のち指オサエがみられる。また、内面の頸部直下に粘土紐接合痕が残り、壺底部には回転工具痕が認められる。内外面ともに橙色を呈する。



図 52 南トレンチ 遺物出土状況



図53 南トレンチ遺物出土状況細部

鉢 11は残存高7.2cm、復元頸部径10.2cm、復元胴部最大径13.0cmで口縁部と底部の形状は不明である。胴部中位が張り、広口である。外面調整は摩滅が激しく頸部付近にナデが確認できる程度である。内面は、頸部～胴部上半が横方向のナデ、胴下半部が斜・縦方向のナデである。色調は外面が明黄褐色、内面が橙色を呈する。

高杯 7～10は杯部、12～18が脚部である。杯部片は口縁端部まで残る資料がなく、脚部も端部まで残る資料がない。

7は残存高3.7cmで立ち上がり外反する器形を呈し、外面に明瞭な稜線をもつ。また、杯底部に穿孔されており、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。8は残存高3.8cmで外面に明瞭な稜線をもち、直線的に立ち上がる。7と同様、杯底部に穿孔がみられる。色調は内外面ともに黄褐色を呈する。9は残存高5.0cmで外面に明瞭な稜線をもち、立ち上がり外反する。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙色である。10は残存高4.4cmで外面に明瞭な稜線をもち、口縁部に向けて直線的に立ち上がる。色調は外面が明黄褐色、内面が橙色である。

いずれも器面の劣化が著しいが、内外面ともにナデ調整である。

12～15は裾部に向かってわずかに太くなる棒状の脚柱部である。ケズリがみられず、器壁が厚い。12の脚柱上部には凹みがみられ、後述する18のように穿孔が中断された可能性がある。13・14は裾部が強く屈曲する。いずれの個体も断面をみると脚上部が中実である。脚柱部は棒状の芯材に板状粘土を巻いて成形しており、棒状芯材の痕跡が脚内面上部に残っている。芯材は製作工程で抜かれ、抜いた穴から再び工具を差し込んで回転させ、裾部を広げるように製作したのであろう。器面は内外面とも縦・横方向のナデによって仕上げられている。

16～18は杯部から脚部にかけて穿孔された高杯である。器台の可能性も否定できないが、上部形態が確認できない以上、高杯との製作技法上の共通性を優先して高杯に分類した。

棒状の脚柱部は裾部で強く屈曲し、端部に向け大きく開く。外面には縦位ナデ、内面には縦位・横位ナデや工具による調整が認められる。18は穿孔を中断した資料であり、杯部側から穿孔していることが確認できた。いずれも焼成前穿孔とみられる。色調は、12・14・17・18が内外面ともににぶい黄橙色を呈する。13は内外面ともに黄褐色である。15は外面が橙色、内面が暗灰黄色を呈する。16は外面が明赤褐色、内面が橙色である。

杯部と脚部が接合する資料はないが、全形を推定すると杯部は浅めで口縁部が大きく開く。また、脚柱部は細く、裾部は接地するくらいに強く屈曲して大きく開く形態であろう。剥離面の観察によって、杯部と脚部の接合方法には付加法が用いられていることがわかる。

器台または脚付壺 19は高杯の脚部に受け部を設けた器台、もしくは壺がのった小型の脚付壺である。内外面ともに調整は高杯の脚部と同様であるが、脚部内面上位に工具痕が明瞭に残っており、これを工具の回転によって脚裾部を広げた痕跡とみることができ。受け部側の孔付近にある凹みは初めに穿孔位置を誤った痕跡であり、穿孔を中断した18とともに、穿孔は上部から行われていたことがわかる。色調はにぶい黄橙色を呈する。

壺 20は単口縁壺で、器高41cm、口径15.6cm、胴部最大径28.3cmに復元できる。端部にむかって緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部、「く」の字に強く屈曲する頸部、やや肩の張る長胴気味の胴部、すぼまった丸底を呈する。器面調整は、外面が口縁部から胴部上位の大半まで粗いハケメの後指ナデにより仕上げられる。口縁部のみ横方向のち縦方向と指ナデが念入りに施されているが、ハケメは消えていない。底部付近は工具によるナデがみられる。内面は、口縁部付近には工具痕の上から横位指ナデが施され、頸部から肩部にかけては粘土紐接合痕が明瞭に残る。肩部以下は粗いハケメの後に指ナデがみられる。内外ともにハケメが粗く、外面が1cmあたり3本ピッチ、内面が4本ピッチであり、内外面に使用されたハケメ工具には違いが認められる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色である。

21は単口縁壺で、残存高9.8cm、復元口径15.8cm、20と同様「く」の字屈曲頸部を有するが、直線的に立ち上がり口縁端部のみ外反する。器面調整は外面では口縁部に横方向のナデ、頸部付近には2条の沈線がみられる。内面では口縁部が横方向のナデ、頸部には指オサエ、その下位には工具痕が見られ、粘土紐接合痕が残る。色調は内外面ともに橙色を呈する。

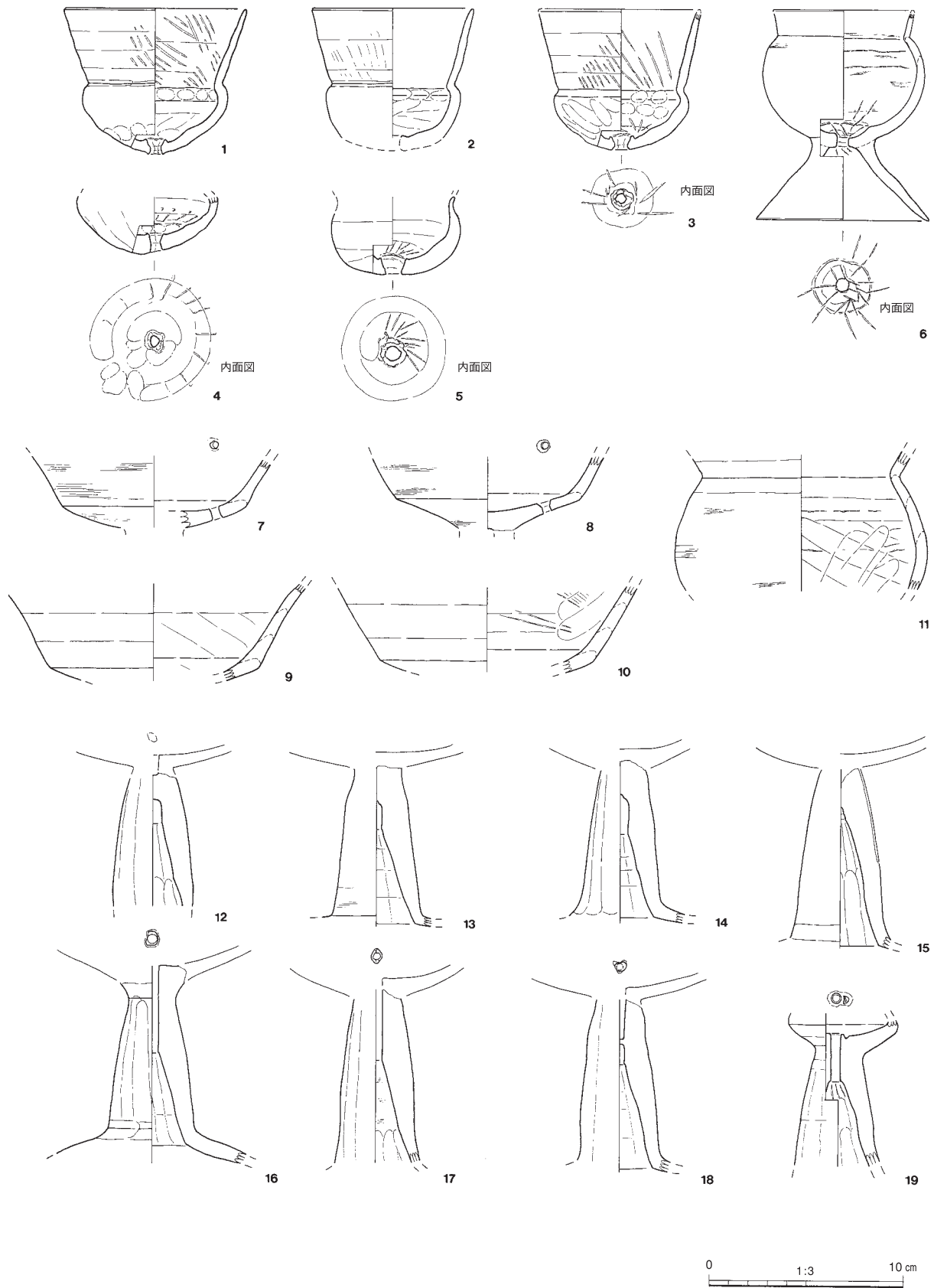


図54 南トレンチ出土遺物(1)

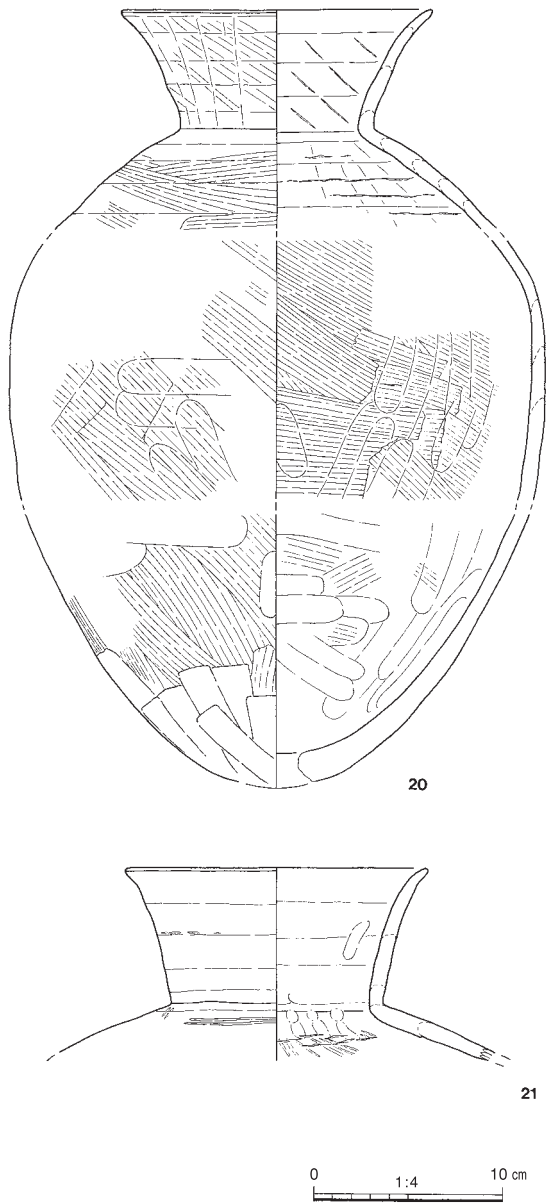


図55 南トレンチ出土遺物(2)

3. 小結-墳丘南側祭祀空間-

墳丘区画溝からは多くの土器が出土した。溝内埋土は上層と下層に分層可能である。第1次調査出土分は溝内埋土上層の上部のものであった。初期流土と見なされる下層には遺存状態の良好な土器が多く含まれる。土器は溝底部付近におかれたものが転倒したものとみられるが、溝底からは若干の流土を挟んで数センチの高さをもって出土している。また、上層の遺物は下層と同一土器が、埋没状況の過程で遊離したものと考えられる。溝内下層からは遺存状態の良好な小型丸底壺3個体、台付小型丸底壺1個体、直口壺1個体が出土した。

また、第2次調査で高杯は4~5個体分程度出土しており、第1次調査の出土分とあわせると8~10個体程度は存在するとみられる。

出土した高杯には杯部中央や側面に焼成前穿孔のあるものがあり、また小型丸底壺はいずれも底部中央に焼成前穿孔がある。墳丘区画溝から出土した土器は在地の土器ではなく、古墳祭祀に伴う土師器が主体を占めると見なしてよい。土器は一括で古墳時代前期後葉に位置づけられる。

そのほか、4トレンチ流土最下層から1点、6トレンチ墳丘直上から3点、7トレンチ流土中から1点、8トレンチ流土中から数点、古墳に伴うとみられる土器が出土しているが、胴部片で位置づけは困難である。

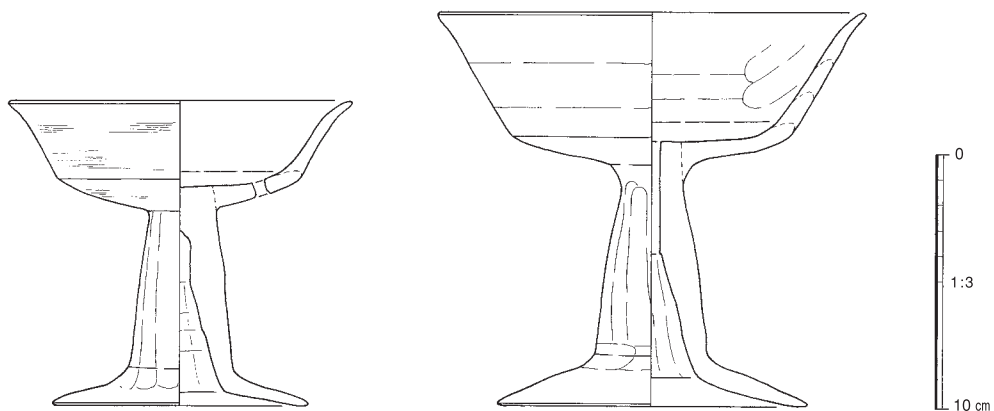


図56 高杯復元図

第5章 古墳時代以外の出土遺物

1. 古墳以前の遺物

石器（図57、図版27-11）黒曜石が2点出土している。石器素材の残核と剥片である。鹿児島市三船産石材とみられ、旧石器～縄文時代のものであろうが、他に当該期の遺物はなく詳細は不明である。

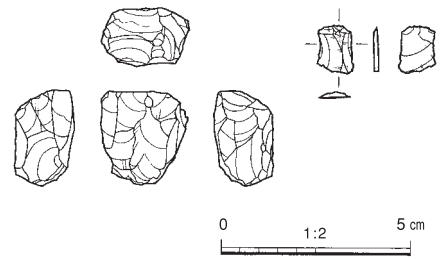


図57 黒曜石

2. 古墳以後の遺物

墳丘西側の砂利を多く含む近代造成土中から陶磁器や鉄製品が出土している。

近世・近代遺物（図58、図版28-1）寛永通宝1点のほか、近世後半期の陶磁器がわずかにみられるが、ほとんどが近代以降の遺物である。苗代川・龍門司窯産の薩摩焼などを含む。

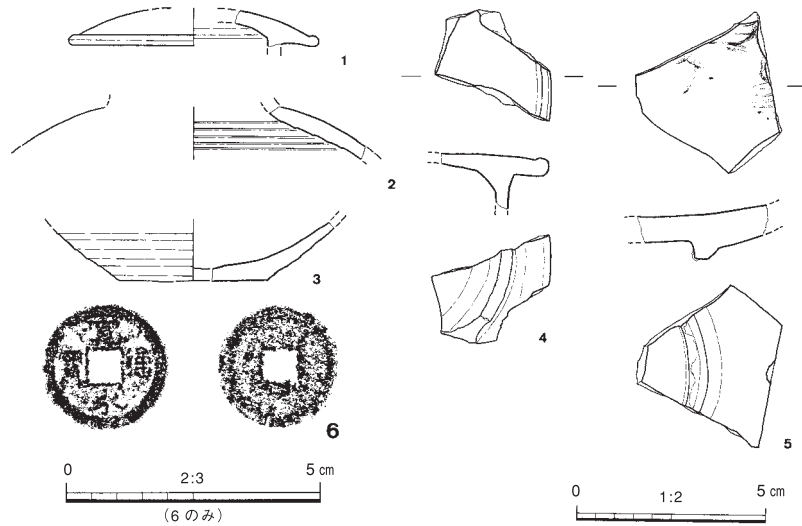


図58 近世・近代遺物

鉄製品・鉄滓（図59、図版28-2）ほとんどが7トレンチ造成土から出土している。用途不明の何かの部品とみられる製品ほか、鉄滓が出土している。現地での鉄生産は考えがたく、廃棄品の混入とみられる。上記の陶磁器とともに出土しており、近代に位置づけられよう。

3. 小結－古墳の前後－

古墳築造前 わずかな黒曜石が出土したのみである。よってこの地点は集落等が形成されるような場ではなく、人間活動の非活発な地域とみなされよう。旧石器～縄文時代に一時的に狩猟場やキャンプなどで使用されたことがあった程度とみなされる。

古墳築造後の地形改変 古墳以後は近世後半～近代に畑地として開墾されたとみられる。近世以前の資料は出土していない。丘陵上部を削平し、丘陵先端部は多量の土砂で造成しており、大きく地形改変されていることが判明した。築造当時の丘陵は現状よりも幅が狭く、先端はなだらかであったと考えられる。墳丘東側部の現地形は近代の造成によるものであるが、造成土下には地山削り出しによる円墳の形状を残している。墳丘西側部の現地形も近代の造成によるもので、造成土下は急傾斜となり、一部段々に削られていたとみられる部分もある。墳丘西側斜面は古墳築造後に人為的に改変され、さらに造成されるという、2度以上の地形改変が考えられる。墳丘北側で墳端部は奇跡的に残存していたが、墳丘自体は大きく削平されていた。近代削平時に削り、さらに北側へ造成土を流し込むことによって丘陵上での平坦面をより広くするという造成によって現地形が形成されたことが明確となった。



図59 鉄製品・鉄滓

第6章 鹿児島県南さつま市奥山古墳出土の人骨

竹中正巳・下野真理子（鹿児島女子短期大学）

(1) はじめに

奥山古墳は鹿児島県南さつま市加世田小湊に所在する。本古墳は1931（昭和6）年に安藤美静氏によって発見され、1941年（昭和16年）に発掘調査が行われた。この調査に関する考古学的報告は土持・住谷（1942）によって行われ、報告の中で本古墳は六堂会古墳という名称で紹介された。本古墳は長く六堂会古墳の名称で紹介されてきたが、2005（平成17）年に名称変更が行われ、奥山古墳と呼称されるようになった。

本稿で報告する古人骨は、1931年の発掘調査で奥山古墳（六堂会古墳）の箱式石棺墓中から出土した古墳時代人骨である。土持・住谷（1942）の報告によれば、本人骨の頭蓋は発見者安藤氏の証言では石棺の西側にあったとのことである。本人骨は現在、南さつま市加世田郷土資料館に保管されている。

(2) 人骨の所見

長径が約6cm×約4cmの類長方形の頭蓋の破片が遺存している。前頭縫合を挟んで頭頂骨から前頭骨にかけての部分である（図60、図61）。破片の内外面に赤色顔料が大量に付着している。遺存している前頭縫合部の厚さは約5mmである。

性別は不明である。観察できる前頭縫合の外板に癒合は認められないが、内板は癒合していることから、年齢は少なくとも熟年後期には達していると考えられる。

【参考文献】

土持鋤夫・住谷正節（1942）薩摩萬世町六堂會古墳。古代文化13：153 - 156.

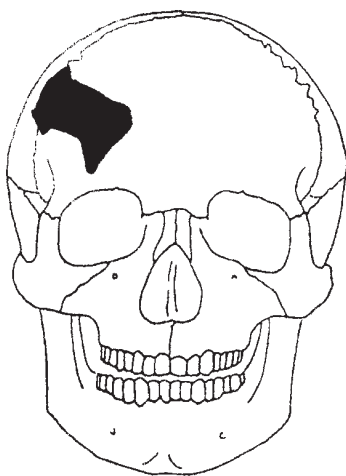


図60 奥山古墳人骨遺存部位

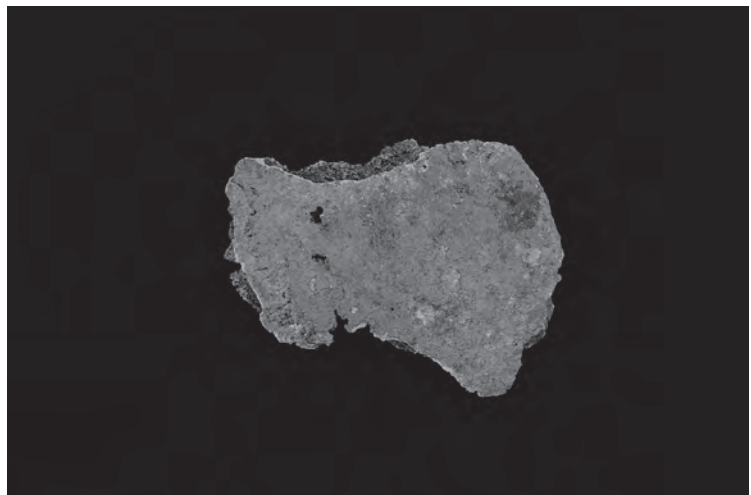


図61 奥山古墳出土人骨写真

第7章 奥山古墳の赤色顔料について

志賀智史（九州国立博物館学芸部博物館科学科保存修復室）

(1) はじめに

資料は鹿児島県南さつま市加世田小湊に所在する奥山古墳の床面から出土した赤色の土壌である。提供された資料は約9gある。奥山古墳は直径約13.5mの円墳で、主体部は箱式石棺、時期は古墳時代前期後半と考えられている。

墳墓出土赤色顔料は、現在までの調査によって水銀を主成分とする朱（HgS, 鉱物名称は辰砂 cinnabar）と、赤色の酸化鉄に発色の要因があるベンガラ（ α -Fe₂O₃, 鉱物名は赤鉄鉱 hematite 等）の二種類が知られている。

(2) 調査方法と調査結果

調査は顕微鏡観察と蛍光X線分析、X線回折をおこなった^①。

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料の混在状況、粒子形態の詳細等を知ることが目的である。実体顕微鏡観察（7-100倍）では朱はショッキングピンク色～オレンジ色に見え、ベンガラであれば暗赤色他に見える。ベンガラには焼きムラのような多様な暗赤色系の色調で構成された小塊を含むことが多い。生物顕微鏡観察（50-400倍）では赤色部分をサンプリングし、複数枚のプレパラートに封入して観察した。朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に見え、ベンガラであれば暗赤色他の粒子が見える。電子顕微鏡観察では、

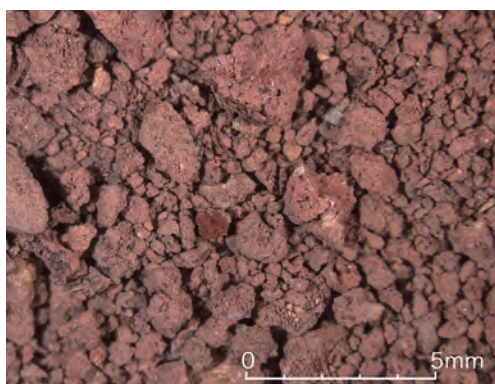


図62 ベンガラの遺存状況 (5倍)

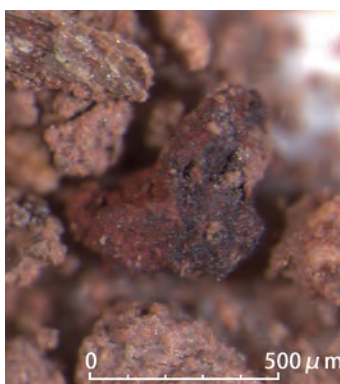


図63 ベンガラ小塊 (50倍)

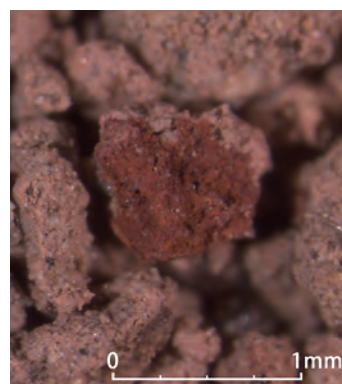


図64 ベンガラ小塊 (25倍)

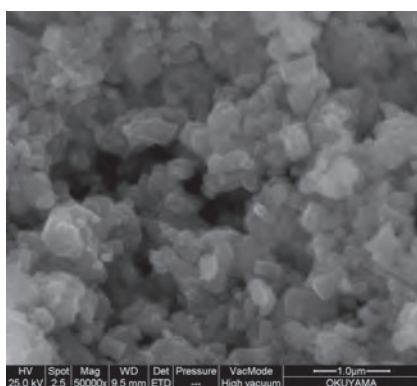


図65 ベンガラ粒子(電子顕微鏡,1万倍)

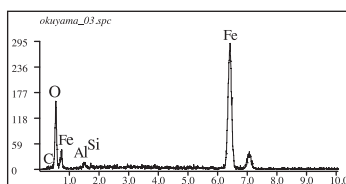


図66 ベンガラ粒子の蛍光X線スペクトル図 (SEM-EDS)

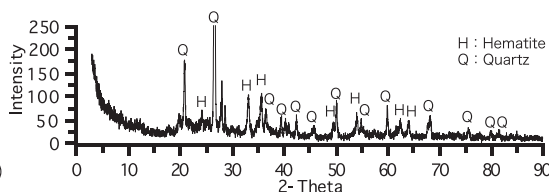


図67 X線回折図

実体顕微鏡下で赤色物をサンプリングし、カーボンテープに貼付けて試料化した。電子顕微鏡は機器の特性上白黒の像しか得られないので、作成した試料のカラー顕微鏡写真を撮影し、その写真と対比しながら赤い部分のみを観察した。

本資料の実体顕微鏡観察では土壌起源と考えられる透明・半透明鉱物に混じって直径1mm以下の暗赤色をした小塊が認められた(図62)。小塊には焼きムラのような紫色や褐色の部分も認められた(図63・64)。生物顕微鏡観察(50-400倍)では暗赤色他の粒子が認められた。これらはベンガラの一部によく認められる特徴である。ベンガラには直径約1 μ mのパイプ状の粒子が含まれていることがあるが、本試料には認められなかった。電子顕微鏡での赤色粒子の観察では不定形な粒子が殆どであったが、中には扁平な長形状の粒子も認められた(図65)。

蛍光X線分析は主成分元素を知ることが目的である。朱は水銀(Hg)が、ベンガラは鉄(Fe)が検出される。ただし鉄は土壌にも含まれている。最初に約5×7mmの楕円形の比較的広い面積で測定できるポータブル型の蛍光X線分析装置で複数箇所測定した。本資料からは鉄のピークは確認できたが、水銀の明瞭なピークは確認できなかった。電子顕微鏡に付属する蛍光X線分析装置(SEM-EDS)を用いて赤色粒子の元素分析もおこなった。本資料からは鉄(Fe)の他、アルミニウム(Al)や珪素(Si)を検出した(図66)。

X線回折は結晶構造を知ることが目的である。朱は辰砂(cinnabar)が、ベンガラは赤鉄鉱(hematite)他が同定される。比較的赤い部分を直接測定した。本試料からは赤鉄鉱(hematite)が同定された(図67)。その他石英(Quartz)も同定されたが、土壌に由来するものであろう。由来不明のピークの多くも土壌に由来する何らかの鉱物であろう。

以上を総合すると、本資料はベンガラと考えられる。ベンガラにはパイプ状の粒子は含まれていなかった。

(3) まとめと考察

奥山古墳は過去の調査で石棺内が赤かったことが報告されている(土持・住谷1942)。北部九州の弥生時代から古墳時代の墳墓では埋葬施設にベンガラが、人体の頭胸部に朱が用いられ

表1 九州南部の墳墓出土ベンガラ一覧

No.	古墳名	所在	墳形・主体部	時期	ベンガラの状態	ベンガラの種類	文献
1	奥山古墳	鹿児島県南さつま市加世田小湊	円墳(箱式石棺)	古墳前期後半	石棺内に塗布・散布	ベンガラ(非P)	本報告
2	堂園遺跡A地点	鹿児島県南九州市川辺町神殿	土壘墓	弥生末~古墳初	人体の頭胸部	ベンガラ(非P)4基、ベンガラ(P)2基	内山2007
3	田川内1号古墳	熊本県八代市日奈久新田町田川内	円墳(装飾古墳、横穴式石室)	古墳中期後半	石室石材	ベンガラ(非P)	本田1991
4	鴨籠古墳	熊本県宇土市不知火町長崎	円墳(石槨、石棺)	古墳中期後半	石棺棺身外面	ベンガラ(非P)	本田1991
5	向野田古墳	熊本県宇土市松山町	前方後円墳(竖穴式石室、石棺)	古墳前期後半	石棺棺身内面	ベンガラ(非P)	本田1991
6	檜崎古墳1号棺	熊本県宇土市花園町檜崎	前方後円墳(石棺)	古墳中期中頃	石棺石材	ベンガラ(非P)	本田1991
	檜崎古墳2号棺	熊本県宇土市花園町檜崎	前方後円墳(石棺)	古墳中期中頃	石棺石材	ベンガラ(非P)	本田1991
7	井寺古墳	熊本県上益城郡嘉島町井寺	円墳(装飾古墳、横穴式石室)	古墳中期後半	石室石材	ベンガラ(非P)	本田1991
8	岡崎18号墳1号地下式	鹿児島県鹿屋市串良町岡崎	地下式横穴墓	古墳中期前半	石棺外に散布、石棺壁下部に塗布、竖坑内に散布	ベンガラ(P)	橋本2008
	岡崎4号墳1号地下式	鹿児島県鹿屋市串良町岡崎	地下式横穴墓	古墳中期後半	朱玉	ベンガラ(P)	戸高1986
9	尾中原地下式	宮崎県小林市北西方	地下式横穴墓	古墳中期後半	朱玉	ベンガラ(P)	近藤2003
10	須木上ノ原2号地下式	宮崎県小林市須木中原	地下式横穴墓	古墳中期後半	朱玉	ベンガラ(P)	戸高1986
11	宗仙寺5or11号地下式	宮崎県東諸県郡国富町本庄	地下式横穴墓	古墳中期後半	朱玉	ベンガラ(P)	近藤2003

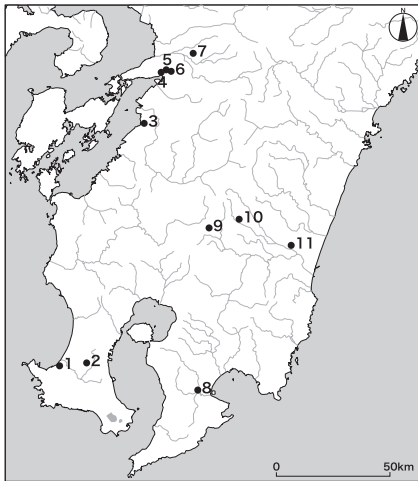


図68 九州南部の墳墓出土ベンガラ

ることが一般的であり（本田1988・1995）、今回調査を行った床面のベンガラも埋葬施設に使われていたものであろう。

出土ベンガラには直径約1 μ mのパイプ状の粒子を含むベンガラがよく知られている。（以下、パイプ状の粒子を含むベンガラを「ベンガラ(P)」、パイプ状の粒子を含まないベンガラを「ベンガラ(非P)」とする）。このパイプについては、湖沼に住む鉄細菌の死骸であることが分かっており、原料の採取された環境がある程度推定できる（岡田1997）。

奥山古墳で見られるようなベンガラ(非P)については、原料は今のところはっきりしていない。このベンガラは分類上の残り物をまとめたもののように思えるかもしれないが、墳墓出土ベンガラには以下のような地域性が認められることから、供給源はある程度限定される可能性がある。

西日本の前期前方後円（方）墳で用いられたベンガラは、近畿ではベンガラ(P)を主体とし、北部九州ではベンガラ(非P)を主体としている。この北部九州での特徴は、玄界灘沿岸から周防灘沿岸まで、筑後川中流域ではベンガラ(P)を使用している（志賀2008）。箱式石棺墓などの弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓については現在調査を行っているが、概ね同様な傾向が認められそうである。

九州南部の墳墓出土ベンガラの種類をしてみよう（図68・表1）。奥山古墳(1)と同時期の古墳で赤色顔料の調査が行われたものとして、熊本県南部の向野田古墳(5)が挙げられる。ここではベンガラ(非P)であった（本田1991）。当該地域ではそれ以外に調査例が無く、不明な部分が多い。

対象を古墳時代の全時期まで広げてみると、調査報告例はやや増加する。薩摩半島にある堂園遺跡A地点(2)の土壇墓(弥生時代終末～古墳時代初頭)ではベンガラ(P)が2基、ベンガラ(非P)が4基あり（内山他2007）、ベンガラ(非P)の使用が優勢である。熊本県南部の田川内1号古墳(3)や鴨籠古墳(4)、榑崎古墳1・2号棺(6)、井寺古墳(7)（以上、古墳時代中期）では、全てベンガラ(非P)であった（本田1991）。

大隅半島の岡崎18号墳1号地下式横穴墓や岡崎4号墳1号地下式横穴墓(8)（以上、古墳時代中期）では、全てベンガラ(P)であった（戸高1986、橋本2008）。宮崎県南部の尾中原地下式横穴墓(9)や須木上ノ原2号地下式横穴墓(10)、宗仙寺5か11号地下式横穴墓(11)（以上、古墳時代中期）でも全てベンガラ(P)であった（戸高1986、近藤2003）。特にこの地域のベンガラ(P)は、「朱玉」^②と呼ばれる直径4cmほどの円盤形に固められたベンガラとの関連性が強く（戸高1986）、ベンガラ(P)がどのような形状で流通していたのかを具体的に示す事例として重要である（栗原1969）。

以上のことから九州南部のうち西側ではベンガラ(非P)が主体、東側ではベンガラ(P)のみが使われるという状況が見て取れる。もちろんここで指摘した東西差は古墳時代の全時期を対象とした場合の傾向であり、今後より詳細な時間軸での検討や空白地域での分析調査が必要であることは言うまでもない。墳墓の形態差や出土遺構、遺構内での出土位置なども考慮しなければならぬ。今後も調査を続けたい。

【註記】

1 全て九州国立博物館所有の機器を用いた。測定機器と環境は以下の通り。

- ・ポータブル型蛍光X線分析装置：Innov-x社 a-4000（エネルギー分散型，管球：タンタル（Ta），電流：40KV，電圧：15mA，時間：30秒，手持ち測定，大気）
- ・電子顕微鏡付属の蛍光X線分析装置（SEM-EDS）：EDAX社 Genesis（エネルギー分散型，電圧：30kV，電流：任意，時間：200秒，真空）
- ・X線回折装置：試料水平型X線回折装置リガク社製 RINT Ultima」（測定条件：X線：Cu40kV40mA，ゴニオメータ：Ultima）水平ゴニオメータ（D/tex-25），アタッチメント：標準資料ホルダー，フィルタ：不使用，インシデントモノクロ：使用，カウンタモノクロメータ：使用，発散スリット：1.0mm，発散縦制限スリット：5mm，散乱・受光スリット開放，第1・第2スリット：なし，入射・受光スリット：なし，カウンタ：シンチレーションカウンタ，走査モード：連続，スキャンスピード 2.0000° /min，サンプリング幅：0.0200°，走査軸：2 θ / θ ，走査範囲：3.0000°～90.0000°， θ オフセット：0.0000°）より得られたデータをJADE6とPDF2でマッチングした。

2 「朱玉」の「朱」は直接材質名を示すものではない。

【引用参考文献】

- 岡田文男 1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会大14回大会要旨集』日本文化財科学会 pp.38-39
- 栗原文蔵 1969「朱玉」『考古学雑誌』54-4 日本考古学会 pp.110-111
- 志賀智史 2008「前期前方後円(方)墳から出土するベンガラの地域性に関する研究」『日本文化財科学会 第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp.196-197
- 土持鋤夫・住谷正節 1942「薩摩萬世町六堂會古墳」『古代文化』13-3 日本古代文化学会 pp.153-156
- 戸高真知子 1986「赤い供物、朱玉」『えとのす』第31号 新日本教育図書株式会社 pp.130-131
- 永濱功治 2007「堂園遺跡土坑墓出土顔料の科学分析」『堂園A遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター pp.131-133
- 橋本達也・藤井大祐・甲斐康大 2008『大隅串良 岡崎古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- 本田光子 1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北九州地方にみられる使用と変遷－」『九州考古学』第62号 九州考古学会 pp.39-49
- 本田光子 1991「石室、石棺の赤色顔料」『交流の考古学』肥後考古第8号 pp.423-426
- 本田光子 1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号（合併号）日本文化財科学会 pp.63-79

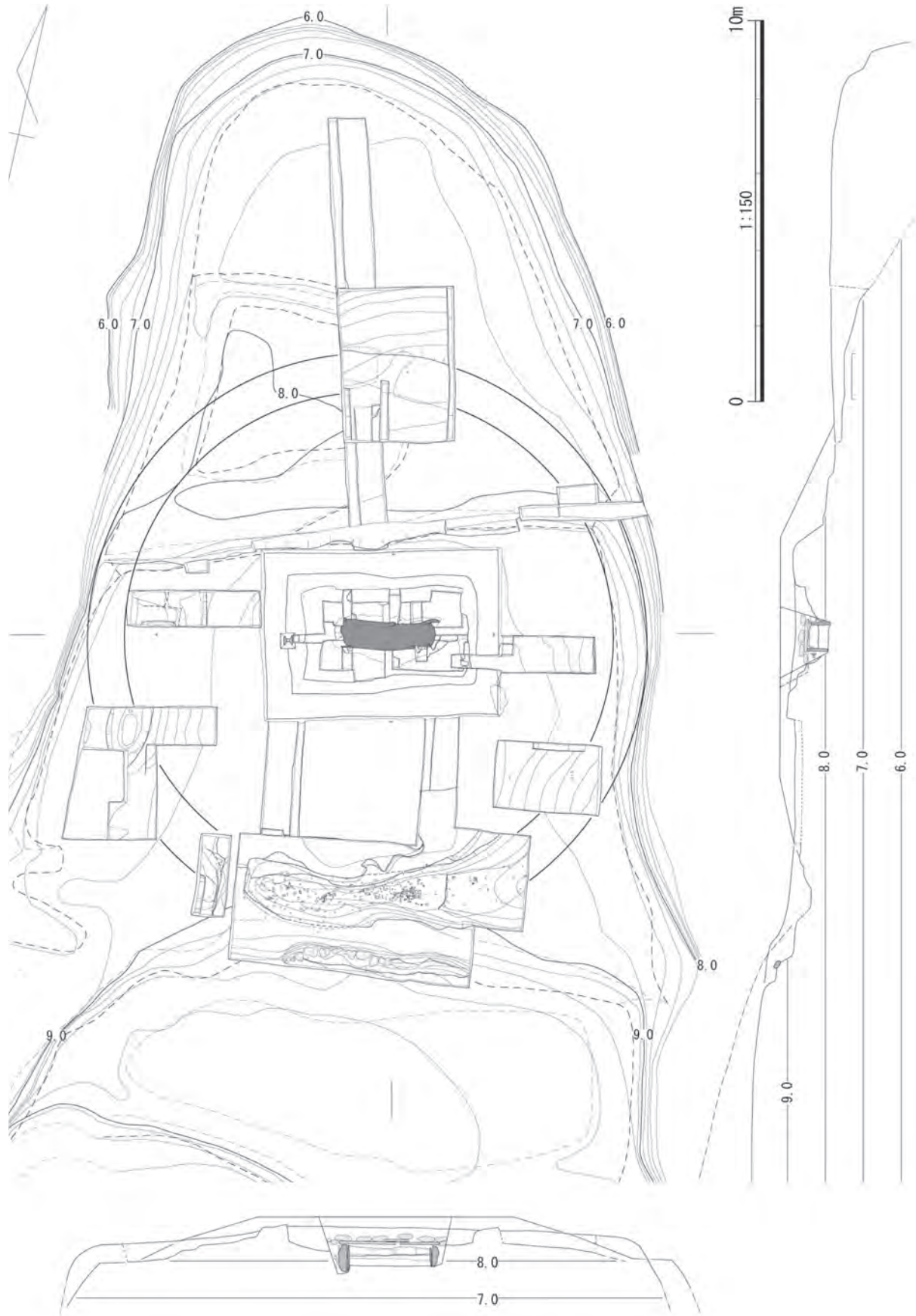
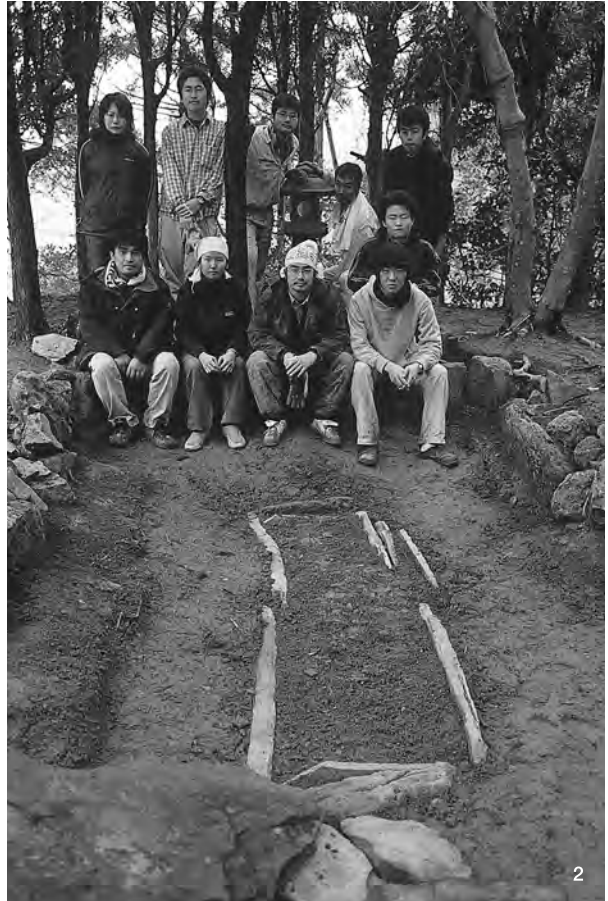


图 69 奥山古墳墳丘全体図



図70 奥山古墳出土土器の穿孔



1・2 第1次調査
3～5 第2次調査

図 71 調査参加者

第1章 古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質 －板石積石棺墓を中心に－

藤井 大祐

1. はじめに

奥山古墳の発掘調査を通して、当古墳が円墳であり、その埋葬施設である箱式石棺は構造的特徴や石材から天草地方との関係が想定できることなどが明らかになった。また、周溝出土の土器はいわゆる在地の「成川式土器」に位置づけられるものでなく、九州南部地域外の技術的背景をもとに製作されており、その編年的位置は前期後葉に求められる。

奥山古墳の位置する薩摩地域⁽¹⁾は、その南部において土壙墓群が、北部から加久藤・球磨盆地では「地下式板石積石室墓」群が展開し、在地墓制の集中的分布が早くから注目されてきた。これらの墓制は、薩摩地域の「高塚」古墳が空白に近い分布を示していたこともあり、少なからず「隼人の墓制」として位置づけられることがあった（小田 1966、乙益 1970・71、上村 1984a ほか）。

この視点に立つと、奥山古墳は在地墓制の中に入り込んだ特異な例の一つという理解が成り立つかもしれない。しかし、在地・非在地という二項対立的な理解のみで果たして奥山古墳築造の意義を追究しうるであろうか。

近年、橋本達也は地下式横穴墓も含めたこれら在地墓制の理解について「九州南部の地域的特性としての説明」にとどまっていることを指摘し（橋本 2007, p.1）、これらの墓制をあらためて古墳時代墓制に位置づけ、同時代の墓制との相対的な比較を試みている（橋本 2008）。そして、大隅半島における発掘調査の成果をもとにした研究では、地下式横穴墓を横穴式石室、横穴墓、「地下式板石積石室墓」との比較の中で検討し、その系譜や埋葬習俗について新たな見解を提示している（橋本 2008）。

筆者も橋本と同じ認識であり、薩摩地域における在地墓制も相対的な比較の中で位置づける必要性を感じている。そして、その比較の中で奥山古墳築造の意義も追究しうると考えている。しかし、在地墓制のなかでも、とくに「地下式板石積石室墓」（図 72）は、基本的な定義・名称・編年においていまだ一致していない部分もあり、先に述べた検討を行うには、この墓制に関する概念の整理が必要であると認識している。

したがって、本章では「地下式板石積石室墓」の研究史を整理することにより定義・名称に関する問題点を抽出し、筆者の立場を明らかにしたのち、編年に関する考察を行う。そして、それをもとに板石積石棺墓の展開とその意義について検討を加え、奥山古墳を含む薩摩地域における墓制の特質を明らかにしたい。

2. 「地下式板石積石室墓」の名称と定義

現在「地下式板石積石室墓」の中には、研究者によって箱式石棺に位置づけられるものが存在する⁽²⁾。また、名称についても、近年この墓が石棺墓制の系譜にあることから「板石積石棺墓」とする研究者もあり（西 1988・柳沢 2003・橋本 2007）、再検討の時期にきている。

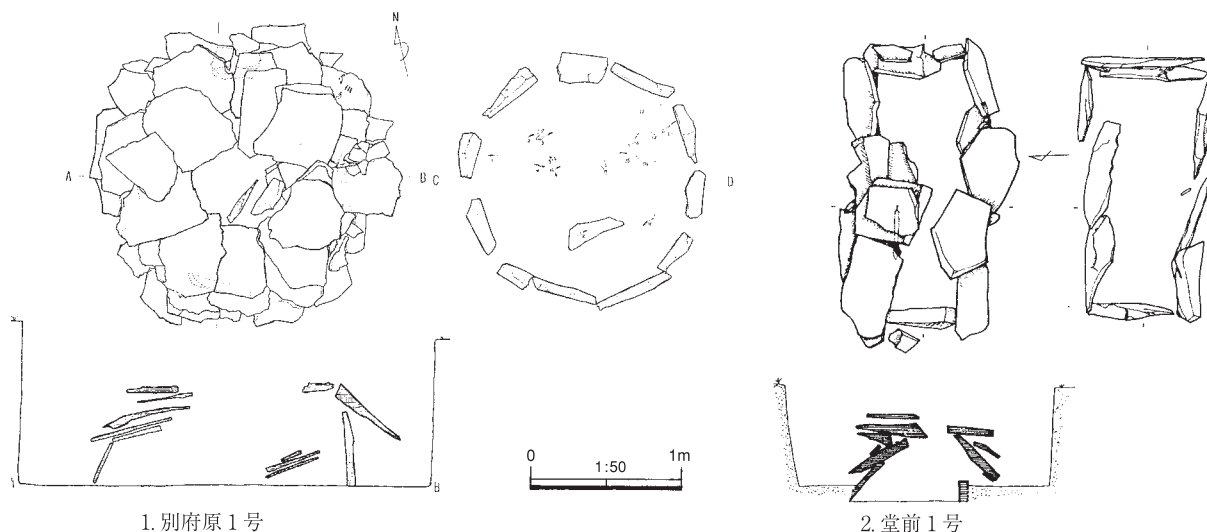


図72 「地下式板石積石室墓」

筆者は、これらの問題がこの墓制に関する研究の進展を妨げてきた一因だと認識している。しかし、これらの問題について、学史をふまえつつ検討したものはほとんどない。

したがって、本節では各研究者が「地下式板石積石室墓」をどのように捉えてきたか、この種の墓の構造的特徴の認識とその変化について整理し、名称についての筆者の立場を明らかにし、再定義を試みる。

(1) 「石室」と「石棺」

1936年、この種の墓は木村幹夫・寺師見国により「石室」として初めて紹介された。その構造については、「板石を一段或いは二段に立てて側壁として、楕円形・円形或いは方形の石室を造り、死体及び副葬品を納れて土壌を満し、其上部を並べて蓋としている」と述べている（木村・寺師 1936, pp.363-364：傍点筆者）。同じく研究開始段階の論考において、曾野寿彦・中川成夫・佐藤達夫も「最初に板石をたてに並べて棺様のものを作り、埋葬、鉄鏃を副葬し、盛土して板石をつんだもの」と述べている（曾野・中川・佐藤 1950, p.50：傍点筆者）。

寺師らが調査した当時、鹿児島県大分盆地域に箱式石棺が存在することは知られていたし、この種の墓の下部施設が「粗雑な石棺的存在」とであると認識されていたにもかかわらず（曾野・中川・佐藤 1950, p.50）、「石棺」でなく「石室」とした理由⁽³⁾は、何であったのだろうか。

引用文の傍点部に注目すると、いずれも墓の内部が空洞でなく、人為的に土が充填されていたという認識であったことがうかがえる。

そして、寺師の「土葬の周囲だけを石で囲んだものに過ぎない」という記述は（寺師 1951, p.109）、当時の認識を端的に表している。つまり、この種の墓はあくまで土壙墓の延長上に位置づけられていたのである⁽⁴⁾。石材を多量に用いて埋葬施設を構築しながらも、箱式石棺墓とは明らかに異なる埋葬方法を想定していたことが、「石室」とした最大の要因であった。

同じ立場をとる研究者にとって内部充填は、この種の墓を規定する重要な要素の一つであった⁽⁵⁾。この認識は、寺師によって「地下式板石積石室」という名称が採用されてからも河口貞徳らに引き継がれた（寺師 1951、河口・上村 1971）。

これに対し、乙益重隆・西健一郎・新東晃一らも「地下式板石積石室（墓）」という名称を用いたが、その内部は空洞であったとし、土は自然堆積の結果であるとした（乙益 1971、西 1988a、新東 1992）。そして、ともに「地下式板石積石室（墓）」を、土壙墓の延長ではなく箱式石棺墓の一種として捉えている。

乙益は、内部空洞の根拠として「天井石の崩落したものが床面にまで達するものが多い」ことを挙げている(乙益 1982,p.11: 図72-1 断面図参照)。また、新東は、側石が遺骸安置面よりかなり深く据えつけられ、最下段の蓋石の外側はより安定して固定されるように掘り方に接して置かれることに注目した。そして、最下段の蓋石は側石間の上に配置し、さらにこの蓋石間に二段目の蓋石を置き、積み上げていくため、蓋石の平面形は魚鱗状になり、力学的には中が空洞でも陥没しないとしている。また、鹿児島県伊佐市大住遺跡等の現地保存がなされているものに蓋石が陥没せずに残る例があることから内部が空洞であったとした。

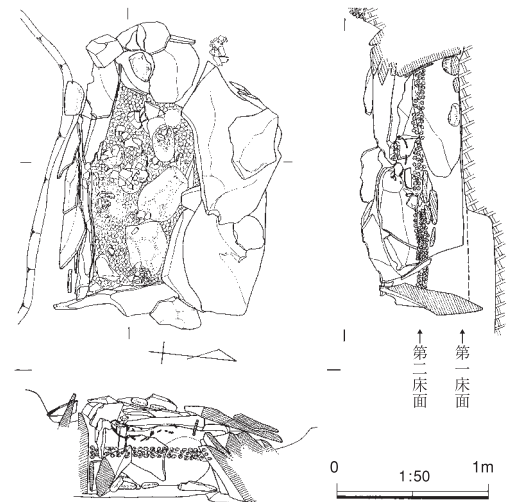


図73 神ノ崎27号墓の例

内部を土で満たすか、空洞のままかの違いは、この種の墓の構造的な位置づけを左右する重要な要素である。しかし、埋葬施設内に充填あるいは堆積した土の観察記録、とくに土層断面図の公表されているものが皆無で、現時点においてそれを検証する材料は乏しい。

ここで、伊佐市平田遺跡の調査成果に注目する(大口市 1986)。本遺跡では「地下式板石積石室(墓)」の床面はほとんど砂礫層に達しており、墓壙掘削時の排土は、この砂礫や上層のアカホヤ層などが混在した土となるはずである。しかし、調査された19基の内部は全てに混じり気のない純粋な黒色土が確認されたという。調査担当者はこれについて充填土を選択した結果であると解釈し、埋葬施設に対する畏敬の念がうかがえるとしている(大口市 1986,p.141)。しかし、この土が古墳時代の土であった根拠は明示されておらず、黒色土の特徴に注目すると、むしろ流入土であった可能性が想定できる。

内部充填の立場をとっていた寺師も、大住23号墓の調査で、平田遺跡と同様に地山でない純粋な黒色土を確認しているが、これを流入土に位置づけ、現地住民らの聞き取り調査も考慮に入れて内部が空洞であった例の存在を認めている(寺師 1959)。

一方、充填土(流入土)中から副葬品の出土する例があり、これも内部充填の根拠の一つとなっている。ただ、「地下式板石積石室」の中には、複数人数の埋葬(本渡市 1982)、あるいは複数回にわたる埋葬が行われる例があり(人吉市・永井 2001、小値賀町 1984 など)、その一つである長崎県北松浦郡小値賀町神ノ崎27号墓では、上下2層にわたる床面が確認されている(図73)。床面から浮いて出土したとされる副葬品には、二次埋葬以降に伴うものが存在する可能性も想定できる。

筆者は、乙益・新東の指摘や上にみた調査例などから、内部が空洞であった可能性が高いと考えているが、現時点では「地下式板石積石室」すべてにおいて内部充填・空洞のどちらかが採用されたと想定するのは困難である。しかし、一部ではあるが内部が空洞であった例の存在は想定できる。したがって、この種の墓を土壙墓の延長で捉えることは難しく、これに由来した「石室」という用語の妥当性は低いと考える。

以上、各研究者の構造に関する認識とその変化に注目してこの用語の検討を行った。以下では埋葬施設の定義に照らし合わせて用語の検討を行う。

白石太一郎は「遺骸を納めるのが棺であり、この棺を保護する施設が槨にあたり、この槨が発達して生みだされたものを室」と述べている(白石 2002,p.171)。和田晴吾は「室」について「独自の空間(玄室)とそこに至る通路(羨道)を有するもので、空間は多様に利用されるものをいう」と、より明確に定義づけている(和田 2003,p.724)。

「地下式板石積石室墓」の内部において石棺や木棺などが確認された例はなく、その可能性を指摘する研究者もいない。また、棺と室が一体化し、「開かれた棺」としての機能が想定されている九州の横穴式石室にみられるような石障、石屋形、石棚などの構築物も存在しない。

これらのことを考慮に入れると、「地下式板石積石室墓」は、まさに遺体を納める容器であり、構造的にも、機能的にも「棺」として位置づけられる。

(2) 「地下式」という用語

1951年、寺師見国は伊佐市焼山遺跡の報告の中で、木村・寺師 1936で挙げられた諸特徴に「墳丘その他地上設備は何等認められない」などの新たな特徴も加え、この種の墓の名称として「地下式板石積石室」を採用した（寺師 1951,p.109）。

「石室」に関しては前項において筆者の立場を述べたが、「地下式」という用語についても「上部で閉塞し、「地下式」を称する理由は存在しない」ことなどから（橋本 2007）、その必要性を疑問視する研究者もいる。この用語は後述のごとく構造的な説明のみならず、この種の墓制に対する評価も内包していることがうかがえるので、検討の必要な項目である。

本項の冒頭でも述べたように、「地下式板石積石室」という名称が採用された経緯を重視すると、「地下式」という語は、盛土など地表上の施設の不在に起因するものと理解してよいだろう。乙益重隆の「地下式板石積石室はその名の通り、墳丘その他意識的に設けた地上施設が認められない」という文からも、そのことがうかがえる（乙益 1971,p.2）。

この種の墓が認識され始めた当初、地表には墳丘あるいは盛土は存在しないとされていたが、大住遺跡の発掘調査において盛土が確認されて以降（寺師 1959）、わずかながらその例は増加しつつある。また、平田遺跡では、確認された140基の中に切り合い関係が存在する例がないことから、地表上には標識となる盛土が存在していた可能性が指摘されている（大口市 1986、池畑 1992b）。石棺内部が空洞であったとする筆者は、少なくとも造墓時に排出された土を用いた程度の盛土は存在したのではないかと考えている。

以上のように、「地下式板石積石室墓」研究の開始後まもなく盛土の存在自体は確認されており、以後もそれを補強する例や研究がなされてきた。しかし、なおもこの用語が用いられ続けた要因は何であったか。

乙益は「この種の墳墓には本来地表に盛り上った小封土があったとみるべきである」としながらも、「もちろんその封土は一種の標識にはちがいないが、むしろ地中を掘って埋葬施設を構築したさい、余りの土で墓まろめを行った感があり、高塚古墳のばあいとは本質的に異なるものである」としている（乙益 1971,pp.2-3）。

小田富士雄も「「地下式」の名称が付与されたのは、西日本の古墳時代墳墓は地上に盛土して石室を築く高塚形式をとるのが一般であることに対する考古学界の通念に反するところから発生したもの」とし、この用語を用いる要因について述べている（小田 1984,p.120）。

つまり、「地下式」は、構造的な説明というより、むしろ列島各地に広がる「高塚」古墳との違いを表す語として使用されてきた側面があり、もはや寺師の時点とは異なる概念で用いられているのである。乙益の研究以後、「地下式板石積石室墓」は「隼人の墓制」としての評価を確立していくが、すでにこの名称の中に、解釈の下地があったとみられる。

確かに、下部施設の多数が円形で占められ、土葬の周囲を板石で囲んだものに過ぎない墓という認識の段階では、箱式石棺墓や「高塚」古墳との違いのなかでこの墓制を位置づけることは一つの方法として有効であったし、名称の問題もなかっただろう。

しかし、類例の増加や研究の蓄積に伴い、この種の墓に対する認識が当初のものとは大きく異なってきており、定義・名称ともに見直す必要がある。

先に述べたように、筆者はこの種の墓を土壙墓の延長ではなく、石棺墓の一種として捉えている。そして、構造的な意味というより、むしろこの墓に対する評価を内包した「地下式」という用語も不適切だと考えている。

したがって、筆者はこの種の墓を「板石積石棺墓」と称する立場をとる⁽⁶⁾。

そして、この墓の特徴は、①地表から墓壙を掘り、壙底に板石（側石）を円形・方形状に立て並べて棺とし、②そこに遺骸および副葬品を配置し、③側石上縁から板石を持ち送り式に配置し蓋とする一種の石棺墓で、④地表には少なくとも造墓時に排出された土を用いた程度の盛土が存在していたことなどが挙げられる。

3. 板石積石棺墓の特質

(1) 平面形態にみられる多様性

板石積石棺墓は、盛土や蓋石の一部もしくはほとんどが破壊されていることが多いため、下部施設である石棺の平面形態の検討に主眼が置かれてきた。石棺の平面形態にはいくつかのバリエーションがあり、それらの先後関係に注目した研究がなされてきた。

乙益重隆は、石棺の平面形態を第一類から第四類の楕円形・円形・長方形・方形に分類し、楕円形から方形への変化を想定した（乙益 1970・1971）。

これに対し河口貞徳・上村俊雄は、鹿児島県出水市堂前遺跡の調査成果より、方形のものも円形よりも先行的であるとした（河口・上村 1971）。

戸崎勝洋・牛ノ濱修は、平田遺跡の調査成果をもとに、長方形・方形などの方形型、円形・楕円形などの円形型に加え、中間型に多角形型を位置づけた（戸崎・牛ノ濱 1986）。なお、未調査ながら楕円形型も存在するとしている。そして、方形型は側石長軸を横に使用し、垂直に隙間なく立てているのに対し、円形型は側石長軸を縦に使用し、内傾させて立てている例があることに注目した。内傾して立てる要因を簡略化、側石間の隙間を粗雑化と捉え、方形型から円形型への変遷を想定している。

西健一郎は、第Ⅰ類（長方形型）、第Ⅱ類（楕円形型）、第Ⅲ類（円形型）の基本分類に加え、側石の置き方、石棺主軸のとれる長方形型・楕円形型については主軸線上の石材（小口側石材）の置き方、側石間の隙間に注目し細分を行った。戸崎・牛ノ濱同様、簡略化・粗雑化という変化の方向性を想定し、第Ⅰ類から第Ⅲ類へ変遷するとした（西 1988a）。

平面形態の分類とその変遷過程についての論考は、以上の研究に代表されるが⁽⁷⁾、乙益の円形先行説とそれ以外の研究者による方形先行説に分けられる。これらは必然的に板石積石棺墓の起源を何に求めるかにも関係する。

乙益は、その起源を熊本県球磨郡に例のある小形箱式石棺墓に（乙益 1971）、河口・上村は弥生時代の板石積土壙墓に求めている（河口・上村 1971）。後に河口は、鹿児島県長島町明神下岡遺跡の調査成果をもとに、支石墓の影響を受け撐石をもつ箱式石棺に起源を求めた（河口 1987）。また、上村は五島列島の神ノ崎遺跡や長崎県佐世保市宇久町宇久松原遺跡に、撐石を想起させる形態や屈肢葬の埋葬施設があることから、その祖源を支石墓に求めている（上村 1984）。

西は、上部施設である板石積の起源を、弥生時代の出水地方や大口盆地にみられる木棺墓上覆石の風習に求め、下部施設の石棺については、八代海沿岸の箱式石棺に起源があるとした。そして、両者が折衷される形で板石積石棺墓が創出されたと捉えている。この八代海沿岸の箱式石棺については熊本県宇城市三角町平松2・6号箱式石棺を例に挙げ、平面方形である堂前1・

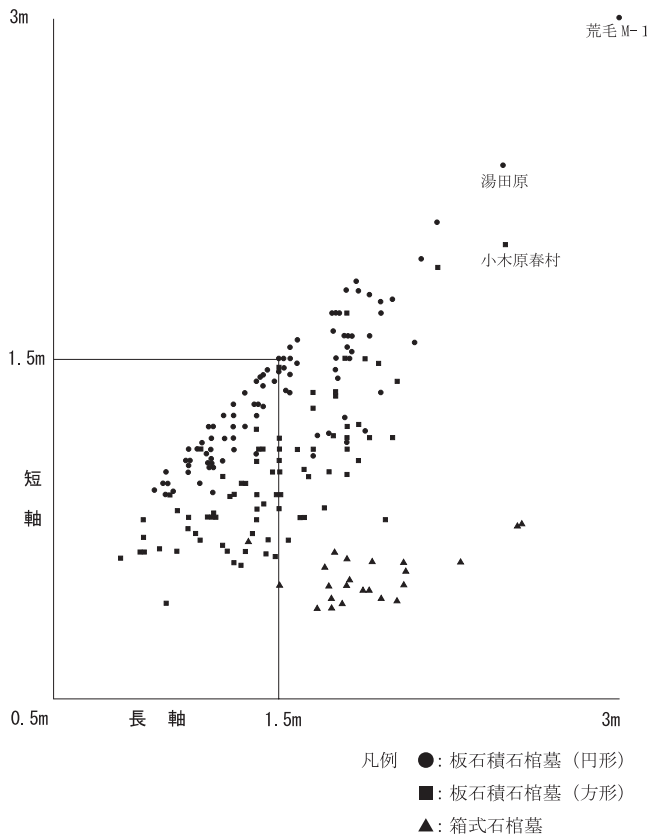


図74 板石積石棺墓および箱式石棺の規模

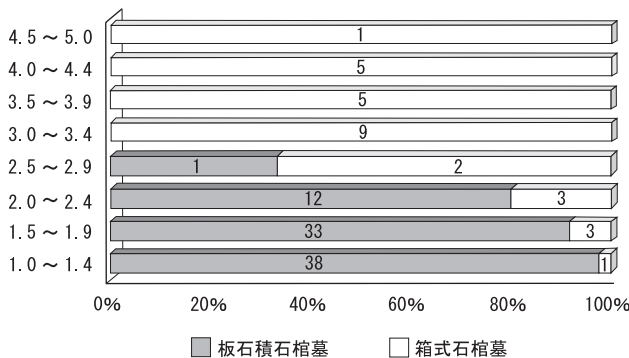


図75 板石積石棺墓および箱式石棺の長幅比

3・4号板石積石棺墓との比較の中で、平面形態のみならず石材の使用方式・使用枚数における共通性を指摘している(西1988a・2000)。論の展開からすれば、平松箱式石棺墓群および八代海沿岸の箱式石棺墓の編年の位置が板石積石棺墓の出現期を決定する上で重要な役割を果たすはずであるが、形態的に最も新しいとされる円形の鹿児島県さつま町別府原3号板石積石棺墓から出土した小型鍬⁽⁸⁾と、同じく円形同県涌水町永山10号板石積石棺墓の周溝出土土器の編年観をさかのぼらせ、その出現を古墳時代初頭に求めている(西2000)。

しかし、重要な根拠の一つである鉄鍬の編年観は、鉄鍬自体の型式学的研究に拠るものでなく、板石積石棺墓の編年観から導き出されたもので、議論が循環している(西1988b)。副葬品の編年観については次節にて論じる。

以上のように起源については諸説あり、評価が定まっていないが、西が指摘した平面方形の板石積石棺墓と八代海沿岸の箱式石棺にみられる共通性は板石積石棺墓の系譜を考える上で重要である⁽⁹⁾。

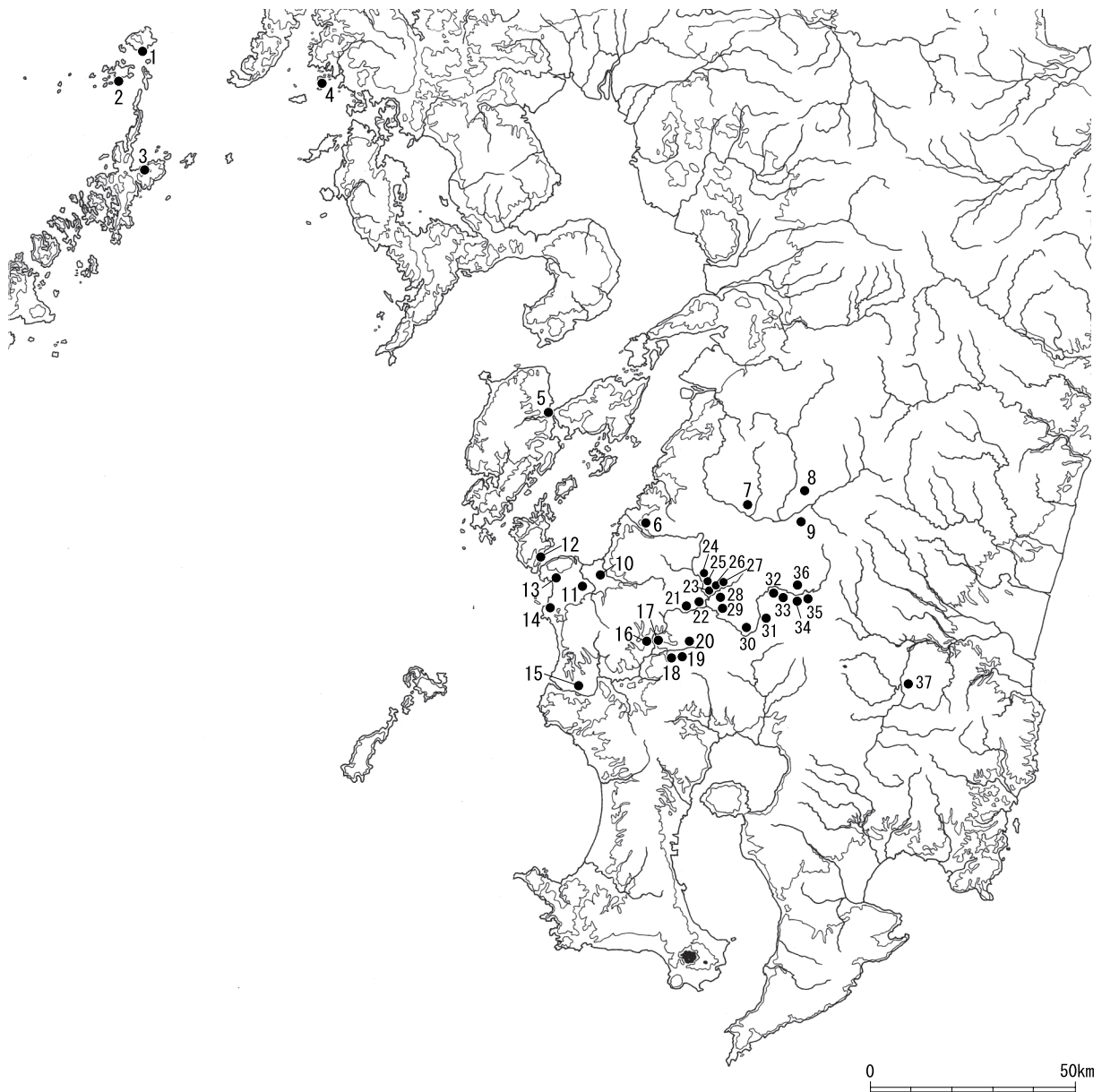
(2) 平面方形の板石積石棺墓と箱式石棺—石棺規模、長軸と短軸の比率—

平面方形の板石積石棺墓は、平面形態や石材使用方式・使用枚数の点で箱式石棺との共通性が指摘されるが、板石積となる蓋以外で、これらの墓制に差異が見出しうるのであろうか。ここでは、両者の規模や長軸・短軸の比率を比較することにより板石

積石棺墓にみられる下部施設の特徴を抽出する。

図74は、板石積石棺墓と八代海沿岸における箱式石棺墓の長軸と短軸(いずれも内法)を示したものである。従来、板石積石棺墓はその規模が1.5m以下のものが多く、屈肢葬が想定されてきた(河口・上村1971)。一方で、八代海沿岸の箱式石棺を見ると1.5m以上のものがほとんどである。八代海沿岸の箱式石棺とは石棺構造においては関連性がうかがえるものの、石棺規模の点では明確に異なっている。

図75は、平面方形の板石積石棺墓と八代海沿岸に位置する箱式石棺墓の長幅比(内法)を示したものである。板石積石棺墓の長幅比が1.0~1.9に集中するのに対し、箱式石棺の長幅比は3.0~4.4が最も多くなるという明瞭な差異を見出せる。



No.	遺跡名	県名	所在地	No.	遺跡名	県名	所在地
1	宇久松原	長崎	佐世保市宇久町平郷字松原	20	別府原	鹿児島	薩摩郡さつま町永野別府原
2	神ノ崎	長崎	北松浦郡小値賀町黒島郷	21	大住	鹿児島	伊佐市大口羽月宮人大住
3	浜郷	長崎	南松浦郡新上五島町有川郷字浜村	22	焼山	鹿児島	伊佐市大口羽月下殿焼山
4	宮の本	長崎	佐世保市高島町高島免字前田	23	諏訪野	鹿児島	伊佐市大口原田二山諏訪野
5	妻の鼻	熊本	天草市亀場町亀川妻の鼻	24	春村	鹿児島	伊佐市大口山野小木原春村
6	初野	熊本	水俣市初野	25	大田	鹿児島	伊佐市大口大田
7	荒毛	熊本	人吉市原田町荒毛尾園	26	瀬ノ上	鹿児島	伊佐市大口下青木瀬ノ上
9	本目	熊本	球磨郡あさぎり町免田下乙本目	27	平田	鹿児島	伊佐市大口青木平田
8	新深田	熊本	球磨郡あさぎり町深田西	28	塞ノ神	鹿児島	伊佐市菱刈町市山塞ノ神
10	溝下	鹿児島	出水市上知識道場園	29	前目灰塚	鹿児島	伊佐市菱刈町前目灰塚
11	堂前	鹿児島	出水市高尾野町柴引堂前	30	北方	鹿児島	姶良郡湧水町栗野北方
12	小向江	鹿児島	出水郡東町大字山門野字小向江	31	永山	鹿児島	姶良郡湧水町吉松川西永山須行
13	新田ヶ丘	鹿児島	阿久根市脇本新田ヶ丘	32	島内	宮崎	宮崎県えびの市真幸島内
14	鳥越	鹿児島	阿久根市波留鳥越	33	灰塚	宮崎	宮崎県えびの市西長江浦西城
15	横岡	鹿児島	薩摩川内市上川内町釜口横岡	34	蕨	宮崎	宮崎県えびの市上江小木原
16	小松原	鹿児島	薩摩郡さつま町鶴田柏原上小幡	35	杉水流	宮崎	宮崎県えびの市杉水流
17	湯田原	鹿児島	薩摩郡さつま町鶴田湯田原	36	広畑	宮崎	宮崎県えびの市坂元広畑
18	尾原	鹿児島	薩摩郡さつま町中津川北方尾原	37	香禅寺	宮崎	宮崎県都城市高城町石山鍛冶屋園
19	日露	鹿児島	薩摩郡さつま町北方日露				

図 76 板石積石棺墓 分布図

上にみた差は、単に見かけ上の違いにとどまるものでなく、埋葬施設への指向の差に起因するものと考えられる。平面方形の板石積石棺墓は、平面形態や石材使用方法・使用枚数の点で箱式石棺との共通性が認められるが、それらは板石積石棺墓の一要素として再構成されているのである。

(3) 分布地域 (図 76)

板石積石棺墓の分布が九州南部に偏ることは再三指摘されてきたが、あらためてその分布域について述べる。

板石積石棺墓の分布域は沿岸部・内陸部に大きく分けられる。沿岸部は芦北地方、出水地方、川内川下流域の小地域に、内陸部は、川内川中・上流域、球磨盆地、都城盆地の小地域に分ける。また、神ノ崎遺跡や熊本県天草市亀場町妻の鼻遺跡などの島嶼部にも板石積石棺墓に位置づけられるものが存在し、島嶼部は、五島列島、天草南部、長島の小地域に分ける。

なお、板石積石棺墓は、これらの地域で点的に構築されるのではなく、群を構成するものがほとんどである。したがって、図 76 に示した「遺跡名」とは、板石積石棺墓群を意味する。

4. 板石積石棺墓の副葬品の検討－鉄鏃を中心に－

(1) 研究史と課題

板石積石棺墓の副葬品は、鉄製品なかでも武器類が中心となり、その種類や量の少ないことが指摘されてきた。

森山栄一は、出土鉄製品を分類し、出土遺構の平面形態との相関性や地域的偏在性の抽出を試み、二段逆刺鏃が円形墓から出土し、かつその分布が山間部（さつま町・涌水町）に偏ることを指摘した（森山 1982）。

西健一郎は、石棺形態の変遷観に基づき、鉄鏃の編年を行った（西 1988b）。

松田度は、副葬鏃の組成に注目した検討を行い、圭頭鏃・逆刺鏃の共伴するもの（組成 A）、鳥舌鏃をその組成の特徴とする一群で圭頭鏃の共伴は少ないもの（組成 B）、圭頭鏃・柳葉鏃・無茎鏃が共伴するもの（組成 C）に分類した（松田 2001）。そして、近畿地方およびその周辺地域における副葬鏃の組成との類似性により、組成 A・B を 5 世紀初頭～前葉、組成 C を 4 世紀後半代に位置づけた。

以上のように、鉄鏃に関してはその内容に時期差・地域差の認められることが明らかにされつつある。しかし、組成による年代推定や石棺の変遷観にもとづく編年は試みられても、鉄鏃自体の検討をもとにした編年はなされていない。

前節で述べたように板石積石棺墓の分類およびその変遷に関する見解は出揃っているとみられるが、その妥当性の追究は石棺形態の検討のみでは限界がある。

これらのことをふまえると、今後は副葬品の検討と段階設定、およびそれに基づいた板石積石棺墓の検討が必要であろう。以下では、鉄鏃をはじめとするいくつかの副葬品を概観することにより、その編年的位置を明示し、段階設定を行う。

(2) 鉄鏃

小型圭頭鏃・小型柳葉鏃 (図 77) 板石積石棺墓の副葬鏃の中でもその中心となるのが圭頭鏃であることは早くから指摘されてきた。その中に、鏃身部長が 6 cm 以下の非常に小型の一群が存在する。また、この鉄鏃に同大の小型柳葉鏃が伴うことがしばしばある。これらは、荒

毛53-2号・N-5号、別府原3・4号、大住24号、永山2・5・13・14号、焼山5～9・11号、広畑2号、蕨103号板石積石棺墓などで出土している。

板石積石棺墓以外では、小型圭頭鎌が宮崎県えびの市蕨1号木棺墓、7・10・46号木蓋土壙墓、大分県日田市草場第2遺跡33号石棺墓・121号石蓋土壙墓、熊本県球磨郡あさぎり町夏目遺跡1号住居、大分県犬飼町舞田原遺跡8・9・25号住居跡、小型柳葉鎌は蕨46号木蓋土壙墓などに出土例が求められる。

小型の鎌は少なくとも弥生時代後期には出現しており、墳墓出土のものに注目すると古墳時代前期に位置づけられるものが多い。また、焼山6号板石積石棺墓例のように中期初頭に出現する二段逆刺鎌と共伴する例がある。

以上のことから板石積石棺墓出土の小型の鎌はその上限を古墳時代前期、下限を中期初頭前後に求めうる。

二段逆刺鎌・鳥舌鎌・短頸鎌 二段逆刺鎌は、古墳時代中期前半を代表する副葬鎌の一つで、近畿地方の有力古墳とともに九州南部においても集中的な分布を示すことが指摘されてきた（茂山1988）。

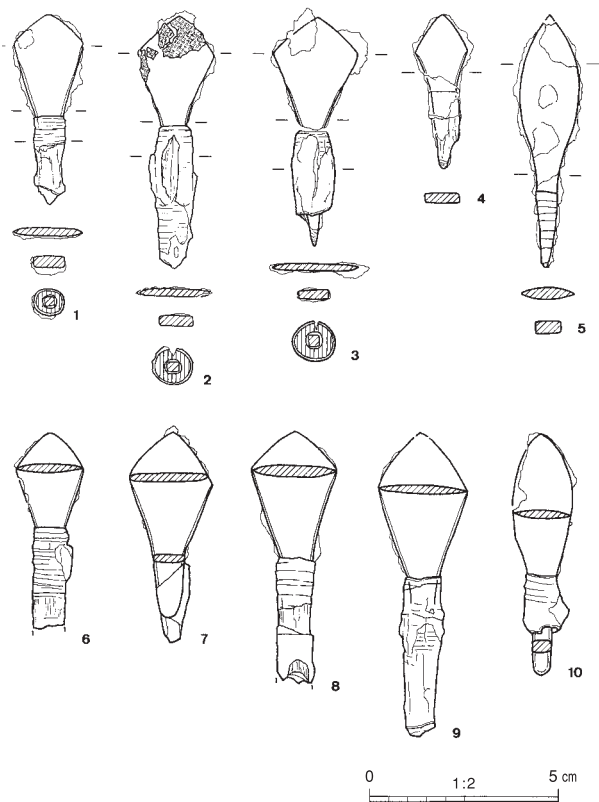
鈴木一有は、二段逆刺鎌には副葬量に地域差が認められ、多量副葬が近畿地方を中心とする地域に、少量副葬が九州南部の在地墓制に集中することを指摘した（鈴木2002,p.10）。九州南部の例には模倣製作が指摘されるものがあるが、基本的な形態の情報は共有しており、近畿地方の有力者との関係が想定しうる鉄鎌である。

鳥舌鎌や短頸鎌も古墳時代中期前半を特徴付ける鉄鎌で、二段逆刺鎌と同様に他地域では多量副葬が認められるが、九州南部の在地墓制では少量副葬にとどまる。また、鳥舌鎌は帯金式甲冑と共伴することが多く、被葬者と「中央政権」との政治的紐帯を示すものとして捉えられている（鈴木2000,p.81、2002,p.9）。

二段逆刺鎌は荒毛M-1号、初野2号、焼山6号、別府原6号、永山9号、平田3号板石積石棺墓、鳥舌鎌は荒毛M-1号、堂前5号板石積石棺墓、短頸鎌は堂前5号、別府原3号、小松原II号、湯田原板石積石棺墓より出土している。また、別府原1・3号、小松原II号、湯田原、瀬ノ上（下青木）板石積石棺墓出土の鉄鎌の中にも鳥舌鎌とみられるものが存在する。

なお、堂前5号、別府原6号、焼山6号、下青木板石積石棺墓では二段逆刺鎌、鳥舌鎌などとともに腸挟柳葉鎌が出土しており、この鉄鎌も中期前半に位置づけられる。

長頸鎌 中期中葉以降、列島各地で副葬鎌の主体となる鎌である。九州南部の在地墓制のひとつである地下式横穴墓では長頸鎌の導入以後に同種の鎌を多量に副葬するようになる（藤井2007）。この様相は、溝下5号・小向江3号板石積石棺墓では看取されるものの、板石積石棺墓において長頸鎌出土例は限られている。荒毛M-1・H1-2号板石積石棺墓にも出土例がある。



1～3：焼山9号板石積石棺墓 4：焼山6号板石積石棺墓 5：荒毛N-5号板石積石棺墓 6・10：蕨10号木蓋土壙墓 7：蕨7号木蓋土壙墓 8：蕨46号木蓋土壙墓 9：草場第2遺跡121号石蓋土壙墓

図77 小型圭頭鎌・小型柳葉鎌の諸例

(3) その他の副葬品

鑷子状鉄製品や鉄釧、蛇行剣なども例は少ないが編年の位置付けが可能な副葬品で、いずれも列島各地に類例を求めうる。しかし、鉄釧や蛇行剣は地域や時期ごとの偏在性が強く一様ではないのでここでは九州の出土例に注目する。

鑷子状鉄製品は、「弥生時代に甕棺墓の副葬品として存在するものの、古墳時代前期には見られず、中期初頭以後に新たに出現する」遺物で（鈴木 1999,p.79）、妻の鼻 11・36 号板石積石棺墓から出土している。

鉄釧は、佐賀県佐賀市久保泉丸山古墳や、唐津市目貫 1 号墳など古墳時代中期に位置づけられる墳墓から出土しており（佐賀県 1986,p.469-470、2006,p.141）、その副葬が認められる妻の鼻 14 号板石積石棺墓も古墳時代中期に位置づけられる。

蛇行剣は、九州南部のなかでも地下式横穴墓からの出土が顕著である。地下式横穴墓では長頸鏃などとの共伴例があり、蛇行剣の編年の位置を中期後半に求めうる（例：島内 21・32 号地下式横穴墓、えびの市 2002）。したがって、その副葬が認められる横岡Ⅶ号板石積石棺墓も同段階に位置づけられるだろう。

板石積石棺墓出土の鑷子状鉄製品、鉄釧は古墳時代中期に位置づけられると考えているが、現時点ではその前半と後半を分かつ判断基準をもっていないので、古墳時代中期の遺物という位置づけにとどめておく。

これらのほかに、板石積石棺墓出土とされているものに横刃板鋌留短甲・馬具・円頭大刀などが挙げられる。とくに伊佐市小木原春村板石積石棺墓出土の円頭大刀は、寺師や乙益らが板石積石棺墓の下限を 6 世紀後半以降とした根拠となる重要な資料である。しかし、石棺形態こそ方形を呈するものの、上部構造が不明で、その規模は長軸内法 2.5 m、短軸内法 2 m を測り、方形を呈する一般的な板石積石棺墓よりもはるかに大きい（図 74 参照）。現時点では、積極的に板石積石棺墓とするには問題が残る。

(4) 段階設定

いくつかの副葬品を取り上げその編年の位置づけを概観したが、これらをまとめると以下のように大きく 3 段階に分けることができる（表 2）。

表 2 板石積石棺墓出土遺物の段階区分

段 階	鉄 鏃	その他の副葬品	
第Ⅰ段階：前期～中期初頭	小型圭頭鏃・小型柳葉鏃		
第Ⅱ段階：中期前半	二段逆刺鏃・鳥舌鏃・短頸鏃・腸袂鏃	鑷子状鉄製品 鉄釧	
第Ⅲ段階：中期後半	長頸鏃		

各段階で指標とした副葬鏃の違いは、単に鉄鏃の構成の変化を意味するにとどまらない。第Ⅰ段階の指標となる小型圭頭鏃は、そのほとんどが九州に類例があり、墳墓出土のものに注目すると、土壙墓・石棺墓などで占められ、古墳からは出土していない。つまり、古墳における一般的な副葬鏃ではないのである。

しかし、第Ⅱ段階の指標とした二段逆刺鏃・鳥舌鏃・短頸鏃・腸袂鏃は、古墳の副葬鏃としては広く認められるものである。ただし、先に触れたように、副葬数においては古墳と板石積石棺墓の間には明確な差が認められる。

第Ⅲ段階の指標とした長頸鏃は、その一般的な副葬方法である多量副葬がわずかであるが認められる。溝下 5 号板石積石棺墓の総数 94 本という数値は、破片であった可能性や複数埋葬を考慮に入れても、第Ⅱ段階までの副葬本数とは明らかに異なる。

	島嶼部		沿岸部			内陸部		
	天草南部	長島	芦北地方	出水地方	川内川下流域	川内川中・上流域	球磨盆地	都城盆地
I 段階： 古墳前期～中 期初頭						永山2●/5●/10●/13●/14● 大住24●/28● 広畑S102■ 焼山4■/5●/7●/8■/9■	本目SK18■ 荒毛53-2●/N- 5■	
II 段階： 中期前半			初野2●/3●	堂前1□/3■ /5●		別府原3●/4● 焼山6◆ 北方3号墳■ 湯田原● 小松原I●/II●/V● 別府原1●/6● 永山9● 瀬ノ上● 平田3●	荒毛S41-4■	香禅寺■
III 段階： 中期後半	妻の鼻1■ /11■/14■ /22■/36■	小向江1□ 小向江3□		溝下5●	横岡VII■ 横岡S46□		荒毛M-1● 荒毛H1-2■	
中期後半 以降				(溝下S8)	横岡IV□	(小木原春村)		

※●：円形 ■：方形 ◆：その他（多角形など）
 ※白抜き部は更なる検討を要するもの
 ※各段階中に複数の遺構名を列記するものがあるが、その表示順は時期差を意味するものではない。

図78 板石積石棺墓の諸段階

以上のように、先に設定した諸段階は、段階が進むにつれ型式・副葬量の面で列島の古墳の副葬方法に連動していく過程がうかがえる。この評価に関してはさらなる検討を要するが、少なくとも各段階は鍬の構成のみならず副葬方法（量）の面においても差異が認められる点は指摘できる。そして、第Ⅱ・Ⅲ段階の副葬鍬の様相は、地下式横穴墓のそれと非常によく似る点には注意が必要である。

なお、今回は副葬鍬の中心をなす圭頭鍬は小型のもの以外を対象に加えていない。圭頭鍬は、地下式横穴墓においても主たる副葬鍬で、総合的な検討を必要とするので稿をあらためて論じる必要がある。したがって、上に設定した諸段階は、暫定的なもので今後の細分および修正の余地を残している。

5. 薩摩地域における石棺墓の展開（図78）

板石積石棺墓の展開 図78は、副葬品に基づき板石積石棺墓を地域ごとに段階区分したものである。以下では、この図に基づき考察を行う。

板石積石棺墓の展開を考えると、その成立を示す最古段階のものを明らかにすることはきわめて重要な課題である。従来、沿岸部において方形石棺が出現し、それが粗雑化・簡略化して円形石棺が出現したとされてきた。今回の副葬品をもとにした検討からは、最古段階のものはむしろ内陸部において認められる。また、円形・方形のどちらが先行的であるかを明確にすることは難しい。さらなる細分により先行的な形態が明らかになるとみられる。ただ、各段階

に両者が存在しており、必ずしも単系列的な変化を分布域全体において想定する必要はないとも考えられる。第Ⅰ段階の検討は、板石積石棺墓の起源にも関係してくるが、今回の検討ではこれ以上明らかにしえない。今後は、個々の石棺構造の比較を加えた検討を行う必要がある。

第Ⅱ段階（中期前半）になると、その分布域や築造数が拡大するとみられ、当段階には石棺規模・副葬品において明らかに他とは異なる内容を有するものが存在する。この湯田原・北方3号板石積石棺墓は、板石積石棺墓の展開を考える上で重要な例として考えられるので、以下にとくに取り上げたい。

湯田原板石積石棺墓（図79-1・5～12） さつま町鶴田湯田原に位置し、川内川中・上流域で唯一の円墳とされてきた（上村1979）。墳丘は現状で南北径4.2m・東西径5mの円形を呈し、主体部は円形の板石積石棺である。

ただし、地表上に構築されている点や、石棺規模が内径で東西2.35m・南北2.49mを測り、板石積石棺墓のなかでもとくに大型に位置づけられる点で（図74参照）、他の板石積石棺墓と様相を異にする。また、副葬鏃が二群に分かれて出土しており、少なくとも一群は東での副葬が想定されている。これらは、第Ⅱ段階の指標となる短頸鏃を含み、その総数は30本を越え、板石積石棺墓の副葬数の中でも群を抜いて多い。

これまでも明確な墳丘を有することや、地表上での石棺構築・規模、副葬鏃の組成の特異性から個別的にしばしば取り上げられたが、その評価は板石積石棺墓の概念を破る例（上村1984,p.84）、終末期かそれに近い時期を示す例とされるにとどまっている（西1988a,p.181）。

北方3号墳（図79-2～4・13～19） 涌水町栗野北方に位置し、梅原末治らの調査により直径15～18mの円墳で、一部では幅1.2mの周溝が確認されたという（池畑1990）。その主体部は従来（箱式）石棺として紹介されてきたが、近年板石積石棺墓の可能性も指摘されている（橋本2007）。側石や断面略図の状況を見る限り、方形の板石積石棺墓の可能性も否定できないので、ここでは検討対象に加える。未完掘か被破壊のため全容が不明であるものの、石棺規模は現状で1.88mあり、実際はさらに大きくなるという。あくまで略図であるが墳丘略測図をみると2mを超える大型の石棺である可能性が高い。

副葬鏃は第Ⅱ段階のもので短頸鏃や腸扶柳葉鏃・片腸扶鏃（計31本）のほかに圭頭鏃を含み、総数49本を数える。

当古墳が板石積石棺墓であることを前提にすると、湯田原板石積石棺墓同様、地上に大型の石棺を構築する点や、群を抜いた副葬鏃内容などから他の板石積石棺墓とは一線を画している。

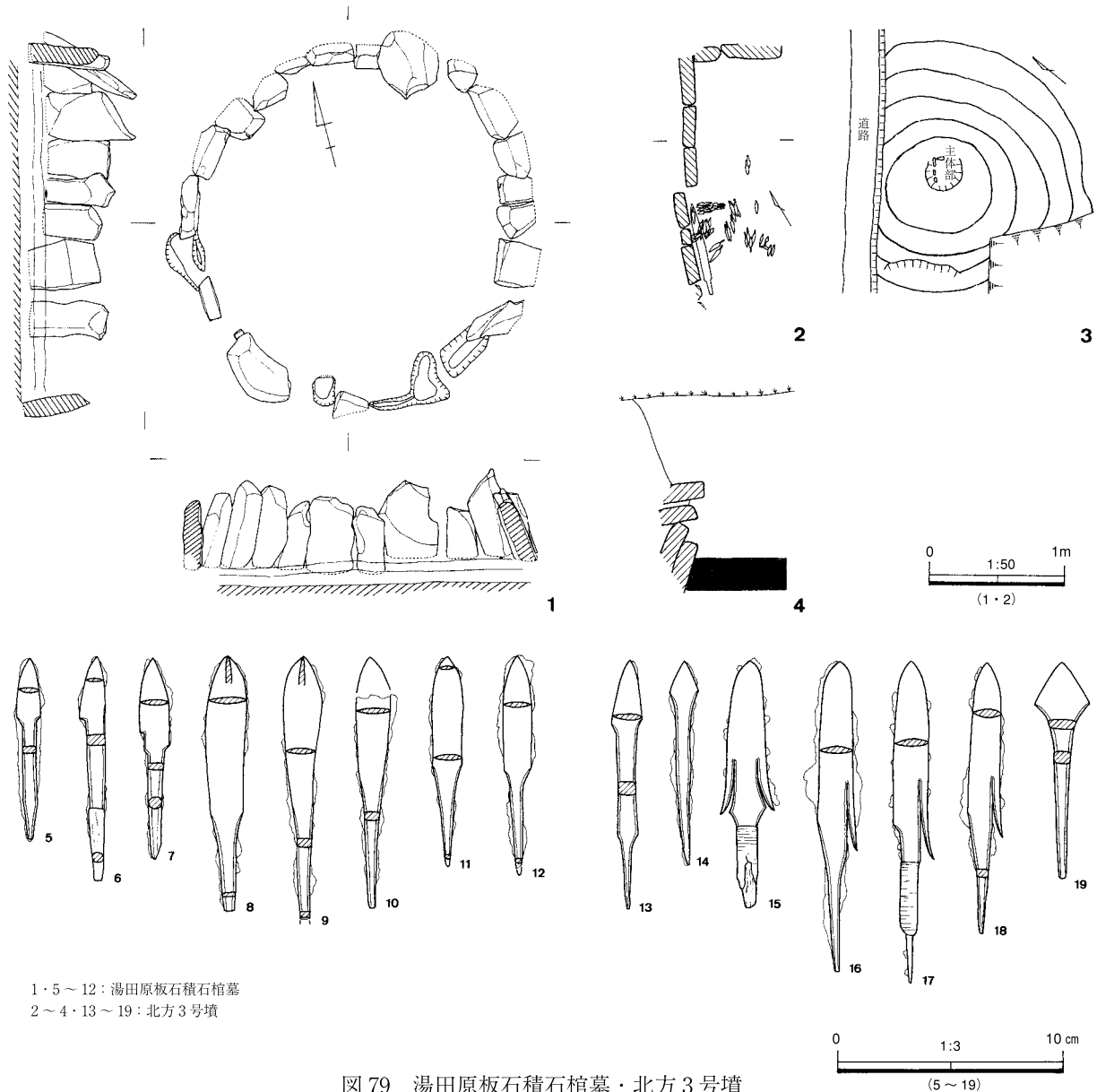
先述の特徴を厳密に当てはめるとこれらの例は板石積石棺墓に位置づけることが困難になる。

また、墳丘は確認されていないが副葬量の多さでは群を抜く荒毛M-1号板石積石棺墓（円形）などもその規模は3mと板石積石棺墓では最大規模である。

首長墓としての板石積石棺墓 以上のように、石棺規模が最大クラスのものはいずれも副葬鏃の質量ともに豊富で、規模と副葬品内容には相関性を見出しうる⁽⁴⁰⁾。したがって、筆者は、これらを首長墓的な様相を呈する板石積石棺墓と捉え、上にみた特異性はこのことに起因するものと考えられる。

中期前半における副葬鏃の特徴も考慮に入れると、これらの板石積石棺墓は、古墳築造地域との活発な交流の中で構築されたと想定しうる。つまり、前方後円墳をはじめとする古墳築造にその出自と階層を表象させる文化との関係性の強化が、中期前半段階においてこれらの首長墓として評価可能な板石積石棺墓を出現させた要因であったと捉えられる。

この視点に立つと、首長墓的な板石積石棺墓には円形・方形の両者が認められ、必ずしも石棺形態のバリエーションが単系列で捉えられないことが分かる。円形のを単に簡略化・粗雑化した石棺として捉えることは難しい。



1・5～12：湯田原板石積石棺墓
2～4・13～19：北方3号墳

図79 湯田原板石積石棺墓・北方3号墳

そして、これらのあり方こそ、当地域における独自性・地域性であり、決して「隔絶性」や「社会的停滞性」の中でのみ位置づけられるものではないと考える。

なお、この状況は、同じく集団墓として発生した地下式横穴墓が、副葬品内容や群構造の面から発生後まもなく他と隔絶した内容の首長墓的存在が出現する状況に似ている（藤井 2008）。

以前、筆者は地下式横穴墓の展開が古墳の動向と密接に関係していると想定したが（藤井 2007）、古墳群が存在せず、古墳空白地帯に近い様相を呈する薩摩地域の板石積石棺墓もまた、この動向に連動している可能性がある。

ただし、地下式横穴墓が中期後半にいたり顕著にその傾向を強めるのに対し、板石積石棺墓は中期後半以降の構築は活発でない。とくに、内陸部の川内川中・上流域においてその傾向は顕著である。

板石積石棺墓の終焉については、川内川上流域は地下式横穴墓の進出、その他の地域については古墳文化の進出が背景にあったと想定されている（西 1988a, pp.191-192）。また、土壙墓など他の墓制に置き代わったとする見解も提示されている（橋本 2006, p.1）。現時点では筆者の力量不足のためこれらを積極的に評価しえない。今後の課題としたい。

6. 結語－薩摩地域における古墳と奥山古墳の位置づけ－

本章ではまず、「地下式板石積石室墓」と呼ばれてきた墓制の研究史を整理することにより定義・名称に関する問題点を抽出し、板石積石棺墓と称する立場を明らかにした。そして、この種の墓制の特質にふれた後、副葬品の検討から段階設定を行い、板石積石棺墓の展開過程の追究を試みた。

板石積石棺墓の築造は前期から中期前半にかけてピークをむかえると考えられる。この時期の薩摩地域には明確な前方後円墳は確認されておらず、わずかに認められる古墳も沿岸部に偏る。これらの古墳については、前期に位置づけられるものとして鳥越古墳、中期に位置づけられるものとして小浜崎1・2号墳が挙げられる。また、明確な時期判定は困難であるが船間島古墳、安養寺丘古墳なども前期ないし中期前半の間に位置づけられる可能性が高い。

これら沿岸部の古墳の点的な存在は、在地墓制が展開する地域においては客体的にみえ、その築造は在地墓制築造地域に古墳文化が進出したかのように捉えられてきた。

しかし、沿岸部の前期～中期前半の板石積石棺墓は比較的少なく、当地域においてはむしろ板石積石棺墓に先んじて古墳が築造された可能性がある。これらの時期に板石積石棺墓が最も築造されるのは川内川中・上流域をはじめとする内陸部である。その内陸部も第Ⅱ段階（中期前半）では広域に流通する鉄鏃を副葬し、一部では首長墓としての評価が可能な板石積石棺墓が現れる。

これらから総合的にみると、沿岸部における古墳の被葬者集団と内陸部の板石積石棺墓の被葬者集団には直接・間接の交流が推定できる。

それでは、古墳時代中期を通して在地墓制と古墳墓制とが混在し、多様なあり方をしめす薩摩地域において、奥山古墳はどのように位置づけられるだろうか。

奥山古墳の主体部は箱式石棺である。すでに指摘されている諸特徴に加えて（橋本 2005a）、石棺長軸（2.59m）・長幅比（3.3）からも上天草地方を含む八代海沿岸の箱式石棺に近い様相を呈する。また、当古墳は単体で存在し、群をなさない。これらの特徴は、同じ石棺墓制にありながら、先にみた板石積石棺墓のものとはいずれも一致しない。

板石積石棺墓の中心地である薩摩地域北部は、火山岩分布域にあたり、石棺構築の際にはこれらの石材を用いている。一方、奥山古墳の位置する薩摩地域南部は堆積岩分布域ではあるが、使用石材の中には天草地方のものがあるという（大木 2003、橋本 2005a）。使用石材の違いは、地理的環境のみによるものでなく、入手経路、ひいては被葬者層の差に起因するとみられる。

また、当古墳は万之瀬川の旧河口付近に位置している。河口付近に墳墓を築く例を薩摩地域で求めると、船間島古墳（川内川）、鳥越古墳（高松川）が挙げられ、いずれも首長墓となる古墳である。

近隣に比較できる墳墓が存在しないものの、以上のことから奥山古墳は、まさに首長墓として位置づけられる。

奥山古墳の位置する薩摩地域南部は、九州西海岸の南北を結ぶ海上交易拠点として、古墳時代社会に連なっていたと想定されている（橋本 2005b,p.6）。薩摩地域沿岸部に点在する他の古墳も、その一端を表しているとみられ、先に見た板石積石棺墓の「古墳的」な様相もこれらの地域との活発な交流を背景に波及したと考える。

これまで薩摩地域の古墳時代研究において、「隔絶地の特殊な環境」、「孤立的な社会」から発生した在地墓制とそこへ進出した古墳という構図が描かれたことは少なくなかった。九州南部における独自性は確かに存在するが、その中には他地域との活発な交流のもとに顕在化したものも少なくないのである。

謝辞

本稿を執筆するに当たって、下記の諸氏・諸機関にご配慮および有益なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

池畑耕一、大木公彦、甲斐康大、新里貴之、新東晃一、中村耕治、中村友昭、中村直子、永山修一、西嶋剛広、橋本達也、東和幸、三好栄太郎、鹿児島県歴史資料センター黎明館

【註記】

- 1 本章での薩摩地域は、薩摩半島を中心とし、北限を出水市、東限を涌水町とする鹿児島県西部地域を指す。
- 2 例：妻の鼻・横岡・小向江遺跡など。また、安養寺丘・船間島古墳などは竪穴式石槨と「地下式板石積石室墓」に見解が分かれたこともある。
- 3 石川恒太郎は宮崎県都城市香禅寺遺跡の報告の中で、「甚だ異なる形式の箱式石棺」として明確に「石棺墓」として捉えているが（石川 1959）、その指摘が反映されることはなかった。
- 4 板石積の部分「葺石」と呼ぶ理由も、遺骸の上部に土盛りをし、さらにその上部や周囲に板石を葺いた墓と認識されていたことにあるとみられる（曾野・中川・佐藤 1950,p.50）。
- 5 このことは寺師 1958 の記述からもうかがえる。寺師は当時、側石を円形状に並べる例が多数を占める中、方形のものも少なからず存在することについて「完全に同形の残されたものがないから或いは普通の箱式棺の系統かとも思われる点もあり、果たして内部を土で満たして小さい板石にて屋根形に覆はれてあるか、今後の調査によらねばならない」と述べている（寺師 1958,p.14）。
- 6 筆者は以前、この種の墓を「地下式板石積石室墓」としたことがあったが（藤井 2003・2006）、ここで立場を改めたい。
- 7 鶴嶋俊彦は、球磨地方の板石積石棺墓を検討対象とし、円形・長方形などの平面形態に加え、側石の石材長軸の置き方、側壁石材・構造の変化に注目し分類を行った（鶴嶋 1995）。そして、箱式石棺に類似した長方形のものから、方形、円形のものへと変化し、板石積石棺墓の石材構築技術とは明らかに異なる系統の技術の導入により、石垣状の側石をもつものや、側石外部に控石をもつものへ変化するとした。
この異系統技術導入以後のものについては、先に述べた板石積石棺墓の概念から外れるものも存在するが、「この地域に横穴式石室が導入される時期に出現した折衷型とも推定し得る形式」と捉えれば（p.210）、この地域における板石積石棺墓の終末形態を物語る例として理解できるのではないだろうか。
- 8 この小型鍬は短頸鍬を指すとみられ、筆者が次節で取り上げる小型の鍬とは異なる。
- 9 先学により指摘されているが「板石積石棺墓」という名称を用いる理由はここにもある（西 1988a、橋本 2007）。
- 10 この視点に立つと先にみた小木原春村例は、板石積石棺墓として評価できるかもしれない。しかし、6世紀後半という年代的な隔絶性はなおも問題として残る。

【引用・参考文献】

- 池畑耕一 1990 「高塚古墳の南限とその築造時期」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 pp.327-348
 1992a 「その他の南九州の墓制」『鹿児島考古』26 鹿児島県考古学会 pp.13-14
 1992b 「考古資料からみた隼人の宗教観」『古代文化』44 古代学協会 pp.23-33
- 大木公彦 2003 「“南九州～琉球列島北部”の海と生命の歴史」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』8 鹿児島大学総合研究博物館 pp.8-15
- 小田富士雄 1966 「2 九州」『日本の考古学』IV 古墳時代上 河出書房 pp.114-174
 1970 「五島列島の弥生文化－総説篇－」『長崎大学人類学考古学研究報告』2
 （小田富士雄 1983 『九州考古学研究』弥生時代編 学生社 pp.529-588 に再録）

- 1984 「IV 総括―神ノ崎遺跡の性格―」『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集
小値賀町教育委員会 pp.117-121
- 乙益重隆 1970 「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本』3 九州 角川書店 pp.90-111
- 1971 「地下式板石積石室墓の研究」『国史学』83 國學院大学国史学会 pp.1-29
- 1982 「III 遺跡」『妻の鼻墳墓群』本渡市教育委員会 pp.10-12
- 1986 「南九州における部族と墓制 古墳時代の終焉にむけて」『えとのす』31 新日本教育図書株式会社 pp.94-100
- 上村俊雄 1981 「川内川流域の古墳文化（一）」『人文科学論集』17 鹿児島大学法文学部 pp.55-100
- 1984a 『隼人の考古学』考古学ライブラリー 30 ニュー・サイエンス社
- 1984b 「(6) 鹿児島県下の地下式板石積石室墓の諸問題」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会 連合学会資料』肥後考古学会連合大会実行委員会 pp.61-75
- 1991 「2 墓制からみた隼人世界」『新版 古代の日本』3 九州・沖縄 角川書店 pp.182-196
- 河口貞徳 1987 「隼人の埋葬」『鹿児島考古』21 鹿児島県考古学会 pp.1-22
- 甲元眞之・杉井健 2007 『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編 1 熊本県上天草市
- 鈴木重治 1959 「高城町香禅寺古墳の出土品について」『宮崎県文化財調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 pp.17-23
- 白石太一郎 2002 「棺槨論争」『日本考古学事典』三省堂 p.171
- 新東晃一 1992 「南九州の地下式板石積石室」『鹿児島考古』26 鹿児島県考古学会 pp.11-12
- 鈴木一有 1999 「2 副葬遺物にみる先進性と特殊性」『五ヶ山B 2号墳』浅羽町教育委員会 pp.76-84
- 2000 「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会 pp.75-94
- 2002 「九州における古墳時代の鉄鏃」『考古学ジャーナル』496 ニュー・サイエンス社 pp.8-11
- 2003a 「二段逆刺鏃の象徴性」『静岡考古学研究』35 静岡県考古学会 pp.73-90
- 2003b 「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11 帝京大学山梨文化財研究所 pp.49-70
- 鶴嶋俊彦 1995 「第七章 総括」『上ノ寺遺跡群』人吉市教育委員会 pp.198-212
- 戸崎勝洋・牛ノ浜修 1986 「第4節 まとめ」『瀬ノ上遺跡・平田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
大口市教育委員会 pp.138-142
- 中村耕治 1992 「南九州の古墳文化」『鹿児島考古』26 鹿児島県考古学会 pp.3-6
- 永山修一 1998 「文献からみた隼人」『宮崎考古』16 宮崎考古学会 pp.10-14
- 西健一郎 1988a 「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州文化史研究所紀要』33 九州大学九州文化史研究施設 pp.167-209
- 1988b 「地下式板石積石室墓出土鉄鏃の編年的検討」『鹿児島考古』22 鹿児島県考古学会 pp.91-99
- 1996 「川内市における古墳時代墳墓について－平面方形の地下式板石積石室墓を中心に－」『大河』6 大河同人 pp.107-130
- 2000 「地下式板石積石室墓起源論」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 pp.103-121
- 橋本達也 2006 「列島西南端の古墳時代墓制－奥山（六堂会）古墳調査成果から－」『平成18年度 鹿児島県考古学会 研究発表会』資料 鹿児島県考古学会 pp.1-2
- 2007 「古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究」『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp.1-18
- 2008 「古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.205-214

- 橋本達也・藤井大祐 2007『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- 浜田亀峰 1954『鹿児島県川内郷土史』鹿児島県川内市
- 藤井大祐 2003「南九州鉄鍬集成」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 pp.251-300
- 2006「古墳時代南九州における副葬鍬の組成と分布」『鹿児島県考古学会秋季大会研究発表会』資料 鹿児島県考古学会 pp.8-9
- 2007「九州南部の中期古墳」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会 pp.139-159
- 2008「岡崎 18 号墳地下式横穴墓群の意義」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.191-204
- 松田 度 2001「本日遺跡 SK17・18 の検討－地下式地下式板石積石室墓にみる地域文化のあり方－」『本日第3次～5次発掘調査報告』免田町教育委員会 pp.133-158
- 森山栄一 1982「地下式板石積石室墓出土の鉄器について」『森貞次郎博士古稀記念文化論集』森貞次郎博士古稀記念文化論集刊行会 pp.1135-1147
- 1984「(8) 熊本県の地下式板石積石室について」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会 連合学会資料』肥後考古学会連合大会実行委員会 pp.82-90
- 柳沢一男 2003「南九州における古墳の出現と展開」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 pp.1-26
- 和田晴吾 2003「棺と古墳祭祀(2)－『閉ざされた棺』と『開かれた棺』－」『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会 pp.713-725

【報告書等】

- 阿久根市教育委員会 1992『鳥越古墳群』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 阿久根市教育委員会 1997『鳥越古墳群 大蔵庵遺跡・北山遺跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 池水寛治 1974「第四章 古墳時代」『阿久根市史』阿久根市 pp.88-107
- 池水寛治 1981『長島の古墳』鹿児島県出水郡長島町教育委員会
- 石川恒太郎 1959「香禅寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 pp.9-16
- えびの市教育委員会 1990『永田原遺跡 小木原遺跡群蔵地区(A・B地区) 口ノ壺遺跡』えびの市文化財調査報告書第6集
- えびの市教育委員会 1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 大分県教育委員会 1989『草場第二遺跡』九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 大口市教育委員会 1986『瀬ノ上遺跡・平田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 小値賀町教育委員会 1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集
- 鹿児島県教育委員会 1984『外川江遺跡 横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)
- 鹿児島県立川内中学校 1937『川内地方を中心とする郷土史と伝説』
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館(池畑耕一編) 1988『館企画特別展 南九州の墳墓－弥生・古墳時代－展示図録』
- 上村俊雄 1979「第四節 古墳文化」『鶴田町史』鶴田町史郷土史編さん委員会 pp.46-77
- 河口貞徳・上村俊雄 1971「別府原・堂前古墳の調査－地下式板石積石室について－」『考古学雑誌』57-1 日本考古学会 pp.24-64
- 河口貞徳ほか 1973「永山遺跡」『鹿児島考古』8 鹿児島県考古学会 pp.3-83
- 木村幹夫・寺師見国 1936「鹿児島県伊佐郡内の古墳」『考古学雑誌』26-6 日本考古学会 pp.359-367
- 佐賀県教育委員会 1986『久保泉丸山遺跡』上巻 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

- 佐賀県教育委員会 2006『大江前遺跡』西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(3)
- 佐藤伸二・片岡英治 1984「初野地下式板石積石室墓群」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会 連合学会資料』
肥後考古学会連合大会実行委員会 pp.101-105
- 曾野寿彦・中川成夫・佐藤達夫 1950「鹿児島県伊佐郡羽月村下殿古墳発掘調査報告」『考古学雑誌』36-2
日本考古学会 pp.47-51
- 寺師見国 1951「鹿児島県伊佐郡焼山古墳」『日本考古学年報』1 日本考古学協会 pp.108-110
- 寺師見国 1958「鹿児島県の地下式板石積石室」『鹿児島県文化財調査報告書』第5集 鹿児島県教育委員会
- 寺師見国 1959「鹿児島県大口市大住焼山石室古墳群」『鹿児島県文化財調査報告書』第6集 鹿児島県教育委員会
- 長島町教育委員会 1986『明神下岡遺跡』長島町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 長島町教育委員会 2006『立神遺跡』長島町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 橋本達也 2005a「鹿児島のフィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－」『鹿児島大学総合研究博物館
News Letter』13 鹿児島大学総合研究博物館 pp.1-6
- 2005b「加世田市『六堂会』古墳の調査」『鹿児島県考古学会研究発表会資料』鹿児島県考古学会
pp.6-7
- 菱刈町教育委員会 1983『前畑遺跡』菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 本渡市教育委員会 1982『妻の鼻墳墓群』本渡市文化財調査報告第1集
- 人吉市教育委員会 1992『荒毛遺跡』
- 人吉市教育委員会 1995『上ノ寺遺跡群』人吉市文化財調査報告
- 人吉市教育委員会・永井孝宏 2001「荒毛遺跡地下式地下式板石積石室墓の発掘調査」『ひとよし歴史研究』
4 人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会 pp.135-165
- 深田村教育委員会 2000『新深田遺跡』深田村文化財調査報告第3集
- 三角町教育委員会 1984『平松箱式石棺群』三角町文化財調査報告第3集
- 三角町教育委員会 1986『宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ』三角町文化財調査報告第6集
- 免田町教育委員会 2001『本目 第3次～5次発掘調査報告』免田町文化財調査報告第3集

【図版出典】

- 図72：別府原1号. 河口・上村 1971
堂前1号. 河口・上村 1971
- 図73：小値賀町 1984
- 図77：1～3. 筆者実測（鹿児島県歴史資料センター黎明館）
4. 筆者実測（鹿児島県歴史資料センター黎明館）
5. 人吉市・永井 2001 を再トレース
6・10. えびの市 1990 を再トレース
7. えびの市 1990 を再トレース
8. えびの市 1990 を再トレース
9. 大分県 1989 を再トレース
- 図79：1. 上村 1979 5～12. 上村 1979 を再トレース
2～4. 池畑 1990 13～19. 池畑 1990 を再トレース

第2章 奥山古墳出土土器の系譜とその背景

甲斐 康大

1. はじめに

奥山古墳出土土器群が九州南部の古墳時代土器様式の通称である「成川式土器」と一線を画していることには調査担当者である橋本達也が早くから着目し、壺には成川式土器の影響が看取できるが、その他の供膳具については在地生産の可能性を考慮しつつも非在地系の土師器の影響を受けていると指摘していた。一方で奥山古墳の石棺に関しては天草諸島－宇土半島の石棺製作技術をもって作られたことが確定的であり（橋本 2005・2006a・b）、出土土器の系譜を明らかにすることはさらなる地域間交流の実態解明の上で重要な課題であった。そこで本論では奥山古墳出土土器の類例を九州南部外に求め、その系譜を探るとともに時期を明らかにし、併行期の在地土器の様相についても整理して奥山古墳出土土器の意義について考察を行いたい。

2. 奥山古墳出土土器の様相とその系譜・時期

(1) 奥山古墳出土土器の諸特徴

奥山古墳では墳丘南側の区画溝内から、壺2個体、小型丸底壺5個体、脚付短頸壺1個体、鉢1個体、高杯7個体以上、器台もしくは脚付壺とみられる1個体が出土した（図80）。その土器にみられる特徴を以下に挙げたい。

壺は2個体とも単口縁壺であり、頸部が「く」の字に強く屈曲する。そして、内外面ともに粗いハケメ仕上げである。

小型丸底壺は口縁部径が胴部最大径を上回り、底部が尖底気味の個体と丸底の個体の2種類が存在する。いずれも頸部は「S」字状に強く屈曲し、締まりが弱い。ハケメ・ナデ調整であり、底部内面に回転工具痕がみられる。内面に赤色顔料が付着した個体も存在する。

高杯は杯部が浅く口縁部が大きく開き、屈曲部外面に明瞭な稜線をもつ。脚柱部は細い棒状を呈し、内面を削らないため器壁が厚い。脚裾は接地しそうなほど強く屈曲して開く。また、杯部と脚部の接合には付加法が用いられる。内外面ともにナデ調整を主体とする。

器台または脚付壺と考えられる個体にも高杯同様の成形・調整技法がみられる。

脚付短頸壺も全体的にナデ調整を主体とし、底部内面に回転工具痕が残る。鉢は胴部中位が張る広口のもので、全体的にナデで仕上げられている。

全個体を通して胎土・色調が酷似している。さらに小型丸底壺や高杯のように多数出土している器種は、成形・調整技法や形態、規格に一貫性がある。

次に器種構成をみると、特徴的なのは脚付短頸壺の存在である。小型丸底壺が多数出土したが、いわゆる小型器台は伴わない。また、壺も単口縁壺のみであり二重口縁壺は出土していない。器種構成についてはこの二点が着目できる。

そして土器群全体を通して最も特徴的な点は、穿孔された個体の多さであろう。全6器種、21個体中、小型丸底壺・脚付短頸壺・高杯・器台の4器種、12個体に穿孔がみられ、その全てが焼成前穿孔である。中でも高杯の杯底部や、脚部まで貫通させる穿孔のあり方は稀少な事例である。

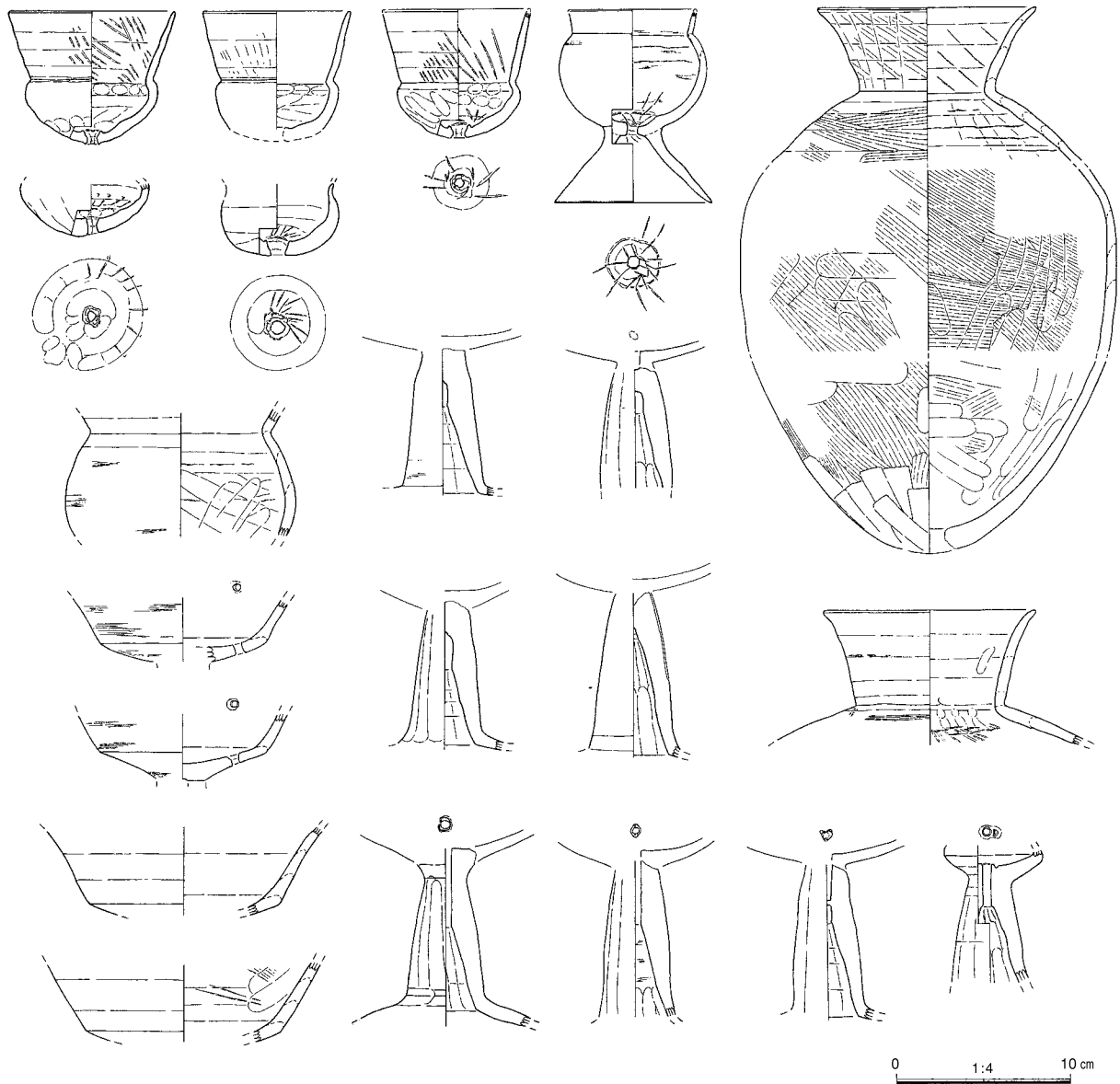


図80 奥山古墳出土土器

以上、奥山古墳出土土器の諸特徴についてあらためて概観した。多くの個体に焼成前穿孔が施されていることから、古墳祭祀のために一括製作された土器群であることは疑いえない。さらに、成形・調整技法や形態、規格、胎土、色調などを含めた土器全体のもつ印象が画一的であることは土器製作に関わった人数がごく少数であったことを推察させる。

次に奥山古墳出土土器の系譜を求めて九州南部の外に目を向けると、石棺と同じくその類例を宇土半島周辺に求められることをみる。

(2) 宇土半島周辺の古墳・集落出土土器

奥山古墳の石棺にみられる製作技術が天草諸島-宇土半島地域からもたらされたことは先述の通り確定的である。宇土半島基部は熊本県内でもっとも早く前方後円墳が築造され、前期を通して規模の大きな前方後円墳が築かれた地域である（宇土市史編纂委員会 2003）。また、土器研究史においては、熊本県下でも早い段階から古墳時代前・中期土器の様相が判明していた地域であり、九州中部における当該期の土器編年に関わる遺跡が多い。ここでは、奥山古墳出土土器を位置づける上で重要な潤野3号墳、沈目遺跡、塚原古墳群、上の原遺跡出土の土器を

比較対象として扱う。

潤野3号墳 宇土市立岡町字中潤野に所在し、全長39mの前方後円墳と推定されている。主体部である粘土槨は未調査であるが、その直上および前方部墳丘上で土器が出土した。主体部上からは、壺・小型丸底壺・高杯・器台または脚付壺と思われる個体が出土している（図81-1～15）。

小型丸底壺は頸部の締まりが弱く、口径が胴部最大径を上回る。器壁は非常に薄い。

高杯は全形を示す資料に欠けるものの、6個体以上が確認されている。杯部は屈曲部に明瞭な稜線をもち、口縁部に向けて浅く広く開く。脚柱部は棒状を呈し、裾部が強く屈曲して開く。図81-7・8は脚柱部内面上部に芯棒の痕跡を残し、奥山古墳出土高杯との関連性を窺わせる。また、8は脚柱部に穿孔が施されているが、孔の高さが不揃いな点が特徴的といえる。

図81-3～6は器種が特定できない。3は小ぶりの受部であり、器台や小型の高杯であろう。4～6はいずれも「ハ」の字に開く脚部片であり、器台や脚付壺が想定できる。

壺は中型の直口壺で、球形の胴部、「く」の字に強く屈曲する頸部、直線的に外傾する口縁部を有する。

小型丸底壺や高杯の形態面において奥山古墳出土土器と類似し、とりわけ高杯脚部の製作技法は共通する特徴として理解できる。高杯にみられる特徴的な穿孔も奥山古墳出土高杯との関

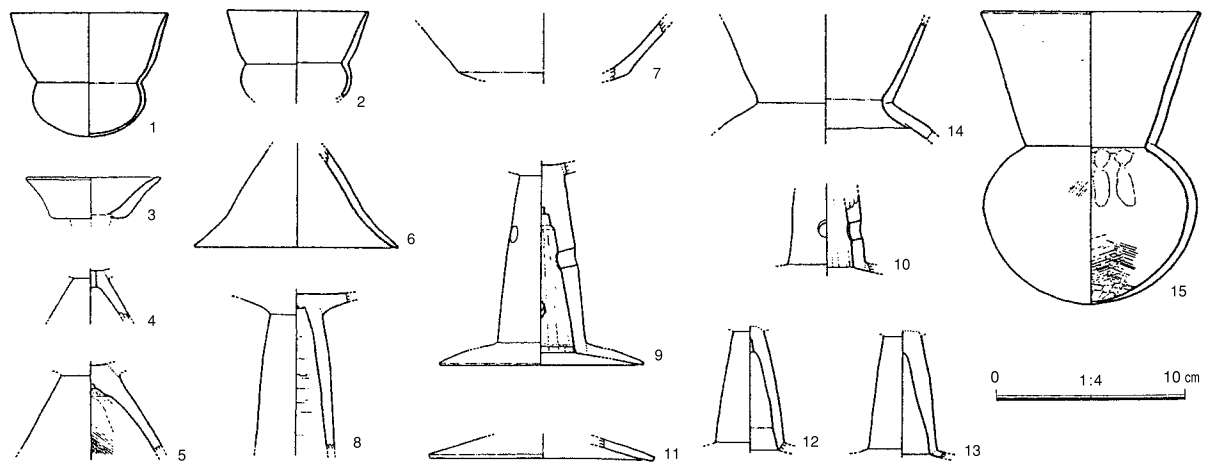


図81 潤野3号墳主体部直上出土土器

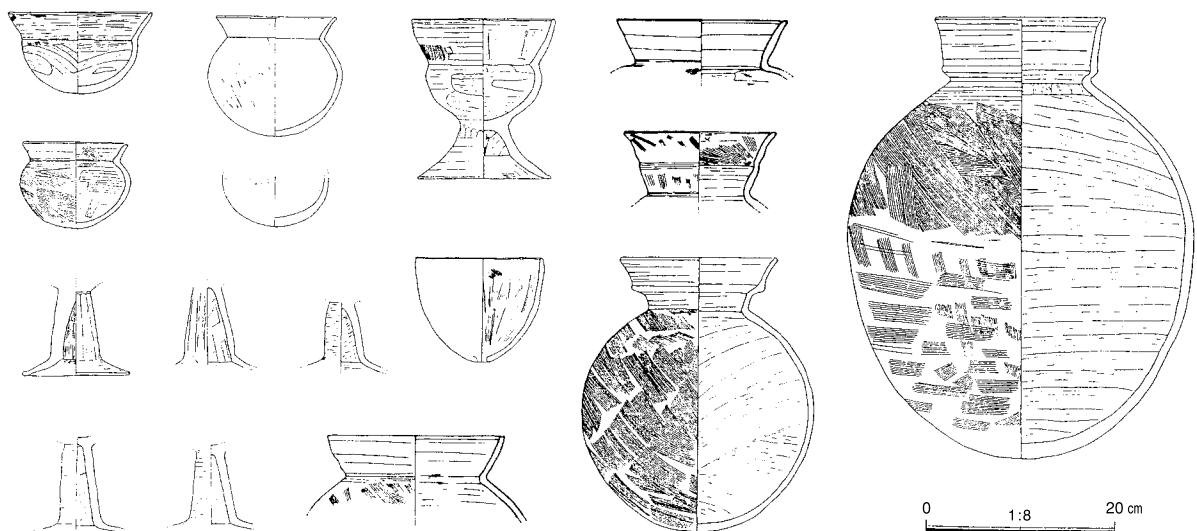


図82 沈目遺跡16号住居出土土器

係を示唆するものかもしれない。また、器台や脚付壺とみられる個体の脚部がいずれも高く長いことも、奥山古墳出土例に類似する要素として指摘できる。

沈目遺跡 遺跡は塚原台地の対岸に広がる舞ノ原台地の南端に所在する。出土土器は後述する塚原古墳群出土土器とともに野田拓司による編年の指標とされ、沈目Ⅰ期（4世紀中頃～後半）→沈目Ⅱ・塚原Ⅰ期（4世紀末～5世紀初頭）→塚原Ⅱ期（5世紀前半）という変遷が考えられている（野田1982）。16号住居から甕・壺・高杯・小型丸底壺・脚付壺・有孔鉢（甑）が出土している（図82）。

小型丸底壺は頸部が締まらず口径が胴部最大径を上回るものと、頸部が締まり胴部径が口径を上回るものの2形態が存在する。器面調整はケズリ・ハケメ・ナデ調整である。

脚付壺の上部形態は口径が胴部最大径を上回り、頸部の締まりが強い。また脚台は高く「ハ」の字に開き、器面調整はケズリ・ハケメ・ナデである。

高杯はいずれも脚柱部が棒状を呈し、脚裾が強く屈曲する。脚柱部内面が削られる個体と削られない個体がある。高杯は奥山古墳出土例と形態的に似ており、脚柱部内面を削らない個体が見受けられることから製作技法面でも類似性が認められる。

小型丸底壺の中には奥山古墳例のように頸部の締まりが弱いものも存在するが、脚付壺の壺部分の形態がもっとも奥山古墳例に近い。脚台が高い点も奥山古墳の台付短頸壺と共通する特徴といえる。

塚原古墳群 下益城郡城南町字塚原に所在し、九州山地から宇土半島の基部に注ぐ緑川の支流、浜戸川の南岸に位置する塚原台地上に立地する。図83には40号・42号・49号方形周溝墓の出土土器を挙げている。

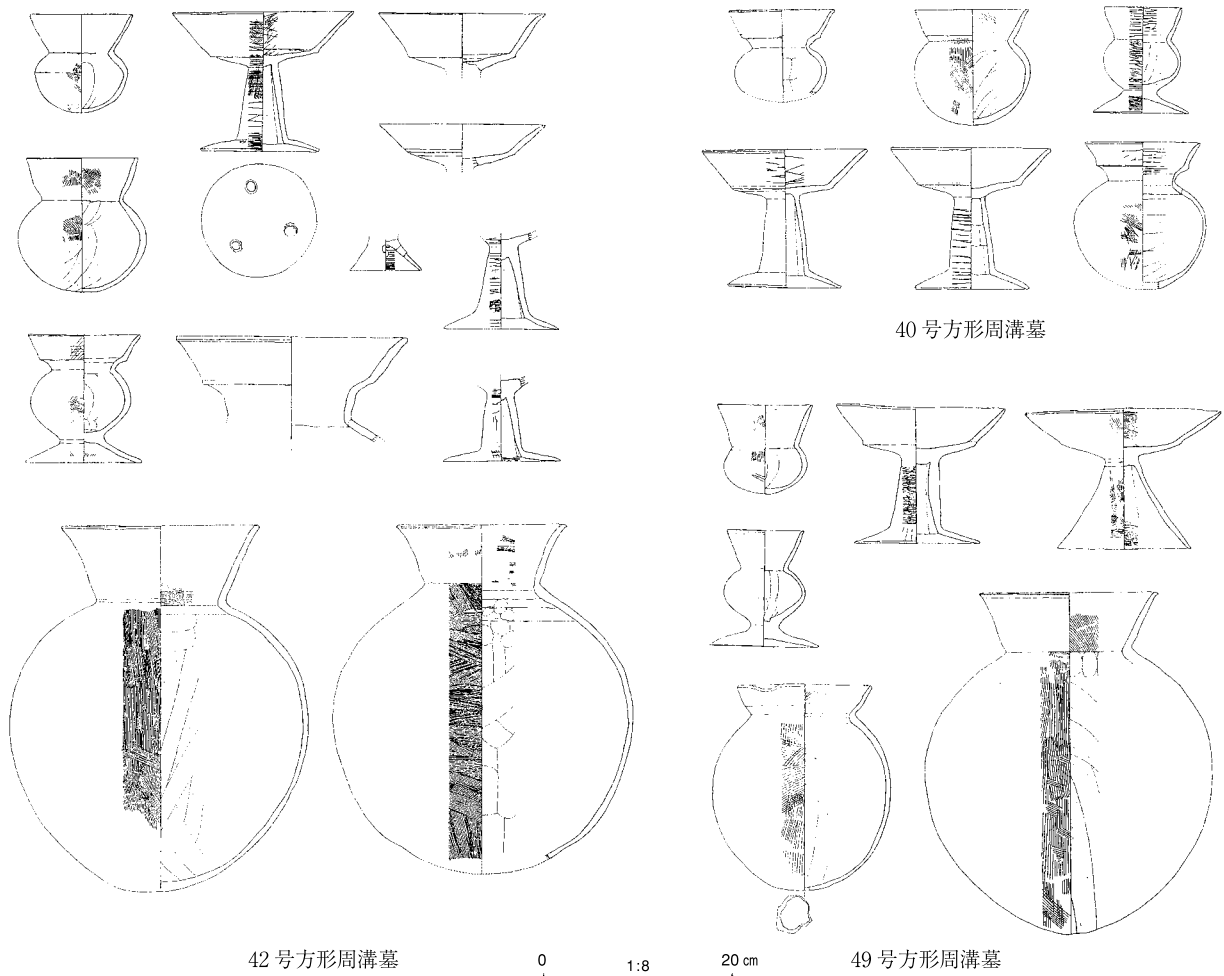


図83 塚原古墳群出土土器

高杯の杯部は総じて浅く、稜線を有して大きく外傾する。脚柱部は細く、裾部が強く屈折する。大半の個体は、ケズリによって脚柱部の器壁を薄く均等な厚みに仕上げられている。杯部と脚部の接合方法に充填法を用いて製作された個体が多い。

小型丸底壺には直口型と二重口縁型の二者があり、いずれも頸部は強く締まる。直口型は口径が胴部最大径と同等、または胴部最大径を下回る個体が多い。器面調整はハケメ・ナデを主体とし、胴部内面にヘラケズリが施される。

脚付壺は脚部が低く直線的に開く個体が大半を占める。上半部の形態は二重口縁もみられ、バラエティーに富んでいる。

壺は二重口縁壺と単口縁壺が出土しているが、古墳群全体では二重口縁壺が圧倒的に多い。単口縁壺は直線的に開く口縁部や、「く」の字に屈曲する頸部が奥山古墳出土例に似る。胴部形態は丸く張るものとやや縦長の2種がみられる。器面調整は、外面および口縁部内面がハケメ仕上げであるが、胴部内面がヘラケズリされている点において奥山古墳例とは異なる。また、口縁端部を丸くおさめず、外側につまみ出す、あるいはナデ凹ませる点も、奥山古墳例との相違点と言えよう。

塚原古墳群の供献土器には脚付壺が一定の割合で存在しており、器種構成の一端を担っていたものと捉えられる。また、壺の主体を占めるのは二重口縁壺であり、単口縁壺は少数にとどまっている。

奥山古墳出土土器と比較すると、高杯は形態面で類似するが、接合方法や脚部内面の調整といった製作技法の点で大きな違いが認められる。同じく単口縁壺も形態的には類似するが製作技法上の相違点が多い。小型丸底壺や脚付壺には器形にも差異がみられる。

上の原遺跡 上の原遺跡は塚原台地上に位置し、塚原古墳群の東南側に隣接している。土器

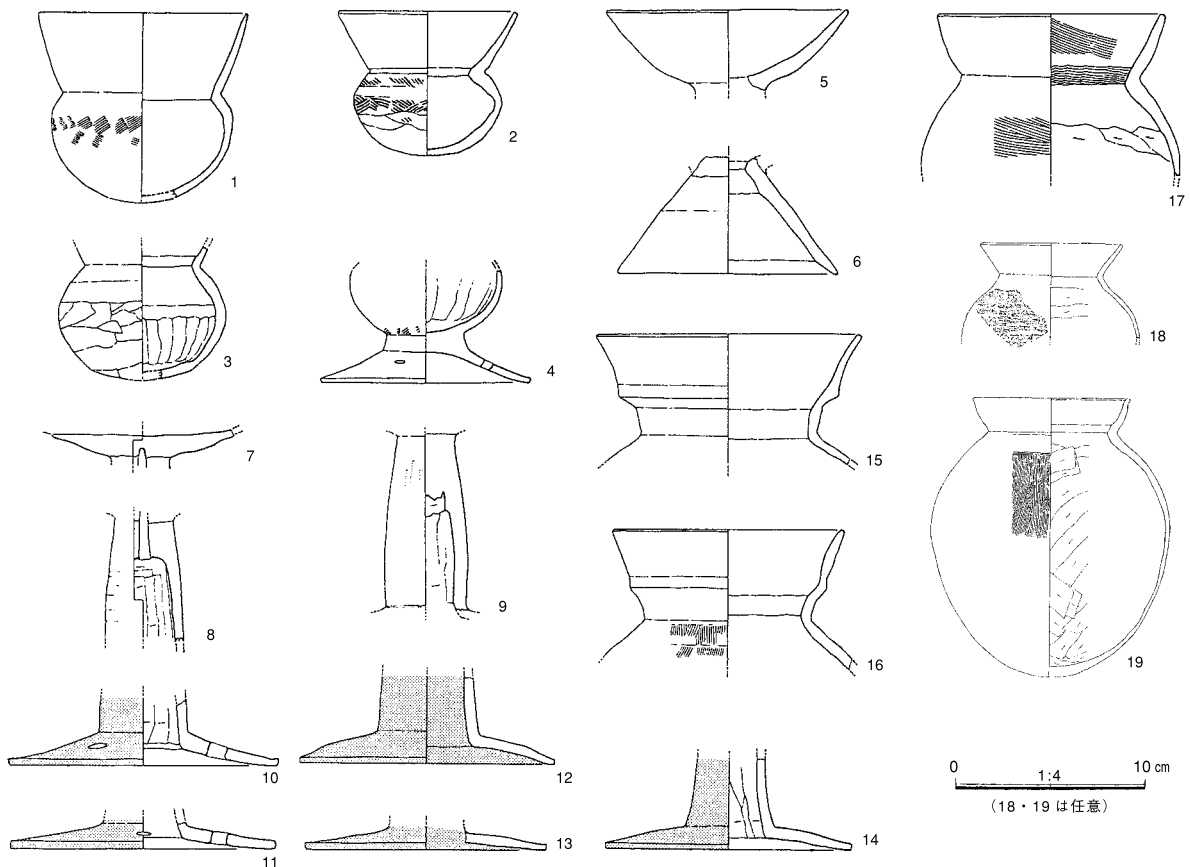


図84 上の原遺跡 37号住居出土土器

様相は塚原古墳群と同様であるが、ここでは37号住居出土土器についてみていきたい。

甕・二重口縁壺・広口壺・小型丸底壺・高杯・小型器台が出土している(図84)。

小型丸底壺は口縁部が直線的に開き、頸部の締まりが強い。口縁部径が胴部径を上回り、ハケメ、ナデ、ケズリによって器面調整が行われる。

高杯は破片資料しかなく、杯部上半の形状はわからない。脚柱部は細く、裾部が強く屈折して開く。図84-8・9は脚柱上部が充実するものであり、図84-7・8の脚部内面には芯材痕跡、あるいは穿孔が確認できる。脚部内面はヘラケズリされている。また内外面に赤色顔料を塗布された個体が多い。

台付壺は胴部が球形で、脚部は低く直線的に開く。

脚部内面に芯材痕跡や穿孔がある高杯は、奥山古墳出土高杯との関係を窺わせる。ただし、ケズリによって内面調整されており、全く同じ製作技法を用いて作られているわけではないことには留意しなければならない。小型丸底壺や脚付壺の器形の面では奥山古墳例との間に差異がみられる。

小結 以上、奥山古墳出土土器と宇土半島基部の古墳・集落出土土器を比較した結果、潤野3号墳出土土器との間に最も多くの共通性が認められた。小型丸底壺の口縁部が発達する段階にあることから、前期の中でもより中期に近い時期と考えられ、野田編年の沈目Ⅰ期に近い様相を呈する。以上の点をふまえ、奥山古墳出土土器は前期後葉に位置づけたい。

奥山古墳出土の壺は形態的な面では宇土半島基部地域の単口縁壺に類似するものである。しかし、成形・調整技法の面では相違点も指摘できる。まず、前者が口縁端部を丸くおさめているのに対し、後者は端部にナデによる面を形成して基本的に丸みはもたせない。また、最も大きな差違は内面の調整技法である。前者にはケズリがみられず外面同様ハケメ・ナデで仕上げるのに対し、後者はケズリ調整である。奥山古墳出土土器は高杯脚部内面にもケズリは施されないことから、ケズリ調整がない点こそが他地域の土師器と比較した上での特徴といえる。

(3) 宇土半島基部地域以北の同時期資料との比較

奥山古墳出土土器の系譜を宇土半島基部地域に求めたが、次にそれ以外の地域との関係について検討したい。そこで、前期土器編年案が提示されている以下の2地域における前期後葉の土器と奥山古墳出土土器を比較していく。

熊本県北部：菊池川流域 高谷和生は熊本県北部における弥生時代末～古墳時代前期土器の編年にあたり、柳町遺跡出土土器を様相1～7に分類して、柳町Ⅰ期(様相2)～Ⅴ期(様相6)に区分した(高谷2001)。柳町Ⅳ期が前期中葉、Ⅴ期が前期後葉に比定されており、壺J・壺K・高杯Cに奥山古墳例との形態的な類似性を看取できる。しかし、壺J・Kは内面ヘラケズリであり、高杯Cも脚柱部内面上位までケズリが及ぶ。奥山古墳出土土器との間に製作技法まで含めた共通性を見いだすことができない。また脚付壺は少量存在するが、低脚であるなど形態的に異なる。

当地域においては檀佳克も北無田遺跡出土の前期土器を編年し、Ⅰ～Ⅲ期に区分した(檀2003)。Ⅲ期には新古の2相があり、新相が沈目Ⅰ期併行とされている。Ⅲ期新相の小型丸底壺の形態は奥山古墳出土土器に似るが、ミガキやケズリが施される点で異なる。高杯の接合方法が粘土塊充填法であることも併せると、やはり双方の土器は製作技法面での違いが大きいといえるであろう。

九州北部：玄界灘沿岸地域 九州北部における土師器編年研究は1960年代以降活発に行われており、近年には久住猛雄によって福岡平野部を中心とした玄界灘沿岸地域の精緻な土器編年が確立された(久住1999)。また、宮田浩之も系譜関係をふまえた九州北部古式土師器編年案

を提示している（宮田 2006）。

奥山古墳の小型丸底壺は久住編年ⅡC～ⅢA期・宮田編年2-2式（布留式中段階）に、高杯は久住編年ⅢA期・宮田編年2-3式（布留式新段階）の布留式系高杯に形態の類似性を見いだせ、奥山古墳出土土器群の時期を前期後葉と位置づけるにあたり大きな齟齬はないであろう。

久住は、小型丸底壺にはⅡC期以降に最終調整のヨコミガキを省略化するものが現れ、以後器面調整の簡略化・粗雑化が進むとしている。しかし、それでも当該地域ではⅢA期にもミガキ調整の個体が大半を占めることに変わりはない。器壁も非常に薄く作られ、奥山古墳出土例との間に強い関係性は見出しがたい。

一方、布留系に類似する高杯の中にはミガキを省略し、脚柱状部上部が中実であったり、杯部底部が著しく厚いものが存在しており、それらは畿内伝統的V様式の系統を引いた“布留系高杯の模倣品”であることを指摘している（久住 1999, p.103）。脚柱部上部が中実であることも、ケズリが施されないことと併せて奥山古墳出土高杯の特徴であり、久住の指摘は示唆に富んだ内容である。

また、九州北部では土器全体に占める脚付壺の割合が非常に低い。これは北部九州においては小型器台がⅢA期以降も存続することと密接に関わっているであろう。この点に関しては次節で述べる。

小 結 古墳時代前期後葉には、菊池川流域・玄界灘沿岸地域ともに小型丸底壺は最終調整がミガキである個体、高杯は脚柱部内面上位までケズリが施される個体が圧倒的に多い。製作技法が異なることから、奥山古墳出土土器の系譜を両地域の土器に求めることは難しく、宇土半島基部との関連性がより強いことを裏付ける結果となった。

3. 薩摩半島西・南部の古墳時代前期土器

(1) 古墳時代前期の在地土器

成川式土器のうち、古墳時代前期に位置づけられている東原式土器は良好な一括資料に乏しく、当該時期の外来系土器が少量しか確認されていないこともあって未だ実態が不明瞭である。そのような状況ではあるが高杯・小型丸底壺・脚付壺・壺に限って奥山古墳の周辺地域における前期の在地土器様相を整理していきたい。

高 杯 日置市辻堂原 26 号住居出土遺物は新古の 2 相に分類でき、古相を示す一群には立ち上がりが短く強く外反し、杯部が浅めの大型高杯が含まれる。頸部内面を削り残す布留系甕が伴うことから、この高杯は布留式古・中段階に位置づけられる。この高杯には脚部が中空のものと脚柱上部が中実のもの 2 種類（図 85 - 1・2）があり、前者は薩摩川内市外川江遺跡・麦之浦貝塚・霧島市妻山元遺跡、後者は指宿市成川遺跡・枕崎市松之尾遺跡で出土していることから、脚部の違いは地域差を示す可能性がある。また、これとは別に立ち上がりが長く強く外反し、杯部が深い大型高杯も存在する。脚部は完形資料によれば、脚柱状部が中実で裾部が短く開く（図 85 - 3）。南さつま市上水流遺跡 10 号住居で TK208 型式の須恵器と共伴するのが下限と捉えられる。

このように前期の在地高杯は口径 25cm を超える大型のものであるが、先に挙げた 2 型式には若干の時期差が窺えることから、同一系譜上の先後関係として捉えておきたい。さらに、確実な時期は不明であるが、松ノ尾遺跡や上水流遺跡では杯部が屈曲して直線的に立ち上がる小型の高杯（図 85 - 4）が少量ながら出土している。脚部形態は畿内系の小型高杯や小型器台に

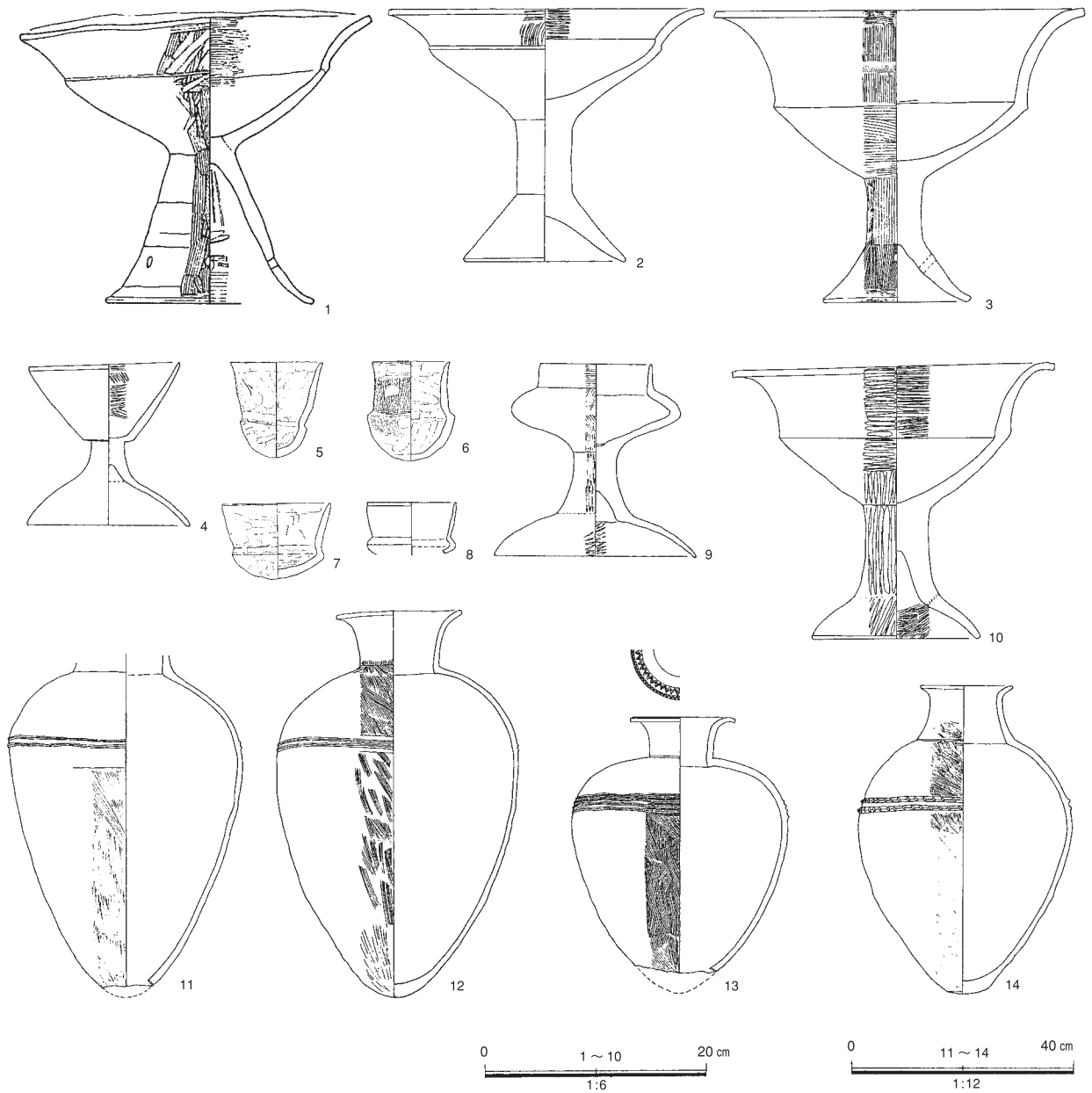


図85 九州南部の古墳時代前期の在出土器

類するものであり、この高杯も前期の範疇で捉えておく。

小型丸底壺 小型精製器種の中で九州南部に唯一定着した器種である。しかしながら、中村直子が指摘している通り在地化した小型丸底壺はバリエーションが多い(中村1997)。また、胎土は粗く器壁は厚いものが多く、ハケメ・ナデ調整で仕上げられる(図85-5~7)。形態の違いが時期差・地域差をどのように反映しているのかを明らかにするには、良好な一括資料の増加を待たなければならない。また、短頸で胴部が強く張る直口壺が萩原遺跡1号住居において小型器台と共伴しており、直口壺と小型器台が分布域を同じくしていることが指摘されている(中村1997)。この直口壺は精製胎土のものが多いが、最終調整がミガキからハケメ・ナデへと粗雑化したものも多い。また、口縁端部に波状文や条線を施すもの(図85-8)もある。吉本正典によれば直口壺は薄手でミガキ調整であり、「日向における庄内式併行期のメルクマールとなりうる」(吉本1993)資料であるという。しかし、調整の粗雑化が時間的な変化であれば、鹿児島県域でのこの直口壺の下限は少なくとも古墳時代前期に下るであろう。

脚付壺 松之尾遺跡で高杯と同じ脚部をもつ個体が少数確認されている。中でも図85-9は

在地高杯の脚部に胴張直口壺を付した形態を呈し、前期に属することは間違いない。他の個体も脚部形態から同じことがいえる。

壺 松之尾遺跡G-4区では肩部が張る多条突帯壺が杯部の深い在地高杯と共伴している(図85-10・11)。壺の口縁部は図85-12のように頸部が強く外反するものと考えられる。中には口縁端部が下垂するほど反り返るもの(図85-13)があり、波状文が施される場合が多い。波状文をもつ型式については、同じく有文の胴張直口壺との関係が想定されることから前期前葉を中心とした時期に位置づけたい。

須恵器受容期以後は図85-14のような頸部付近に段を持ち、立ち上がりが内傾して一度口が窄まり、そこから端部に向けて外反する型式となり、その後幅広突帯をもつ型式へと変遷していくものと考えられる。

以上のように、奥山古墳出土土器には薩摩半島西・南部の古墳時代前期の在地土器様相に通じるものが読み取れず、土器以外の古墳の情報とともに他地域からもたらされたものと考えるのが妥当であろう。

(2) 九州南部の外来系土器の様相

これまでに九州南部で出土した庄内式・布留式併行期の外来系土器はごく僅かしかない。外来系土器の時期や分布的特徴はすでに中村によって検討されている(中村1997)。

中村の集成後、大隅半島側では鹿屋市に所在する岡崎20号墳で前期末～中期初頭に位置づけられる高杯や小型丸底壺を含めた一括資料が確認された(橋本他2008)。また、薩摩半島側では日置市吹上町大園A遺跡から集落内での出土が確認されている。ここでは大園A遺跡出土土器をみていきたい。

大園A遺跡 鹿児島県日置市吹上町に所在し、市域を西流する伊作川に沿って小規模ながら広がる水田地帯に立地している。その12号住居から、甕・壺・小型丸底壺・高杯が出土した(図86-1～8)。

高杯1の杯部は径の小さな底部から稜をもち口縁部に向かって直線的に開く。脚柱部は棒状を呈し、裾部で強く屈曲する。脚柱部上部に中実部分があり、内外面がミガキ調整である。

小型丸底壺は頸部が強く屈曲する。破片ではあるが、口径が胴部最大径を上回るものと考えられる。甕には、布留系の甕3・4が在地的な甕5とともに認められる。

また、当遺跡では耕作土中からも小型丸底壺や器台または脚付壺9・10が出土した。小型丸底壺9には内外面ともミガキが施されており、10は、奥山古墳から出土した器台または脚付壺とみられる個体に似た形態を呈している。

高杯1は脚柱部上部が中実であり、内外面には丁寧なヨコミガキがみられ、その特徴は久住編年のII B期に位置づけられた畿内伝統的V様式系高杯に類似する。そうであれば時間的に奥

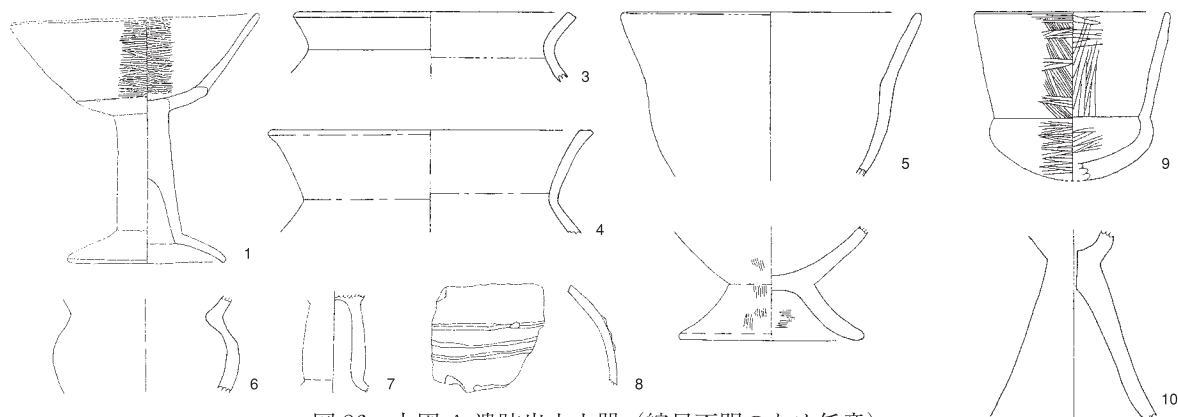


図86 大園A遺跡出土土器(縮尺不明のため任意)

山古墳出土高杯に先行する資料となり、その位置づけを考える上で非常に重要である。

小型丸底壺は奥山古墳例と同時期と捉えられる。鹿児島県下において畿内系土器がセット関係を保って出土した事例はこれまで霧島市国分所在の城山山頂遺跡のみであり、薩摩半島西岸地域では他にない。

小型器台 最後に九州南部での小型器台の様相について触れておく。

小型器台は庄内式・布留式段階のものを合わせても非常に少なく、当地域では広範囲に拡散した形跡が認められない。宇土半島基部地域以南では、宇土市上松山遺跡2号住居などのように小型器台が数個体出土する遺構は珍しく、前期初頭から中葉にかけても散見される程度であり、前期後葉以降にはほとんど認められなくなる。前節までに各地域の土器様相を整理してきた結果、九州北部から南に向かうにつれて小型器台が減少するという地理的勾配があるものとして理解することができる。それに反する現象として、とくに宇土半島基部地域に前期後葉以降、脚付壺が多くみられるのであろう。奥山古墳で小型器台ではなく脚付壺が採用されていることは、九州北部や菊池川流域との関わりよりも、宇土半島基部地域との関わりが深いことを示しているのではないだろうか。

4. 奥山古墳出土土器の意義

奥山古墳出土土器には形態的・技法的な面を含めて在地土器とのつながりを見いだせず、宇土半島基部地域にもっとも強い関連性を見いだせることから、石棺製作技法と同様に宇土半島基部に土器の系譜を求めた。また、その時期を古墳時代前期後葉に位置づけた。

ただ、奥山古墳の土器に彼地では一般的なケズリ技法が欠如していることをどのように理解すればよいのか。在地土器の製作者が作ったとは想定できず、葬送儀礼に伴って石棺製作工人らとともに土器製作者が移動してきた可能性が高い。また、儀礼のための土器の一括製作がされ、胎土や寸法など土器が持つ諸要素が画一的であることは一人、二人といった小人数での土器製作であったことを窺わせる。製作者が多ければバリエーション豊かな土器が共伴することとなるであろうが、移動してきた土器製作者は少数であった。加えて奥山古墳の葬送儀礼にあたって移動してきた土器製作者がケズリ技法を用いずに布留系土器群を製作する人物であったために、ケズリが全くみられない土器群が成立したと考えるのが最も合理的であろう。

九州南部において古墳時代前期の数少ない外来系土器の新資料となり、石棺製作技法と併せて葬送儀礼に際しての首長間交流の一側面を明らかにした点に奥山古墳出土土器の意義を見いだせるであろう。

謝辞

本稿をなすに当たり、鹿児島大学の本田道輝先生には未報告である答石遺跡・万之瀬川採集資料の使用許可をいただいた。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 庄内式土器研究会 pp.62-143
- 高谷和生 2001「第2節 柳町遺跡出土の弥生時代終末から古墳時代前期土器について」『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告 200 熊本県教育委員会 pp.84-126
- 檀 佳克 2003「第Ⅳ章 分類と編年」『北無田遺跡』植木町文化財調査報告書 16 植木町教育委員会

pp.170-187

- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』6 鹿児島大学法文学部考古学研究室 pp.57-75
 1997「南限の古式土師器」『人類史研究』9 人類史研究会 pp.137-147
- 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開－特に中部九州における編年私案－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念古文化論集刊行会 pp.947-987
- 橋本達也 2005「加世田市「六堂会」古墳の調査」『鹿児島県考古学会研究発表資料』鹿児島県考古学会 pp.6-7
 2006a「鹿児島のフィールド研究－列島西南端の古墳と地域間交流－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』13 鹿児島大学総合研究博物館 pp.1-6
 2006b「列島西南端の古墳と地域間交流－南さつま市加世田・奥山（六堂会）古墳発掘調査－」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』日本考古学協会 pp.116-119
- 宮田浩之 2006「北部九州地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター pp.257-282

【報告書等】

- 宇土市教育委員会 2001『考古』新宇土市史基礎資料9
- 宇土市史編纂委員会 2002『新宇土市史 資料編第2巻 考古資料 金石文 建造物 民俗』
- 宇土市史編纂委員会 2003『新宇土市史 通史編第1巻 自然・原始古代』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書121
- 鹿児島県教育委員会 1984『外川江遺跡 横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書30
- 熊本県教育委員会 1974『沈目』熊本県文化財調査報告13
- 熊本県教育委員会 1985『上の原遺跡』熊本県文化財調査報告73
- 国分市教育委員会 1985『妻山元遺跡』国分市埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 城南町教育委員会 1986『塚原古墳群発掘調査報告書』城南町文化財調査報告5
- 川内市土地開発公社 1987『麦之浦貝塚』
- 橋本達也・藤井大祐・甲斐康大 2008『大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.3 鹿児島大学総合研究博物館
- 吹上町教育委員会 1977『辻堂原遺跡』吹上中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 吹上町教育委員会 2005『地頭用遺跡 高柳A・B遺跡 五反田A・B遺跡 大園A遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書16
- 枕崎市教育委員会 1981『松之尾遺跡』枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1
- 八代市教育委員会 2008『上日置女夫木遺跡』八代市文化財調査報告書37

【図版出典】

- 図80：本報告書
- 図81：潤野3号墳（宇土市教育委員会2001）
- 図82：沈目遺跡16号住居（熊本県教育委員会1974）
- 図83：塚原40号・42号・49号方形周溝墓（城南町教育委員会1986）
- 図84：上の原遺跡37号住居（熊本県教育委員会1985）
- 図85－1：妻山元遺跡2号土坑（国分市教育委員会1985）、2～4・8～14：松之尾遺跡（枕崎市教育委員会1981）、5：答石遺跡（未報告資料・鹿児島大学考古学研究室所蔵）、6・7：万之瀬川採集資料（未報告資料・本田道輝氏所蔵）
- 図86：大園A遺跡12号住居（吹上町教育委員会2005）

第3章 薩摩地域の古墳時代墓制と地域間交流

橋本 達也

1. はじめに

鹿児島県域は日本列島の古墳分布南限の境界領域として、汎列島の共通圏の形成過程における地域社会の多様性とその実態を把握し、古墳の築造が象徴する社会的意義を解明する上で重要なフィールドである。

鹿児島における古墳の研究では、その資料数を反映して大隅地域が主体となることは否めないが、薩摩地域においても古墳は確認されている。奥山古墳の発掘調査では薩摩地域における数少ない古墳の一端を明らかにできた。本稿はこの古墳の調査成果をもとに薩摩地域における古墳時代社会の様相とその意義について考察を行おうとするものである。ここでは、薩摩地域に展開するいくつかの墓制を概観しつつその特質を明らかにし、地域間交流の視点から大隅・薩摩の地域的特性を抽出しつつ、社会基盤・集団関係・交流ネットワークの様相とその偏差の問題に迫りたいと考えている。なお、個々の古墳の情報については本書第1部第3章2節も参照いただきたい。

2. 薩摩の古墳時代墓制と社会

(1) 石棺墓としての奥山古墳の被葬者像

今回、あらためて奥山古墳の石棺の実態を明確にした。本古墳の周辺では石棺墓の系譜は確認できない。また、それを裏付けるように石棺構築法・石材がともに天草地域に由来することが確認された。奥山古墳の被葬者は天草地域の首長層と密接な関係をもつことが想定できる。

奥山古墳で出土した土器も在地の成川式土器様式のものではない。古墳に伴う祭祀土器として移入されたもので、その故地には熊本県宇土半島基部地域が想定される（第3部第2章）。

奥山古墳の所在する加世田平野は縄文時代以降多くの遺跡が密集する鹿児島県域では遺跡密度の高い地域であり、決して無人の荒野に古墳のみが築かれたのではなく、古墳時代においても近在にいくつもの集落があるなかで奥山古墳は出現している。

また、石棺は純粋に天草地域の石材のみで造られているわけではなく、在地産の可能性のある石材を両小口の要所に配している。必ずしも天草地域の石棺そのものが造られたわけではないことにも注意が必要である。そこから、奥山古墳被葬者には二つの像が考え得るであろう。

第一には、石棺石材・技術という人と素材の大掛かりな移動を伴い、土器を用いた祭祀まで移入していることを評価すれば、その被葬者は天草地域に出自をもち、天草地域を中心拠点とする交流によって加世田平野で社会的地位を獲得した有力首長がまず描かれよう。

第二には、石棺の要の石材に在地産石材を用いていることを評価すれば、天草地域の首長層と密接なネットワークを形成し、頻繁な地域間交流を行い勢力を拡大した在地首長が想定される。どちらが有力であるかは、さらにいくつかの検討を加えた上で最後に言及したい。

(2) 薩摩地域の古墳

奥山古墳は薩摩地域の墓制のなかでいかに捉えられるかをみておく。薩摩地域では広大な範

圃に古墳と呼べるものは数少ない。現状で前方後円墳と認定できる古墳はなく、九州西南部での前方後円墳の南限は熊本県の八代平野・人吉盆地である。まずは薩摩地域の古墳について概観しよう。

前期古墳 確実な前期古墳は阿久根市鳥越古墳であり、薩摩川内市船間島古墳も同様に想定する。鳥越古墳は入り江内に形成された低湿地に突き出た尾根上に位置し、長大型の竪穴式石槨が検出されたが、削平によって検出時には墳丘が失われており、また出土遺物がなく前期のなかでの細分はできない。川内川河口に面した独立丘陵上に築造された直径17mの円墳とみられる船間島古墳はこれまでも主体部が竪穴式石室（石槨）の可能性が指摘されているが（池畑1990, pp.338-339）、筆者の観察では側壁壁体が倒れた長大型の竪穴式石槨で、前期古墳であると推定する。

ほか、川内平野内の独立丘陵上に位置する薩摩川内市「端陵」が墳長54mの前方後円墳で、纏向型の可能性も指摘される（池畑1990, pp.344-345）。しかし、現状では本来の墳丘が保たれているとはみえず、表面観察のみでは保留せざるを得ない。遺物の確認もなく、時期も不明である。頂部に板石があり主体部の部材とも推定は可能であるが、由来が不明のため確定は出来ない。

中期古墳 鹿児島北端の島、長島の沿岸部に位置し、東シナ海を見下ろす長島町小浜崎1号墳・2号墳は昭和39・40年に発掘調査されており、1号墳は正方形に近い石室、2号墳は正方形に近い石棺状石室とされている。調査時には羨道部は確認されておらず、特異な在地墓制であり2号墳は石障系石室の前段階の埋葬施設と位置づけられている（池水1971, p.23）。しかしながら、これには遺存状態の問題があり、本来小型の羨道が伴っていたと考えた方が理解しやすく、平面形態からすれば横穴系墓制を想定する余地がある。再検討が必要であろう。2号墳の直径は15mと推定されている。

薩摩川内市の丘陵上で2008年、板石を小口積する石室が確認された。2009年度調査予定で詳細は現状で不明であるが、報道による2.4×1.3mという平面形態からすれば竪穴系横口式石室である可能性がある。

北薩地域の内陸部で古墳と呼べるものとして湧水町北方3号墳がある。直径15～18mで板石積石棺墓の可能性のある内部主体をもち、49本もの鉄鏃が出土している。長頸鏃出現以前の中期中葉に位置づけられる。

南薩の指宿市の低地には日本列島最南端の古墳、直径17.5m、周溝幅約2mの弥次ヶ湯古墳がある。出土土器は成川式土器の破片が主体であるため厳密な位置づけは難しいが、おおむね中期後半段階とみてよい。

後期古墳 薩摩北端の島、長島では横穴式石室を持つ古墳が築造されている。ここは薩摩地域というよりは天草諸島としての位置づけが相応しい。長島から本土へ渡ったところに阿久根市脇本古墳群があり、横穴式石室が2基確認されている。九州西岸最南端の後期横穴式石室で長島の石室と連動するものとみられる。

その他、時期は不明であるが、おそらく奥山古墳と同様に前期後葉～中期前半で理解されるものに薩摩川内市安養寺丘古墳がある。川内川下流で川に面して形成された低湿地に突き出た丘陵の頂部に位置する箱式石棺である。立地としても奥山古墳との共通性がうかがえ、遺存状態が悪く墳丘の推定復元が困難であるが、古墳の主体部であるとみて良さそうである。

薩摩地域において、古墳と呼べるものはこの程度である。ほとんどが沿岸地域で点在しており、奥山古墳とともに鳥越古墳・船間島古墳・安養寺丘古墳は、入り江状の港の好適地に面する立地にある。これらは前期古墳である可能性が高く、古墳築造の背景に海を介する首長層ネットワークが大きな役割を果たしていると考えられる。

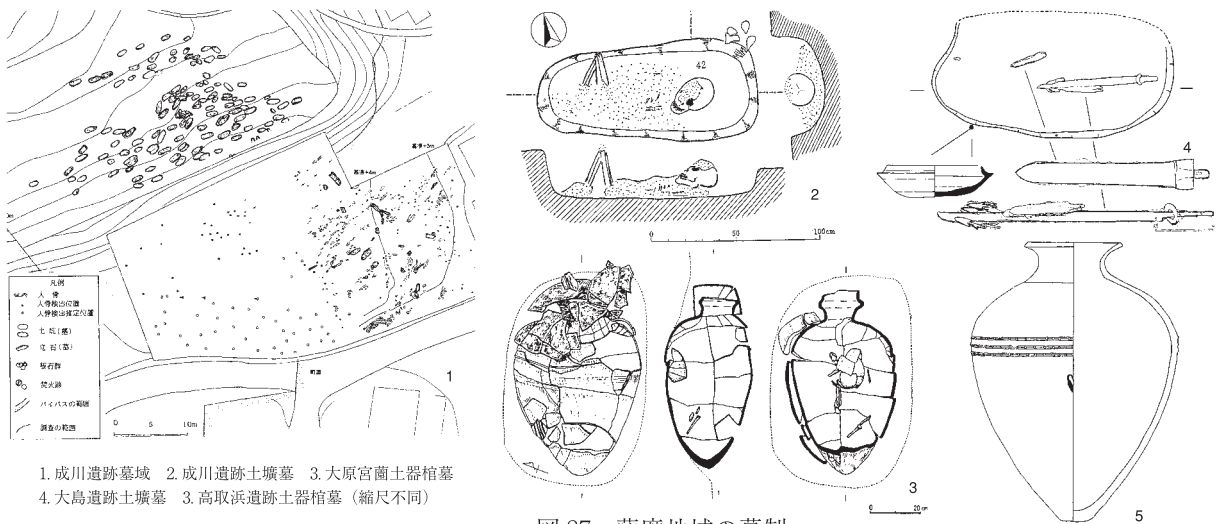


図 87 薩摩地域の墓制

薩摩地域のなかでは川内平野が他地域よりもやや古墳が多い。これは川内平野が薩摩最大の平野であり、その生産基盤を背景とするものであろう。ただ、今後新たに古墳が発見される可能性を含めても、各時期の古墳が点在するような状況は変わらず、首長系譜を形成するような継続的な築造は確認できない。

(3) 薩摩地域の古墳時代墓制

板石積石棺墓 薩摩地域ではその北部において、在地墓制として従来、地下式板石積石室と呼称されてきた墓制が展開する。筆者は、この墓制が地下式や石室は不適切であるとみて、板石積石棺墓と呼ぶが、川内平野以北において沿岸部から内陸盆地地帯に至るまで広く分布する墓制である。板石積石棺墓の詳細は第3部第1章に譲るが、明確な墳丘を持たず、また副葬品も少なく、密集して群をなすことが多く、基本的には首長墓とは位置づけがたい。

立石土壙墓、土壙墓・土器棺墓 薩摩地域では早くには立石土壙墓が在地墓制として位置づけられてきた(小田 1966・乙益 1970・上村 1984)。しかし、近年では立石に伴う遺物は弥生時代中期後半に位置づけられ、立石土壙墓は古墳時代の墓制ではないと考えられるようになっていた(池畑 1992,pp.23-25・中村 2000,pp.125-128)。ところが、2007年度の指宿市南摺ヶ浜遺跡の発掘調査において弥生時代終末期を中心とする立石状の大型の石を伴う土壙墓群が確認され、この時期にも板石を伴う墓群の存在することが明らかになった。南摺ヶ浜遺跡では古墳時代中期中葉～後葉の遺物も出土し、墓域として利用されているが、この時期までは立石が伴わない。

南薩地域では指宿市山川町成川遺跡や枕崎市松之尾遺跡で確認されているように、土壙墓および土器棺墓が一体の墓域を形成し、弥生時代終末期頃から古墳時代後期まで存在する。薩摩川内市大島遺跡ではTK209型式段階の剣や鍬を副葬する土壙墓も確認されており、薩摩地域は土壙墓が主体的な古墳時代墓制であると考えられる。

なお、土器棺墓だけが確認されている遺跡に南九州市頰娃町高取浜遺跡、甑島の薩摩川内市下甑大原宮菌遺跡がある。土壙墓は発掘調査によらなければ一般的に確認できないが、土器棺墓は発掘調査でなくとも確認される場合がある。よって土器棺墓の分布がある程度、土壙墓を含む墓域の存在を推定させうるものであり、より広い範囲に存在するものとみられる。なお、大隅半島西部の鹿屋市中野西遺跡には古墳時代中期の土壙墓がある。また錦江町城元遺跡でも詳細が明らかでないが土器棺墓の存在する可能性が推測される。

南摺ヶ浜、松之尾、高取浜、大原宮菌の各遺跡は海に面した立地で、南摺ヶ浜以外は砂丘である。

必ずしもではないが、墓域が海と結びついていることも特徴である⁽¹⁾。

(4) 古墳と首長系譜

薩摩地域での古墳にはいくつかの特徴がある。一つには、前期古墳は海を介した地域間交流の結節点、港と考えられる場所に近在して確認されている。阿久根・川内・加世田はいずれも九州西岸ルート上の湾岸拠点である。これらの古墳が交易など地域間交流を背景として蓄積された財と情報を背景として築造に至ったことが想定される。

二つに、いずれの古墳も周辺では前後に連続する古墳が確認されておらず、一代の首長墓のみで、首長系譜が形成されていないことである。いくつかの古墳が確認できる川内平野においても首長系譜とよべるものは形成されていない。

そして三つに、前方後円墳の不在である。その存在の可能性は否定できないが、仮に今後発見されたとしても首長系譜を形成するようなものではないであろう。

すなわち、古墳という文化・情報は古墳時代前期に薩摩半島南部にまで達しているものの、そのあり方は拠点地域において一過的な単独墳が形成されるにとどまる。このような様相からは、同時代の首長間ネットワークの結節点として古墳に関わる情報は流入していても、社会システムとしての古墳築造が定着していないものとみられる。

そのような背景をもとに板石積石棺墓や土壙墓といった在地の墓制は階層分化が不明瞭な集団墓として存在するのである。すなわち、薩摩地域は古墳は築造しながらも、近畿中央政権を中心とする社会構造には連動していないと考えるのが相応しい。古墳はみられるが定着していない、まさに古墳築造の周縁域なのである。この点からみれば、奥山古墳はまさに薩摩地域の古墳の様相として象徴的な存在であるといえよう。

3. 薩摩地域の土器をめぐって

(1) 穿孔土器

奥山古墳で出土した土器は、壺を除き小型・薄手・精製胎土で、多くが焼成前穿孔を行っていた。土器の穿孔は一般的には壺の底部で見かけることが多いが、奥山古墳の場合、小型丸底壺や高杯といった小型器種が多く認められる一方、壺には穿孔していなかった。

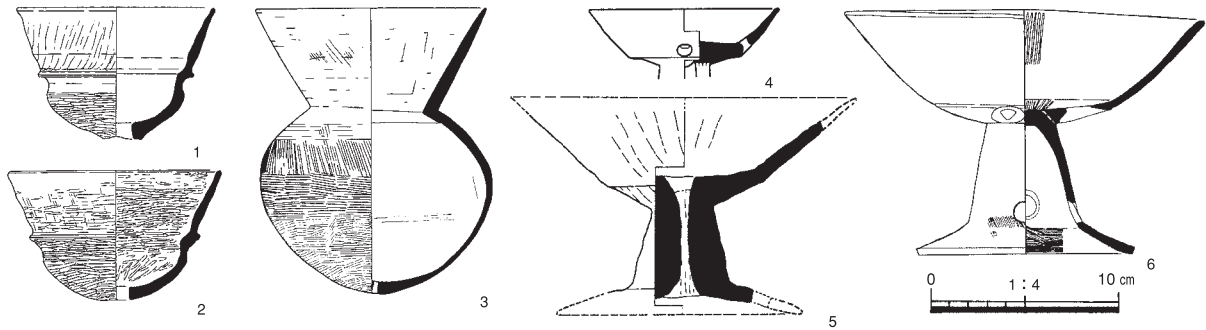
ここではこの穿孔土器について若干見ておきたい。実際にはさらに多くの事例があるとみられるが、小型器種への穿孔で筆者の目に留まった事例を列記する⁽³⁾。

小型丸底壺：福岡県池の上1号墳・広島県大明地1号墳・島根県松本1号墳・兵庫県西求女塚古墳・奈良県能峠南山9号墓・三重県城之越遺跡・長野県森将軍塚古墳・長野県石川条里遺跡 SQ2016・石川県沖町遺跡・石川県高座遺跡・石川県高田遺跡・群馬県行幸田山A区1号墳・千葉県草刈遺跡 103号墓・千葉県草刈遺跡 140号墓・茨城県佐自塚古墳

高杯杯部：福岡県藤崎6・7号方形周溝墓・石川県雨ノ宮1号墳・石川県国分尼塚古墳

高杯脚部（杯貫通）：福岡県津古生掛古墳・静岡県釣瓶落1号墳

直口壺：佐賀県戊遺跡C地点周溝墓・福岡県津古2号墳・福岡県津古生掛古墳・山口県長光寺山古墳・広島県弘住3号墳・鳥取県上神猫山第1号墳・奈良県能峠南山6号台状墓・同能峠南山9号墓・静岡県釣瓶落1号墳・長野県森将軍塚古墳・石川県雨ノ宮1号墳・新潟県中島廻り遺跡・群馬県行幸田山A区1号墳・群馬県堀ノ内CK-2号墳・群馬県堀ノ内DK-4号墳・千葉県草刈遺跡 140号墓・千葉県北作1号墳



1・2.西求女塚古墳 3.長光寺山古墳 4.雨ノ宮1号墳 5.津古生掛古墳 6.藤崎7号墳

図88 穿孔土師器の諸例

広口壺：福岡県博多遺跡群第62次方形周溝墓・鳥取県佐美4号墳・鳥取県イザ原3号墳・大阪府寛弘寺20号墳・神奈川県中坂東1号墓・群馬県行幸田山E区3号方形周溝墓

鉢：佐賀県戊遺跡C地点周溝墓・福岡県津古生掛古墳・千葉県北作1号墳

台付壺：佐賀県金立開拓遺跡ST033

これらの事例はいずれも古墳時代前期の土師器の範疇に含まれる。また、現状で確認し得た事例はほとんどが古墳であり、一部祭祀遺構を含むという状況である。すなわち、土師器小型器種への穿孔は列島の広範な地域の古墳で共通してみることができ、古墳祭式の内部に組み込まれた道具の一種とみることができよう。奥山古墳出土土器を成川式土器が基本である地域の土器様式で理解することは困難である。土師器としての位置づけが必要であり、またこの古墳が広域に連なる土器様式、古墳祭祀のネットワークに連なっていることがあらためて確認できる。単に石棺や周溝をもつといった構造面のみが古墳的な様相なのではなく、そこで執り行われた儀礼行為を含んで古墳としての扱いが確認できるのである。

とくに、長光寺山古墳・西求女塚古墳・森將軍塚古墳・雨ノ宮1号墳といった各地域の代表的な前期有力首長墳から出土していることもこの土器が広域に拡がった古墳祭式において一定の役割をもっていたことがうかがえる。九州内では福岡平野・筑後平野付近で多く認められる。奥山古墳との関係を想定されるのは、この地域の古墳祭祀である可能性を考えておきたい。

また、これらの小型穿孔土師器は山陰・北陸に比較的多く認められることも特徴である。その情報は日本海沿岸地域を中心に拡散している可能性がある。瀬戸内海に面した西求女塚古墳でも山陰系土器が多く出土し、穿孔土器もその中に含まれている。また、近畿中央部の主要古墳では現状では確認されず、瀬戸内・東海でも希薄である。

現状では弥生終末期などの資料を精査していないので、どの地域の祭祀情報が元になって拡散したのかは判断できないが、分布のあり方からみると山陰ないしは福岡がその発信地となった可能性を推測しておきたい。

日本海側ルートを中心とした情報伝播に基づく祭祀土器であったために、古墳時代社会のネットワークが瀬戸内に重点化し相対的に日本海側の重要性が低下する古墳時代中期以降には衰退するものと考えられよう。

(2) 土器の搬入状況

須恵器 薩摩地域では前方後円墳築造に象徴される列島の古墳時代社会と同質化はしていない。しかし、局所的に古墳は築造され、古墳祭祀も伝えられていたことは奥山古墳の成果で明白となった。この地域の社会はどのように外的な関係をもっていたのであろうか。

古墳が少ないこの地域では、古墳出土土器や副葬品などの研究ができない。集落遺跡の情報を中心とすることになるが、しかし、古墳時代前期に関してはそれをうかがえる資料はごくわ

ずかである。古墳時代中期には在地生産していない須恵器が搬入されるので、若干その追求が可能である。奥山古墳の次の段階になるが、須恵器を通して古墳時代中期における薩摩地域の外的交流についてみておきたい。薩摩地域では主要なものを簡潔に記すと下記のような須恵器が確認されている。

TK216 型式：南さつま市金峰町上水流（把手付椀）、指宿市南摺ヶ浜（甗）、同橋牟礼川（甗）、鹿児島市原田久保（把手付椀・無蓋高杯・壺）

TK208 型式：南さつま市金峰町白糸原（甗）、上水流（器台）、日置市吹上町辻堂原（把手付椀）、同下田尻（杯蓋）、同吹上小中原（大型甗・杯蓋）、指宿市尾長谷迫（甗）、南摺ヶ浜（甗・高杯・杯身・杯蓋）、橋牟礼川（甗）

TK23～47 型式：南さつま市金峰町尾ヶ原（杯身）、吹上小中原（高杯）、橋牟礼川（高杯・杯身）、南九州市知覧町小坂上（杯身）、薩摩川内市大島遺跡（杯身・高杯蓋）、同成岡（杯身）、鹿児島市鹿児島大学構内郡元（杯蓋・杯身）、始良町萩原（杯身）

陶質土器：鹿児島市鹿児島大学構内（甗）・指宿市内収集品（把手付椀）⁽²⁾

このうち TK216 型式の須恵器が出土した南摺ヶ浜・上水流遺跡はともに TK208 型式の須恵器が出土しており、薩摩地域の須恵器の搬入は TK208 型式段階からであろうと理解できる。地域的には薩摩半島の主要な集落の形成された各平野にはおおむね分布していることが理解できる。調査の疎密があり、とくに南さつま市金峰町は近年、大規模事業に伴って発掘調査が多く行われたため現状が必ずしも当時の実態を反映しているとはいえないものの、ここでの分布にはやはり注目して良いであろう。古～新型式までを含み、この地域が外的に継続的な地域間交流を行っていたことを確認できる。薩摩地域の中では地域間交流の拠点としての役割を果たしたことが理解できる。

しかしながら、加世田平野地域においても古墳時代中期中葉以降の列島全体に拡がる新たな土器様式として須恵器は受容されず、古墳時代後期に至っても旧来からの土器の中に珍奇なものとして含まれているに過ぎない。他の薩摩各地域でも古墳時代中期中葉～後半を中心とする時期に点的な分布を示すに過ぎない。なかでも、鹿児島市鹿児島大学構内遺跡は他よりも出土量が多く、継続的な須恵器の搬入の認められる遺跡であるが、ここでも大量の成川式土器の中にごくわずかに含まれるにとどまり、日常的な土器様式の中に組み込まれているとはいえない。

その後、古墳時代後期にはむしろ在地の弥生土器以来の伝統をもつ成川式土器を個性化させて行くのである。須恵器以外にも、甗や甗といった朝鮮半島に起源をもち中期後半以降日本列島に広く普及する生活様式は取り入れられない。甗は弥生土器以来の台付甗を炉で使用し、壺には装飾文帯をもちより加飾化を進行させる。土器を代表として、古墳時代における時間の経

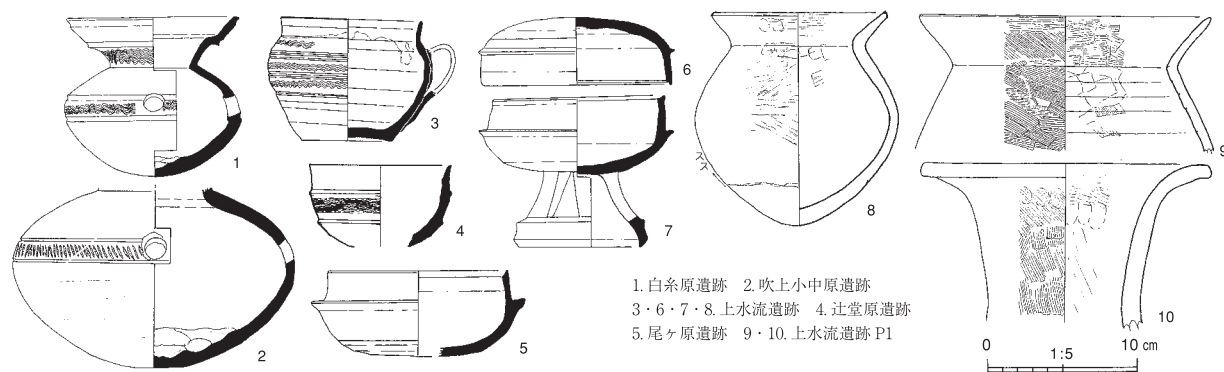


図 89 薩摩地域の搬入土器の諸例

過とともに、古墳時代後期にはさらに埋葬祭祀・生活様式といった各面での独自化が進行して行く。薩摩地域は外的な刺激による新たな社会変化はきわめて緩やかな社会が形成されていたものと考えられる。

庄内系甕・布留系甕 わずかではあるが、奥山古墳の以前にさかのぼる地域間交流の痕跡も確認されている。若干触れておきたい。

加世田平野において万之瀬川に隣接する上水流遺跡では胴部にタタキ目・口縁部のつまみ上げ・尖り底といった特徴をもつ庄内式系統の甕が出土している（図89-8）。芝原遺跡にも同様の土器があり、胴部タタキの上からハケを掛け、肩部には横方向に顕著なハケを掛ける。胴部内面下半はケズリであるが上半はハケとしている。本来の型式からは大きく変容しているが、庄内式土器の影響を受けた搬入土器と考えられ、北部九州の久住編年ⅠB～ⅡA期に相当し（久住1999）、庄内2式～布留0式の範疇であろうと推定する。

また、上水流遺跡の土器埋納ピット1からは布留式系統の甕も出土している（図89-9）。口縁部から胴部上半の破片であるが、胴部上半外面はヨコハケ、頸部をナナメハケとし、胴部内面はヘラケズリとする。明らかに布留甕の影響下にある。口縁端部は丸くおさめ、頸部の屈曲は緩く、直立気味であることからすれば、地域的な変容もあるが布留2～3式併行段階であろう。少なくとも搬入土器であり、地理的には熊本地域が有力な候補であろう。同じ遺構では頸部が長く、口縁部に向かって大きくカーブしながら立ち上がる広口壺が共伴する（図89-10）。広口壺自体が九州に一般的ではなく、瀬戸内系、なかでも四国系土器の可能性が考えられる。

芝原遺跡では破鏡1面と小型倣製鏡が3面も出土しており、まさに弥生時代終末期の広域ネットワークにおける威信財を入手している。

この加世田平野地域には在地の土器のみならず一定量の外来系土器が共伴する可能性は常に念頭におく必要がある。これらモノの移動には常に同時代社会の情報も備わっていたことが想像に難くない。社会を変容させるほどの大きな刺激とはならないまでも南薩地域においても古墳時代社会の情報は確実に伝わっていたことを示している。

そもそも加世田平野地域では、縄文・弥生・中世といった各時代に渡って外来系の土器の搬入が顕著であることが注目されており、当該地域の地域的特質としてみることもできる。そこには地理的環境から一定の生産基盤を有した南限の平野を背景とする南島～日本列島中央部の社会を結ぶ交流の結節点としての機能が想定できよう。古墳時代においてもそのフロンティアとして位置づけることができる。しかし、古墳時代では大隅との比較においてことさら、その機能を誇張し過ぎてもならない。次節では大隅との関係を念頭に入れつつ交流について別の資料からみておこう。

4. 薩摩地域をめぐる広域交流

(1) 薩摩地域と南海産貝製品

奥山古墳の土器、薩摩地域の搬入土器、これらは沿岸地域で多く確認でき、地理的な位置関係からみれば基本的には北の熊本地域を経由したものと推定する。奥山古墳の石棺と天草地域、土器と宇土半島基部の関係はそれを保証している。

ところで、地域間交流であるからには北から一方的に薩摩の地域に流れてきたわけではない。そこには互恵的に北へも運ばれたものがあるはずである。これまでの古墳時代研究において、この地域を経由する交易品と目されてきたのが琉球列島から運ばれた南海産の貝である。

これには木下尚子が多く研究成果を積み上げている。木下は弥生時代前期以降、活発であっ

た北部九州を主体とする南島との交易は弥生後期後半に停滞するが、途絶えたわけではなく、新たに瀬戸内・近畿の集団を交易対象とし、弥生時代終末期には「松ノ尾人」がその集団と南島とを仲介した交易当事者とみた（木下 1994, pp.164-165）。また、古墳時代には九州西海岸を経由する「西の貝の道」に加えて、東海岸を経る「東の貝の道」が現れたことを説く。なかでも、古墳時代前期には、東西2ルートが存在を想定しながらも、宇土半島付近の人々の関与が弥生時代以来維持されていた可能性を指摘する。古墳時代中期に至っても西の貝の道は伝統的的交易路として存続し、弥生時代以来の海人集団が畿内や朝鮮半島とも交流を行ったとする（木下 1996）。

南島産貝製品の交易ルートの実態を考察する上では鹿児島県における貝製品を確認しておく必要がある。これに関してもすでに木下尚子がまとめているので（木下 1999）、ここではその中から薩摩地域における弥生・古墳時代の資料について概要を抽出しておきたい。

南さつま市金峰町高橋貝塚 ゴホウラ貝輪未製品7点・オオツタノハ貝輪未製品6点、ゴホウラ片多数が出土している。ゴホウラには背面利用と腹面利用の2者がある。北部九州の貝輪との中継地であり、ここで交易先の地域の趣向に適した貝輪の作り分けが考えられている。

南さつま市金峰町下小路遺跡 弥生時代中期後半の筑後平野～佐賀平野と推定される北部九州系甕棺から（中園 1999）、諸岡型ゴホウラ貝輪が2点出土している。

枕崎市松之尾遺跡 ゴホウラ2点・オオツタノハ2点・イモガイ5点以上の貝釧が出土している。弥生時代終末期とみられゴホウラは鋏形石の祖型のものである。

薩摩川内市里村中町馬場遺跡（上甕島） 2点のゴホウラ製貝輪が出土している。貝輪は弥生時代中期～終末期の遺物を含む4号貝溜まりから出土している。諸岡型の可能性が考えられ弥生時代中期前半が想定されている。

鹿児島市大龍遺跡 ノミ状のスイジガイ製品が出土している。成川式土器を伴う「5世紀後半から6世紀はじめ」に相当する層とするが、古墳時代後期の笹貫タイプとみられる。南島における日常漁労具と考えられている。

南島の土器を加えると、薩摩地域では縄文晩期～弥生前期に併行するとみられる仲原式土器が、高橋貝塚・上水流遺跡・中町馬場遺跡で出土している（本田 2003, pp.38-39）。

これら以外にも、各時代の南島との交流を示す資料が確認されており、加世田平野は南島との間の交流拠点としての役割が確認できる。しかしながら、一方で薩摩半島で現在確認されている南島産貝輪は大龍遺跡のスイジガイを除き、いずれも弥生時代に属しており古墳時代の資料ではない。薩摩地域の貝交易において、現状では古墳時代に関する痕跡を確認できないのである。熊本地域において貝製品の存在が確認できることをもって、古墳時代においても九州西回りルートが安定的に南島交易に役割を果たしていたとみることは現状の資料に基づく限り困難である。

（2）南島交流路の変動

九州東海岸ルートでは古墳時代中期に地下式横穴墓を中心として、九州南部でも多くの南島産貝製品が副葬品として出土している。木下尚子はこれを「畿内の需要が減少したため、その交易ルート上に滞留することになった」ことに理由を推定する（木下 1996, p.51）。直接言及はしていないが、そこには地下式横穴墓の社会および被葬者を他地域との接触の不活発な、ローカルな墓制としての位置づけはないだろうか。

近年、とくに大隅地域では初期須恵器や朝鮮半島系金属製品などが確認され、古墳時代中期には列島の中でもきわめて地域間交流が活発に行われた地域であることが明らかになってきている（橋本 2008a・b）。その背景に筆者は瀬戸内ルートに直結する九州東岸ルートの境界にお



図90 九州の古墳時代交流路と貝製品

ける拠点であること、南島を含む広域交流の結節点としての役割を考える。

すなわち、九州東岸の地下式横穴墓を取り巻く社会は交流の不活発な閉塞的な社会ではなく、貝製品を含む時代錯誤の前代の文物が社会的滞留によって副葬に至るような状況にはない。むしろ、地下式横穴墓という横穴系墓制とともに、鉄製品を中心とする地下式横穴墓の副葬品は同時代の文物の変遷を常に反映しており、古墳時代中期に現れる貝製品においても南島へ連なる九州東岸ルートでの活性化によるものと考えなければならない。現況の出土資料は一定の同時期の社会を反映しているとみなされる。このことからすれば、南島への交通路は少なくとも古墳時代中期には九州東岸がメインルートであったと理解される。

西岸ルートにおいても、須恵器など土器の他、成川遺跡では朝鮮半島製である鑄造鉄斧や同じく在地生産の考えられない鉄鉾などが確認できる。ただし、単発的で数は少ない。西岸ルート上の薩摩地域に古墳社会が浸透しなかつた

背景には、近畿中央政権の強化に伴って情報・物資流通のメインルートが九州東海岸へ重点化されたことと一体のものであろう。

九州西岸ルートでは八代海・有明海沿岸地域で古墳時代中期の貝製品が出土しており、地理的な要因や他の時代の様相からみても、古墳時代に伝統的な交流の存在を否定する必要はない。しかし、古墳時代の場合、薩摩地域を経由したのはあくまでも八代海・有明海沿岸の首長層が主体となる交易であって、弥生的な地域連鎖的交流の延長にあったものと考えられる。薩摩地域を経由したのは、近畿中央政権に連なる政治・経済的な権力をもった各地域の首長層を介し、列島内外の広範な社会を結びつけた古墳時代交易といったものではなかつたと理解する。

5. 結語－隼人論との関わりとともに－

奥山古墳の発掘調査成果によって、薩摩地域にも埋葬施設や墳丘といったハード面のみならず、古墳祭祀といったソフト面でも古墳といえる存在を明らかにした。しかしながら、この地域では古墳はごく限定された存在でしかなく、筆者は薩摩地域での古墳築造は地域間交流・交易との関係において成立し、古墳は築造しながらも古墳時代の社会秩序には属していない社会と考えた。

薩摩地域の古墳時代にも古墳を築造するだけの力量をもった首長も現れた。しかし、いずれも一過的・単独での古墳築造であり、首長系譜は確認できない。これは、在地内での生産基盤を背景とした階層化や権力構造の醸成による政治的・経済的基盤が未成熟で、情報・物資流通、交易ネットワークといった外的な刺激が単発的に引き起こしたものに過ぎないことに主因が求められよう。この地域ではモノ・情報は古墳時代社会のネットワークに連なりながらも、古墳は構造的な社会関係の表示機能をもっていなかつた。また古墳が在地社会において近畿中央政権との紐帯表示機能ももたなかつたか、もしくは意味をなさなかつた。前方後円墳の不在はそれを表していよう。埴輪も導入されず、鏡や鉄製甲冑などの近畿中央政権との紐帯を表す器物

も出土していない⁽⁴⁾。

古墳時代には南島を結ぶ交流・交易ルートは九州東海岸がメインルートとなった可能性が高い。九州東岸と西岸では交易の質が異なり、西岸では八代海・有明海沿岸の首長層の動向を反映しながらも、情報伝達の地方路線化が進み、結果として古墳時代における時間の経過とともに薩摩地域を他の列島古墳時代の社会的共通性から隔てていったと考える。

八代海・有明海沿岸から筑後地域の首長層は、朝鮮半島や近畿を結ぶきわめて活発な地域間交流を行ったことが石棺輸送や江田船山古墳副葬品に代表されるような出土資料からも明らかであるが、九州西岸ルートの交流はこの地域の首長を軸とし、常に広域に渡る他地域との連鎖を起こすような開放性に欠けている。一方、九州東側ルートは地域間交流の大動脈、瀬戸内から近畿に連なっており、そこから無数に支脈が広がっていたと考えられる。古墳時代に近畿に中央政権が生成し、権力の集中化を進めるに従って東の主流化が進行し、九州の西と東では地域間交流の質は変容していったものと考えられよう。

結果的に、薩摩地域は前方後円墳の築造に代表される近畿地方を中心とする首長間ネットワークに参入せず、弥生時代からの社会変化が確実に起こりつつも、きわめて緩やかに進化したであろうことが考えられる。

奥山古墳被葬者はまさに加世田平野の生産基盤を背景に、天草地域と強く結びつく広域交流を行い、自らの権力の象徴として入り江の丘の上に古墳を築き、古墳祭式によって葬られた薩摩地域の古墳時代首長である。その出自の特定は困難だが、単に在地の社会の中から生み出されたというよりは外的な要因が大きいと考えられることには注目しなければならない。棺形態が被葬者の出自集団に関わる要素を多分に含むとみるこれまでの墳墓研究史を踏まえれば一層その感を強くする(福永 1991・清家 2001 など)。すなわち、その被葬者が交易を背景とした天草地域からの移住者である可能性は高いと考える。

ところで、このような薩摩地域は地理的環境・地質的環境によって、これまでは停滞した社会・孤立的な遅れた社会として、古代国家に異民族として把握される隼人へ至る必然の道程とする歴史像が多く描かれてきた(小田 1966・乙益 1970・上村 1984)。南薩摩地域では成川遺跡の発掘調査などのインパクトがあり、武器を中心とする副葬品をもった土壙墓が主たる墓制と位置づけられることによって、「階層未分化な、かつ素朴で勇猛なる人々の集団」というイメージが与えられた(斉藤・田村 1974,p.156)。これはとりもおさず文献史上に現れる熊襲・隼人のイメージを考古資料に当てはめて解釈したものといえよう。

土壙墓が薩摩地域の主要墓制であり、隼人の墓制、とくに阿多隼人の墓制であるとみる考え方は(乙益 1970,pp.106-110・1986,pp.96-99)、考古資料から帰納的に「民族」が抽出されたのではなく、むしろはじめから文献によってすり込まれた隼人のイメージで考古資料を解釈したものである。しかし、古墳を造ることは常に列島社会の必然なのであるだろうか。それが、すなわち停滞であり、異民族に結びつくものなのであるだろうか。

和歌山県磯間岩陰遺跡・長野県鳥羽山洞穴・千葉県大寺山洞穴・岩手県五松山洞穴などの埋葬や副葬品にみるように、古墳時代に中期・後期にあっても、古墳築造を行わず首長層に匹敵する文物を入手する集団が列島各地にいる。このような人々も古墳被葬者と共通する威信財をもち、一定の自立的な集団関係が維持できたことを示している。古墳時代には近畿中央政権に連なる古墳墓制によって表示される社会秩序が存在し、地域ごとに首長層を中心とする権力組織が複雑に連携しあう支配者層を形成しつつも、その社会関係の影響力には強弱や及ばない範囲がまだまだ多元的に存在していたのである(橋本 2007,pp.13-16)。

隼人はあくまでも古墳時代の時間の経過の中で形成された独自性が7世紀後半の古代国家形成時に異種なものとして切り離された結果生み出されたものであって地域史の必然ではない。

奥山古墳は、古墳という存在が近畿を中心とする列島の広域政治体制への連携を明示しながらも、一元的な日本列島の統合を象徴したものではなく、地域的多様性を内包していたその本義を端的に示しているのである。

【註記】

- 1 大隅半島南部の肝付町岸良浜から壺が出土している。砂丘での出土で、詳細は不明ながら土器棺墓の可能性が考えられる。大隅半島の中でも古墳の存在しない地域には土器棺墓・土壙墓が存在した可能性が高い。
- 2 2007年度、鹿児島大学構内遺跡出土の陶質土器甕は朝鮮半島西南部系でTK47型式前後に併行するものと筆者はみている。指宿市内で収集された把手付椀は来歴が不明で出土品かどうかとも確定できない。
- 3 これらの抽出には、埋蔵文化財研究会1989、青山2004、谷内尾2005を主に参考にした。青山の図表を読み込めばさらに多くの資料の存在がわかるが、ここでは傾向を示せばよく、すべてを網羅していない。
- 4 三角縁神獸鏡が薩摩川内市新田神社に1面奉納されているが、薩摩地域で出土したという保障はない。横柄板鋳留短甲は出水市溝下板石積石棺墓群で1例出土しているが、出土状況は不明である。

【参考文献】

- 青山博樹 2004「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』18 日本考古学協会 pp.73-92
- 池畑耕一 1990「高塚古墳の南限とその築造時期」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 pp.327-348
- 1992「考古資料からみた隼人の宗教観」『古代文化』44-7 (財)古代学協会 pp.23-33
- 池水寛治 1971「小浜崎古墳群」『長島の古墳』長島町教育委員会 pp.17-27
- 小田富士雄 1966「九州」『日本の考古学Ⅳ 古墳時代(上)』河出書房新社 pp.114-174
- 乙益重隆 1970「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本3 九州』角川書店 pp.90-111
- 1986「南九州における部族と墓制 古墳時代の終焉にむけて」『えとのす』31 新日本教育図書株式会社 pp.94-100
- 木下尚子 1994「鋳形石の誕生－かたちの系譜－」『日本と世界の考古学－現代考古学の展開－』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 pp.145-169
- 1996「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』81-1 日本考古学会 pp.1-81
- 1999「鹿児島県の古代貝文化」『鹿児島考古』33 鹿児島県考古学会 pp.15-42
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式へ移行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会 pp.62-143
- 齊藤忠・田村晃一 1974「総括」『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告第七 文化庁 pp.148-157
- 清家 章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会 pp.1-18
- 中園 聡 1999「地域の様相－南限の甕棺墓の実態にふれつつ－」『考古学ジャーナル』451 ニューサイエンス社 pp.27-28
- 中村友昭 2008「岡崎18号墳2号地下式横穴墓の貝釧」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.243-256
- 中村直子 2000「山川町の先史時代の遺跡」『山川町史(増補版)』山川町 pp.67-149
- 橋本達也 2007「古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究」『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp.1-18
- 2008a「岡崎18号墳出土の須恵器の型式学的位置とその意義」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.225-232
- 2008b「岡崎18号墳出土鉄製品と肝属平野周辺域をめぐる広域交流」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.269-276
- 繁昌正幸 2005「成川群集墓の全体像」『縄文の森から』3 鹿児島県立埋蔵文化財センター pp.29-40
- 福永伸哉 1991「木棺墓と人の交流」『原始・古代日本の墓制』山岸良二編 同成社 pp.147-160
- 本田道輝 2003「土器にみる南島と九州島との交流－縄文時代における南島土器北上の痕跡－」『離島の豊かな発展のための学際的研究－離島学の構築(No.3)－』鹿児島大学 pp.37-40
- 埋蔵文化財研究会編 1989『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
- 谷内尾晋司 2005「若干の考察－雨宮1号墳の土器祭式と出土土器の編年的位置について－」『史跡 雨宮古墳群』鹿西町教育委員会 pp.146-152

第4部 奥山古墳の研究総括



1. 埋め戻し作業中 2. 埋め戻し直後 3. 2007年3月

図91 石棺埋め戻しとその後

1. 発掘調査の成果

(1) 埋葬施設

昭和16年以來の箱式石棺の再調査によって、石棺は全長259cm、最大幅72.5cm、内法長200cm、内法幅51～61cmであることを確認した。側石は中央部で重ね接ぎし、両小口には2枚の石材を用いる。製作・加工技術は天草～宇土半島地域と深い関係がある。

砂岩・安山岩・凝灰岩という三種の石材を用いており、とくに砂岩は長島～天草地域にみられる石材である。技術とともに棺材自体が搬入品と考えられることが判明した。

(2) 古墳の立地と墳丘形態

万之瀬川旧河口に近在し、吹上浜砂丘に面して形成された潟湖に突き出す尾根の先端部を利用した直径13.5mの規模をもつ円墳であることを確認した。墳丘は尾根の前面・側面の三方をテラス面、背面は尾根に直交する墳丘区画溝によって区画している。墳丘区画溝は途中で途切れ、渡り土手が造られている。

(3) 出土遺物と古墳祭祀

土器は墳丘区画溝内、渡り土手に近い区画に集中して出土した。出土土器は古墳時代前期後半に位置づけられる。焼成前穿孔が顕著な小型土器群と壺からなる祭祀土器群とみなされる。いずれも在地の成川式土器ではなく土師器であり、外的な影響を受けた土器である。

2. 南限域の古墳時代における奥山古墳の意義

南薩地域は縄文時代以來の各時代に鹿児島を代表する遺跡が継続的に営まれた地域である。高橋貝塚・入来遺跡・松木藪遺跡・中津野遺跡・辻堂原遺跡、鹿児島の弥生～古墳時代の標識遺跡がもっともひしめく地域である。しかしながら、古墳時代に前方後円墳を中心とする墓制は導入しておらず、基本的には非古墳築造地域であり、今後も新たに古墳が発見されたとしても、主体的な古墳築造を行わなかった地域とみて間違いない。

その中であって、奥山古墳が単なる石棺墓ではなく、墳丘をもち、古墳祭祀まで執り行っていたことが判明し、古墳築造にかかわる複合的な葬送観念、技術、古墳築造に表される社会的背景が当地域にも及んでいたことを明らかにした。

奥山古墳築造の背景には、日本列島の南北を結ぶ海上交易拠点を掌握し、古墳時代社会に連なった南薩の地理的条件が大きな役割を果たしている可能性が考えられよう。とくに、石棺からみて古墳築造に天草～宇土半島地域の集団が密接に関与していることが明らかで、この古墳の出現に地域間交流が大きな役割を果たしていたことは疑い得ない。

奥山古墳は加世田平野の南端に存在する。九州西回り航路において、加世田平野は南島へ向かう最後の平野であり、農耕を基盤として拠点－周辺集落を伴う社会が形成される九州西岸の南限の地である。また南島から渡り来る最初の平野である。中世以降では、南島航路の拠点として栄えたことが知られている。ここは、南島からの人が最初に目撃する古墳時代社会であり、古墳時代人が最後に渡る場である。奥山古墳は、古墳時代社会南西部の境界を画する象徴的な存在なのである。そこにこの古墳の存在意義があるものとみたい。今回の調査によって古墳時代社会の境界の実像を多少なりとも明らかにし得たものと考えている。